

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第645集

しまのこし 島越Ⅱ遺跡・しまのこし 島越XⅣ遺跡・すげのくぼ 菅窪遺跡
発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

2015

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
(公財) 岩手県文化振興事業団

島越Ⅱ遺跡・島越XⅣ遺跡・菅窪遺跡 発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路建設事業に関連して、平成25年度に発掘調査された田野畑村鳥越Ⅱ遺跡・鳥越Ⅰ遺跡・菅窪遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。今回の調査によって、いずれの遺跡からも縄文時代の遺構・遺物が多数確認され、周辺地域における過去の暮らしを知るための手がかりとなる貴重な資料を得ることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、田野畑村教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成27年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野洋樹

例 言

- 1 本報告書は、岩手県下閉伊郡田野畑村島越399-2ほかにある島越Ⅱ遺跡、同村島越302-2ほかにある島越Ⅲ遺跡、同村菅窪141-1にある菅窪遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、三陸沿岸道路建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、三陸国道事務所の委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳における遺跡番号と今回の調査における遺跡略号は以下のとおりである。
島越Ⅱ遺跡：遺跡番号…KG33-2047 遺跡略号…SKⅡ-13
島越Ⅲ遺跡：遺跡番号…KG33-2058 遺跡略号…SKⅢ-13
菅窪遺跡：遺跡番号…KG22-2345 遺跡略号…SGK-13
- 4 発掘調査期間・面積・担当者は以下のとおりである。
島越Ⅱ遺跡：平成25年7月1日～8月9日／3,100㎡／小林弘卓・森裕樹
島越Ⅲ遺跡：平成25年8月19日～11月22日／1,400㎡／小林弘卓・森裕樹・立花雄太郎
菅窪遺跡：平成25年10月15日～11月15日／1,600㎡／星雅之・立花雄太郎
- 5 室内整理期間・担当者は以下のとおりである。
島越Ⅱ遺跡：平成25年11月1日～11月30日、平成26年1月1日～1月31日／小林弘卓
島越Ⅲ遺跡：平成25年11月1日～平成26年3月31日／小林弘卓・立花雄太郎
菅窪遺跡：平成25年12月1日～平成26年3月31日／星雅之・立花雄太郎
- 6 報告書の執筆は、第Ⅰ章を国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、第Ⅱ章を小林・立花、第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ章を小林、第Ⅵ章を星が担当・執筆した。本書の構成・編集は小林が行った。
- 7 試料の分析・鑑定は次の機関と個人に依頼した。
炭化樹種の同定…阿部利吉(元岩手県木炭協会)
石材・石質鑑定…花崗岩研究会
放射性炭素14年代測定…株式会社加速器分析研究所
- 8 基準点測量は、島越Ⅱ遺跡は株式会社スズマ測量設計、島越Ⅲ・菅窪遺跡は株式会社ダイヤに、航空写真撮影は東邦航空株式会社に委託した。
- 9 今回の発掘調査で出土した遺物と諸記録は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 10 調査成果は、既に当センターのホームページ、現地説明会資料、調査既報等に公表しているが、記載が異なる場合は本書の報告がすべてに優先する。

凡 例

- 1 遺構実測図の縮尺は以下の次のとおりで、一部異なるものは各図にスケールと縮尺を付した。
 竪穴住居跡・住居状遺構…1/60
 竪穴住居跡の炉…1/30
 土坑・陥し穴状遺構…1/40
 焼土遺構…1/30
- 2 層位は基本層序にはローマ数字を、遺構の埋土にはアラビア数字を用いた。
- 3 遺構図版中の土器は「RP」、石器および礫は「S」と表記した。
- 4 各遺物の縮尺は原則以下のとおりである。これに依らないものもあるが、それは別に示している。
 土器・礫石器…1/3・1/4
 石器類・土製品…1/2・2/3
- 5 遺物観察表の法量について、残存値は()で、推定値は< >で表した。
- 6 遺構図版及び遺物図版中に網掛けをしている範囲については、個々に凡例を付している。
- 7 土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に基づいている。
- 8 国土地理院発行の地形図を掲載したのものには、図中に図幅名と縮尺を付した。

目次

I 調査に至る経過……………1

II 立地と環境

- 1 遺跡の位置と立地……………1
- 2 周辺の地形……………3
- 3 周辺の遺跡……………3

III 調査・整理の方法

- 1 野外調査……………8
 - (1) 試掘・表土除去……………8
 - (2) 遺構検出と精査……………8
 - (3) 写真撮影……………8
- 2 室内整理……………8
 - (1) 遺構の整理……………8
 - (2) 遺物の整理……………8
 - (3) 写真撮影と整理……………9
 - (4) 整理事業経過……………9

IV 鳥越Ⅱ遺跡

- 1 遺跡の概観……………10
- 2 調査の概要……………10
 - (1) 調査経過……………10
 - (2) 基本層序……………10
- 3 検出遺構……………13
 - (1) 竪穴住居跡……………13
 - (2) 土坑……………13
 - (3) 陥し穴……………14
- 4 出土遺物……………25
- 5 自然科学分析……………25
- 6 総括……………28

V 鳥越Ⅳ遺跡

- 1 遺跡の概観……………37
- 2 調査の概要……………37
 - (1) 調査経過……………37
 - (2) 基本層序……………37
- 3 検出遺構……………40
 - (1) 竪穴住居跡……………40
 - (2) 土坑……………43
 - (3) 焼土遺構……………46
 - (4) 遺物包含層……………47
- 4 出土遺物……………56
 - (1) 土器……………56
 - (2) 土製品……………57
 - (3) 石器・石製品……………57
- 5 自然科学分析……………80
- 6 総括……………83

VI 菅窪遺跡

- 1 調査概要……………111
- 2 基本層序……………111
- 3 検出遺構……………114
 - (1) 竪穴住居跡……………114
 - (2) 土坑……………116
 - (3) 陥し穴……………117
 - (4) 焼土遺構……………117
- 4 出土遺物……………123
 - (1) 縄文土器……………123
 - (2) 土製品……………124
 - (3) 石器類……………124
- 5 自然科学分析……………137
- 6 総括……………140

報告書抄録……………159

図版目次

第1図	遺跡位置図	2	第3図	周辺の遺跡図	6
第2図	地形分類図	4			

島越Ⅱ遺跡

第4図	調査範囲図	11	第8図	S K T 05～08陥し穴	22
第5図	遺構配置図	12	第9図	S K T 09～12陥し穴	23
第6図	S I 01竪穴住居跡、S K 02・05土坑	20	第10図	S K T 13～16陥し穴	24
第7図	S K T 01～04陥し穴	21	第11図	S K T 17、土器	25

島越Ⅳ遺跡

第12図	調査範囲図	38	第27図	土器6 (S K 01②・03・05～07、遺構外①)	64
第13図	遺構配置図	39	第28図	土器7 (遺構外②)	65
第14図	S I 01竪穴住居跡	48	第29図	土器8 (遺構外③)	66
第15図	S I 02竪穴住居跡	49	第30図	土器9 (遺構外④)	67
第16図	S I 03竪穴住居跡	50	第31図	土器10 (遺構外⑤)	68
第17図	S I 03石囲炉	51	第32図	土器11 (遺構外⑥)	69
第18図	S I 04竪穴住居跡	52	第33図	土製品、石器・石製品1 (S I 01・02)	70
第19図	S I 05・06竪穴住居跡	53	第34図	石器・石製品2 (S I 03①)	71
第20図	S K 01～04土坑	54	第35図	石器・石製品3 (S I 03②・04)	72
第21図	S K 05～07土坑、S N 01焼土遺構	55	第36図	石器・石製品4 (S I 05・06、S K 06、遺構外①)	73
第22図	土器1 (S I 01)	59	第37図	石器・石製品5 (遺構外②)	74
第23図	土器2 (S I 02)	60	第38図	石器・石製品6 (遺構外③)	75
第24図	土器3 (S I 03・04①)	61			
第25図	土器4 (S I 04②)	62			
第26図	土器5 (S I 04③・06、S K 01①)	63			

菅窪遺跡

第39図	調査範囲図	112	第47図	3号住出土土器	127
第40図	遺構配置図	113	第48図	4号住出土土器	128
第41図	1号住	118	第49図	1・3・4号土坑、遺構外出土土器①	129
第42図	2号住	119	第50図	遺構外出土土器②、出土土製品	130
第43図	3号住	120	第51図	1～3号住出土石器	131
第44図	4号住、1・3号土坑	121	第52図	3号住出土石器②	132
第45図	4号土坑、1号陥し穴、1・2号焼土	122	第53図	3号住出土石器③	133
第46図	1・2号住出土土器	126	第54図	4号住、遺構外出土土器	134

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	7	第5表 土器観察表(菅窪遺跡)	135
第2表 土器観察表(鳥越Ⅱ遺跡)	25	第6表 土製品観察表(菅窪遺跡)	136
第3表 土器・土製品観察表(鳥越Ⅳ遺跡)	76	第7表 石器類観察表(菅窪遺跡)	136
第4表 石器・石製品観察表(鳥越Ⅳ遺跡)	79		

写真図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第3図 周辺の遺跡図	6
第2図 地形分類図	4		

鳥越Ⅱ遺跡

写真図版1 調査区全景、 S I 01 竪穴住居跡(1)	30	写真図版4 S K T 03-06 陥し穴	33
写真図版2 S I 01 竪穴住居跡(2)	31	写真図版5 S K T 07-10 陥し穴	34
写真図版3 S K 02・05 土坑、 S K T 01・02 陥し穴	32	写真図版6 S K T 11-14 陥し穴	35
		写真図版7 S K T 15-17 陥し穴、出土土器	36

鳥越Ⅳ遺跡

写真図版8 調査区全景	87	写真図版20 土器1(S I 01・02①)	99
写真図版9 S I 01 竪穴住居跡(1)	88	写真図版21 土器2(S I 02②・03)	100
写真図版10 S I 01 竪穴住居跡(2)、 S I 02 竪穴住居跡(1)	89	写真図版22 土器3(S I 04)	101
写真図版11 S I 02 竪穴住居跡(2)	90	写真図版23 土器4 (S I 06、S K 01・03・05~07)	102
写真図版12 S I 03 竪穴住居跡(1)	91	写真図版24 土器5(遺構外①)	103
写真図版13 S I 03 竪穴住居跡(2)	92	写真図版25 土器6(遺構外②)	104
写真図版14 S I 04 竪穴住居跡(1)	93	写真図版26 土器7(遺構外③)・土製品	105
写真図版15 S I 04 竪穴住居跡(2)、 S I 05 竪穴住居跡(1)	94	写真図版27 石器・石製品1(S I 01・02)	106
写真図版16 S I 05 竪穴住居跡(2)、 S I 06 竪穴住居跡	95	写真図版28 石器・石製品2(S I 03①)	107
写真図版17 S K 01-04 土坑	96	写真図版29 石器・石製品3 (S I 03②・04-06、S K 06)	108
写真図版18 S K 05-07 土坑、S N 01 焼土遺構	97	写真図版30 石器・石製品4(遺構外①)	109
写真図版19 S N 02 焼土遺構、遺物包含層、 調査前・作業風景	98	写真図版31 石器・石製品5(遺構外②)	110

菅窪遺跡

写真図版32 航空写真	145	写真図版39 1号陥し穴、1・2号焼土、 作業風景	152
写真図版33 調査前風景、トレンチ、 調査区全景	146	写真図版40 1~3号住出土土器	153
写真図版34 1号住	147	写真図版41 4号住、1号土坑出土土器	154
写真図版35 2号住	148	写真図版42 3・4号土坑、遺構外出土土器、 土製品	155
写真図版36 3号住	149	写真図版43 1~3号住出土土器	156
写真図版37 4号住	150	写真図版44 3・4号住出土土器	157
写真図版38 1~4号土坑	151	写真図版45 遺構外出土土器	158

I 調査に至る経過

鳥越Ⅱ遺跡・鳥越Ⅲ遺跡・菅窪遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業(田野畑南～尾肝要)の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

鳥越Ⅱ遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月2日付け国東整陸二調第702号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年11月26日～27日にわたり試掘調査を行い、平成25年1月30日付け教生第1542号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

鳥越Ⅲ遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年12月21日付け国東整陸二調第704号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年2月4日に試掘調査を行い、平成25年3月11日付け教生第1847号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

菅窪遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年2月25日付け国東整陸二調第1079号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年3月5日～6日にわたり試掘調査を行い、平成25年5月8日付け教生第185号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成25年8月30日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

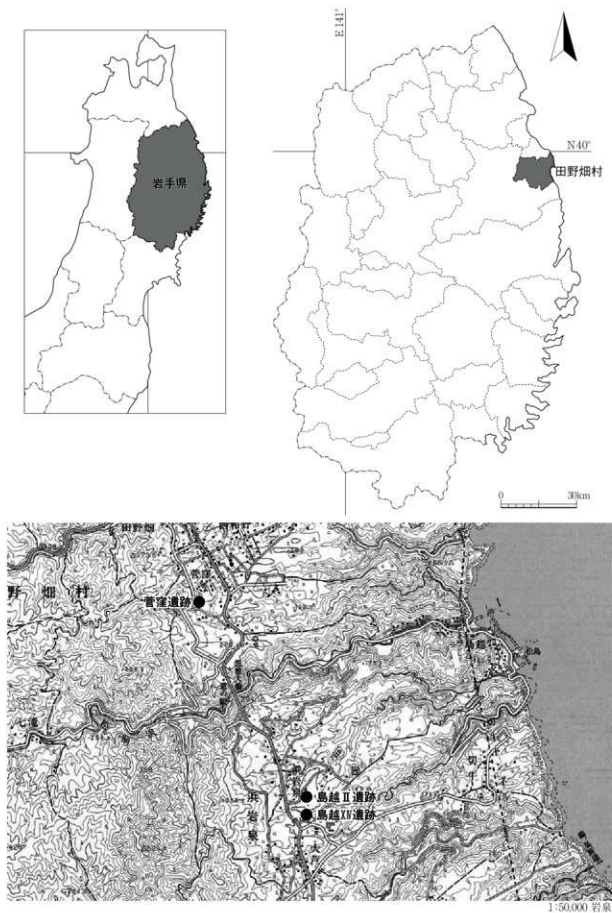
(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

II 立地と環境

1 遺跡の位置と立地

鳥越Ⅱ遺跡・鳥越Ⅲ遺跡・菅窪遺跡がある田野畑村は、岩手県の沿岸北部に位置し、北は普代村、西・南は岩泉町と接し、東は太平洋に面する村である。総面積は156.19km²で、総人口は約3800人(平成22年現在)を数える。村域の現況は、山地率約84%で自然に恵まれ、酪農業と水産業を主体とした産業が発達している。

鳥越Ⅱ遺跡・鳥越Ⅲ遺跡は、田野畑村役場から南南東へ約4.5km、村内の浜岩泉・鳥越地区の境界に所在し、東方約1.5kmの地点には縄文時代中～後期の県指定史跡である館石野Ⅰ遺跡がある。地形図上では、国土地理院発行2万5千分の1地形図「小本」(NJ-54-13-1-2)、5万分の1地形図「岩泉」(NJ-54-13-1)の図幅に含まれる。



第1図 遺跡位置図

菅窪遺跡は、田野畑村役場から南へ約1km、菅窪地区に所在する。地形図上では、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「田野畑」(NJ-54-13-1-1)、5万分の1地形図「岩泉」(NJ-54-13-1)の図幅に含まれる。

2 周辺の地形

鳥越Ⅱ遺跡・鳥越Ⅲ遺跡・菅窪遺跡がある田野畑村は、北上山地の北東部に位置し、村域の東部で太平洋と接している。ここでは田野畑村内や3遺跡周辺の地形を見ていくことにする。

田野畑村は、村域の西側から南側にかけて野辺山(916m)、続石山(591m)、亀山(498m)など標高400～900mの山々が連なっており、中～小起伏の山地を形成し、東側は海岸段丘による台地・丘陵地となっている。段丘は北側ほど標高が高く、南下するにつれて低くなる傾向がある。村域の殆どが山地・丘陵地となり、大規模な平野は存在せず、村内を北東流する普代川、東流する平井賀川や松前沢、真木沢などの河川沿いに、小規模な谷底平野や氾濫平野が形成されている。海岸部に目を向けてみると、村内を東流し太平洋に注ぐ河川の河口部には村内では数少ない浜が形成されているが、海岸の多くは比高約100mの海食崖で、そこから磯を形成している。利用できる土地が少なく、現在の集落は、山間部の谷底平野や、東部の段丘、丘陵地上に集中する傾向がある。

村内の遺跡の分布を見てみると、海岸方向に広がる丘陵地や砂礫段丘上に分布する遺跡と、西部山間地の川沿いに広がる谷底平野上に分布する遺跡とに大別できる。傾向としては、等高線の間隔が広く、比較的傾斜が緩やかな地域に遺跡が集中していて、北部方面の山地に行くにつれて希薄になっていくようである。

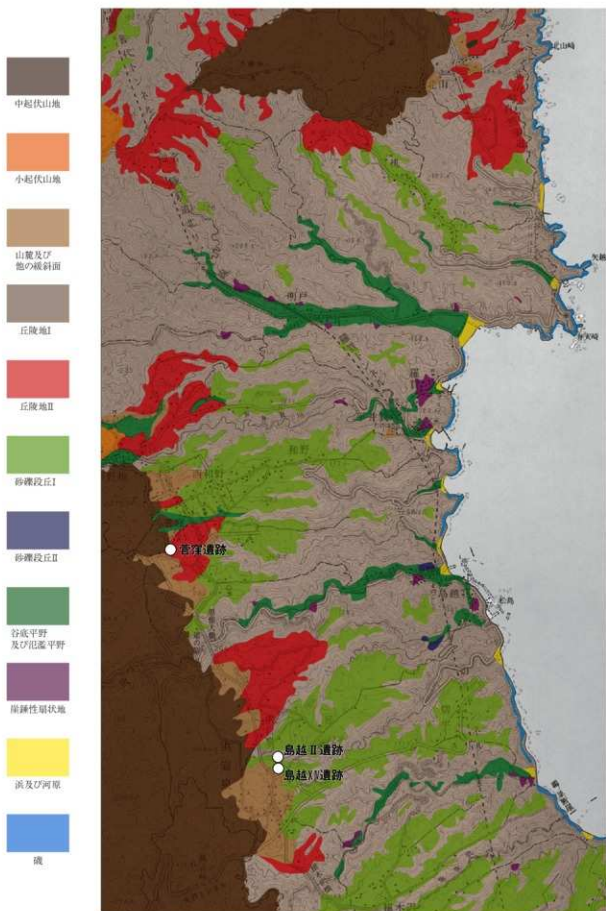
本書で報告する3遺跡の内、菅窪遺跡は本図幅の北西部の菅窪地区にあり、南西部に連なる山地と海岸部に向かって傾斜する丘陵地の境目に立地しており、標高は248～251mである。鳥越Ⅱ遺跡・鳥越Ⅲ遺跡は、本図幅東部から南部に広がる鳥越地区の、海岸部に向かって広がる砂礫段丘上に立地しており、標高は193～198mである。

3 周辺の遺跡

田野畑村内では、平成25年3月現在で、147カ所の遺跡が確認されている。その中には、弥生時代・古代・中世の遺跡も見られるものの、そのほとんどが縄文時代の遺跡となっている。本図幅中には、51カ所の遺跡が確認されているが、こちらもそのほとんどが、縄文時代の遺跡である。今回は報告する3遺跡周辺で調査が行われた遺跡を中心に見ていくことにする。

鳥越Ⅱ遺跡、鳥越Ⅲ遺跡、菅窪遺跡の周辺では、平成25年3月現在で6遺跡の調査が行われていて、さらに平成25年度には5遺跡の調査が行われ、計11遺跡が調査されている。

鳥越Ⅱ遺跡・鳥越Ⅲ遺跡の周辺では、北東約1.5kmにある館石野Ⅰ遺跡と、南西約700mにある浜岩泉Ⅰ遺跡がある。館石野Ⅰ遺跡は、昭和62年～平成5年の早稲田大学や、平成13・14年の田野畑村教育委員会の調査によって、縄文時代中期～後期にかけての列石遺構が確認されるなど、大規模な祭祀・集落跡であることが確認され、平成9年に岩手県による史跡の指定を受けている。浜岩泉Ⅰ遺跡は、平成8年に岩手県埋蔵文化財センターが調査を行っていて、縄文時代中期の大規模な集落跡であると確認されている。この2つの遺跡のほか、調査は行われていないが、ほぼ完形品の遮光器土偶を地権者が耕作中の畑の中から偶然発見している浜岩泉Ⅱ遺跡、平成12年に調査が行われ、縄文時代～



第2図 地形分類図

弥生時代にかけての竪穴住居と50基以上の土坑群などが確認された、大芦赤空洞遺跡などがある。

菅窪遺跡の周辺では、北東約2kmにある和野Ⅰ遺跡が、平成13年に岩手県埋蔵文化財センター、平成16・18年に田野畑村教育委員会で調査が行われている。この遺跡は、縄文時代中期の集落跡や古代と考えられる集落跡と、縄文時代前期～中期の捨て場が確認されている。このほか、平成15年に岩手県埋蔵文化財センターで調査した、和野ソマナイ遺跡と和野新磐神社遺跡がある。和野ソマナイ遺跡では、縄文時代後期の竪穴住居と土坑・陥し穴、時期不明の掘立建物跡が検出されており、和野新磐神社遺跡では、陥し穴状遺構が検出されている。また、菅窪遺跡から北東の羅賀地区に位置する野場Ⅰ遺跡は、昨年度から今年度にかけて調査が行われ、縄文時代前期～晩期の集落跡が確認されている。

参考・引用文献

岩手県 1973『北上山系開発地域土地分類調査-岩泉-』

金子昭彦 1991『岩手県田野畑村出土の透光器土偶について』岩手考古学第3号

早稲田大学文学部考古学研究室・田野畑村 1997『館石野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』

田野畑村教育委員会 2000『大芦赤空洞遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第5集

田野畑村教育委員会 2001『館石野Ⅰ遺跡第9次発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第7集

田野畑村教育委員会 2002『館石野Ⅰ遺跡第10次発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第9集

田野畑村教育委員会 2003『和野Ⅰ遺跡第3次発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第15集

田野畑村教育委員会 2006『和野Ⅰ遺跡第4次発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第16集

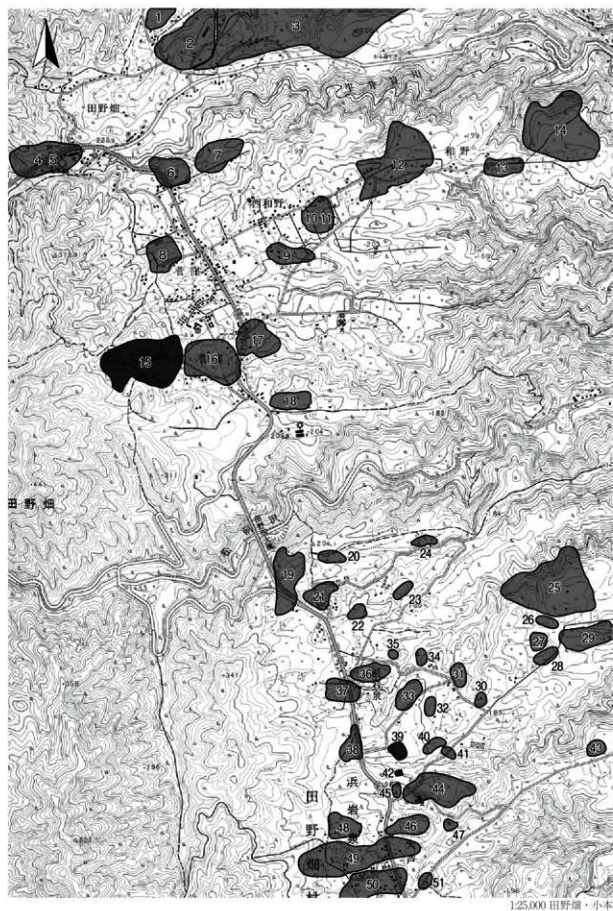
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996『浜岩泉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第276集(以下岩文振〇〇集と略)

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩文振第452集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003『和野新磐神社遺跡発掘調査報告書』岩文振第455集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003『和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書』岩文振第466号



1:25,000 田野畑・小本

第3図 周辺の遺跡図

第1表 周辺遺跡一覧表

№	遺跡名	種別	時代	主な遺構・遺物	備考
1	田野畑新田Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	
2	羅賀Ⅱ	散布地	縄文・弥生・古代	弥生土器	
3	野場Ⅰ	散布地	縄文	竪穴住居・縄文土器・後期耳飾・弥生土器	平成24年・25年岩理文調査
4	平波沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	
5	平波沢Ⅱ	散布地	弥生	弥生土器	
6	和野新屋神社	散布地	縄文	陥し穴状遺構、縄文土器	平成15年岩理文455集
7	和野ソマナイ	集落跡	縄文	竪穴住居・竪立柱建物跡・土坑・陥し穴・縄文土器	平成15年岩理文466集
8	音産長屋構	散布地	縄文・古代	縄文土器・須恵器	
9	西和野Ⅲ	集落跡	縄文	縄文土器・刺片	
10	西和野Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器・石斧・石匙・石鏃・首飾青石珠	
11	西和野Ⅱ	散布地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器	
12	和野Ⅰ	集落跡	縄文	竪穴住居・捨て場・貯蔵穴・竪立柱建物跡・縄文土器・土師器	平成13年岩理文452集、平成16年田野畑村第15集、平成18年田野畑村第16集
13	和野下屋敷	散布地	縄文	縄文土器・石核	
14	和野Ⅱ	集落跡	弥生・古代	弥生土器・土師器	
15	菅窪	集落跡	縄文	竪穴住居・縄文土器	報告遺跡
16	音産Ⅰ	集落跡	縄文	注口土器・香炉型土器・両頭石棒	
17	音産中山	散布地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器・土師器	
18	松前沢十文字	散布地	縄文	縄文土器	
19	浜岩泉Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	
20	浜岩泉Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	
21	鳥越ⅩⅢ	散布地	縄文	縄文土器	
22	鳥越Ⅹ	散布地	縄文	縄文土器	
23	鳥越ⅩⅠ	散布地	縄文	縄文土器	
24	鳥越ⅩⅡ	散布地	縄文	縄文土器	
25	館石野Ⅰ	祭祀跡 集落跡	縄文	竪穴住居・列石遺構・貯蔵穴・石斧・石槍	県指定史跡 平成9年早稲田大学・田野畑村、平成14年田野畑村第9集
26	館石野Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	
27	館石野Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器(繊維)	
28	館石野Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器(繊維)	
29	館石野Ⅱ	散布地	縄文	石器	
30	鳥越Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器	
31	鳥越Ⅴ	集落跡	縄文	縄文土器	
32	鳥越Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	
33	鳥越Ⅲ	集落跡	縄文	縄文土器・石器	
34	鳥越Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器(繊維)	
35	鳥越Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	
36	鳥越Ⅹ	散布地	縄文	縄文土器	
37	浜岩泉Ⅴ	散布地	縄文	(縄文土器)	
38	浜岩泉Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	
39	鳥越Ⅱ	散布地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器・石器・石鏃	報告遺跡
40	鳥越Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	
41	大芦Ⅲ	集落跡	縄文	縄文土器	
42	鳥越ⅩⅣ	集落跡	縄文	竪穴住居・縄文土器	報告遺跡
43	大芦Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器・石斧	
44	大芦Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器(繊維)・竪穴住居・石鏃・石槍	
45	大芦Ⅱ	散布地			
46	浜岩泉Ⅲ	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文土器	平成25年岩理文調査
47	大芦赤空洞	集落跡	縄文・弥生	竪穴住居・土坑・縄文土器・弥生土器・石斧	平成12年田野畑村第5集
48	浜岩泉フケノ沢南	散布地	縄文	縄文土器・石器	
49	浜岩泉Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器・遮光器土偶	
50	浜岩泉Ⅰ	集落跡	縄文	竪穴住居・土坑・磨製石斧	平成8年岩理文276集
51	真木沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	

Ⅲ 調査・整理の方法

1 野外調査

(1) 試掘・表土除去

岩手県教育委員会生涯学習文化課が実施した試掘調査の結果に基づいて、その試掘箇所をあらかじめ掘削し、遺構が検出される層位やそれまでの堆積土層を観察した。その後、重機による表土掘削が行える状態となるよう試掘トレンチを新設し、それについては遺物の出土状況も掴みながら、同様の作業を行った。

(2) 遺構検出と精査

各遺跡とも遺構の検出は、試掘の結果をもとに、重機による表土掘削後に地山面で行った。基本層序や作業の進行については、各遺跡で異なるため、詳細は各遺跡の前段部分に後述している。

精査に関しては、堅穴住居跡は四分法、その他の遺構については二分法を原則としたが、重複が著しかった場合など、それに拠れない遺構もある。個々の遺構は、土層の堆積や遺物の出土状態、遺構の全景を主体に写真撮影を行い、状況を見ながら土層図は人力で、平面図は電子平板により作図した。

遺構内の出土遺物は、遺構名と出土層位や地点を記載して取りあげ、床面・底面から出土したものは、原則平面図に出土地点を入れた。遺構外からの出土分は、遺跡内の大まかな出土位置と層位を記して取りあげた。

なお、今回の報告遺跡については、調査区が狭小であることから、グリッド設定は行わないこととした。図示した平面図には、平面直角座標第X系の座標値を記した。

(3) 写真撮影

写真撮影は、6×9判モノクロームフィルムカメラ(FUJI GSW690Ⅲ)1台とデジタル一眼レフカメラ(Canon EOS 5D)1台を使用した。後者のみですべてを賄った遺構もある。実際の撮影では、日付や被写体(遺構名など)を記した「撮影カード」を写し込み、室内整理時に活用した。

この他、鳥越遺跡・菅窪遺跡では、セスナ機による航空写真撮影を実施している。

2 室内整理

(1) 遺構図面の整理

野外調査時に作製した遺構図は、電子平板((株)キュービックの「遺構くん」)のデータを用いて作製した平面図と、作業員2名が人力で作製した断面図(縮尺1/20)をデジタルデータ化して、第二原図を作成した。

(2) 遺物の整理

出土した遺物は、まず種類別(土器・土製品類、石器・石製品類)に分類し、取り上げた遺物収納袋ごとに重量計測を行った。その後、遺物別に註記・接合作業を経て、本書掲載分と不掲載分を選択、掲載分は種類毎に仮番号を付して登録作業を行った。この後、それぞれの実測・拓本、点検・修正、

トレースを行い、それらをスキャナーで取り込んでデジタルデータとし編集・整理した。仮番号は、最終的に遺構内の遺物から掲載番号(算用数字の連番)に付け替えている。

本書への掲載にあたっては、遺構内出土の遺物を優先して選び、表土層や攪乱からのものは基本的に不掲載としているが、これにあたらないものもある。

(3)写真撮影と整理

野外調査時の遺構写真等は、6×9判モノクローム写真はネガとともにアルバムに貼付し、デジタルカメラで撮影したデータは、各遺跡、各遺構ごとに個別のフォルダーにまとめた。

遺物の写真は、当センター写真室において撮影技師がデジタル一眼レフカメラ(Canon EOS1 Mark II)を使用し撮影した。

(4)整理作業経過

平成25年11月1日より、鳥越Ⅱ遺跡と鳥越Ⅲ遺跡の整理作業を開始した。両遺跡とも整理員各1名でのスタートである。鳥越Ⅱ遺跡は遺物量が非常に少ないため、注記後すぐに遺構図面のデジタル化を行った。鳥越Ⅲ遺跡は遺物洗浄から取り掛かった。

11月30日、鳥越Ⅱ遺跡の整理作業を終了。

12月1日より、菅窪遺跡の整理を整理員2名で開始。鳥越Ⅲ遺跡も2名増員し、計3名で整理を継続した。両遺跡とも、遺物洗浄・注記・接合をメインに作業を行った。

12月後半より、鳥越Ⅲ遺跡の遺構図面のデジタル作業を開始。

1月後半より、菅窪遺跡の遺構図面のデジタル作業を開始。鳥越Ⅲ遺跡の土器実測を開始。

2月1日から菅窪遺跡の土器実測を開始。

2月中旬より、両遺跡の土器実測図のデジタルトレースを開始。菅窪遺跡は石器の実測にも着手した。

2月下旬より、鳥越Ⅲ遺跡の石器実測に着手。

3月中旬、両遺跡の遺物写真撮影を行った。また、石器トレースも併せて開始した。

3月下旬、整理も終盤に入り、取納関係の整理、遺物のデジタル写真加工を開始。

3月31日を以って、両遺跡の整理作業を完了した。

IV 島越Ⅱ遺跡

1 遺跡の概観

島越Ⅱ遺跡は、田野畑村島越399-2ほかに所在し、田野畑村役場から南南東約4kmの地点に位置する。北緯39度53分53秒、東経141度54分39秒付近を中心に、西側の山地から繋がる標高約210m前後の丘陵地上に立地する。遺跡の現況は牧草地でほぼ平坦な地形となっており、旧地形から大きく改変されている。

2 調査の概要

(1) 調査経過

7月1日に資材を搬入し、調査を開始した。

7月2日より、岩手県教育委員会生涯学習文化課(以下、生文課とする)が行った試掘調査時のトレンチを再度掘削し、検出面の再考をした。

7月3日、かながわ考古学同好会が遺跡見学のため来跡。

7月4日より、重機を搬入し、表土掘削に取り掛かった。7月10日に終了。

7月11日より、遺構検出作業を開始。

7月16日、廃土場が調査区片側的一方にしかないことから、作業の効率化を図るため、遺構の検出されなかった部分の一部を廃土場とすることを提案し、部分終了確認が行われた。

同日～17日、(株)スズマ測量設計による基準点打設。

7月17日より、遺構精査を開始した。陥し穴がメインの遺構のため、開口部が狭く、深度が深いなど掘削に難航したが、精査は順調に進行した。

8月2日、委託者・生文課立ち合いのもと、終了確認が行われた。

8月9日、掘削深度の深い遺構の埋戻しを完了、資材を搬出し、本遺跡の調査を終了した。

(2) 基本層序

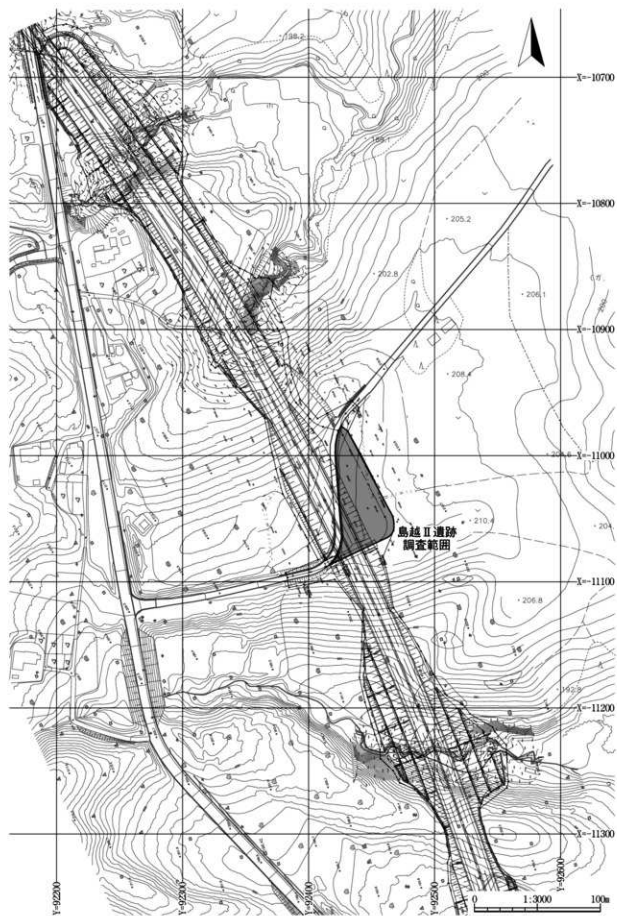
本調査区の基本層序は以下のとおりである。

I層：黒褐色土－表土、現牧草耕作土、層厚約20～30cm

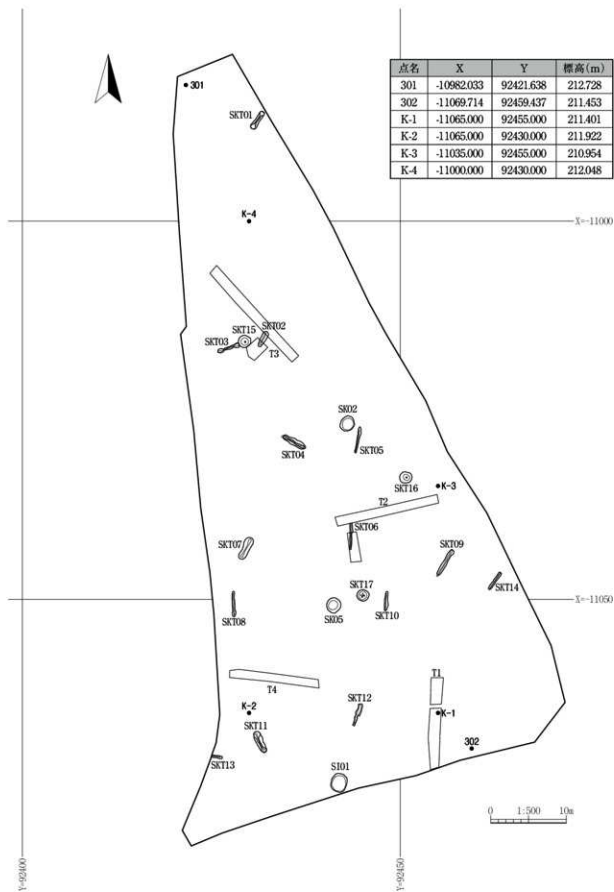
II層：暗褐～褐色土－旧耕作土、層厚約10～30cm

III層：褐～黄褐色土－遺構検出面、地山相当、層厚不明

本調査区の現況は回り一面牧草地が広がっており、地形的に現状では不自然な部分は見られなかったものの、地元住民のお話から牧草地造営時に行われたとされる地形改変が予想された。現牧草営農以前には、畑作も行われていたようで、根菜類栽培のための深さ30～40cm程のトレンチの痕跡も東側で多く確認された。このトレンチの痕跡は、西側に向かうに従い浅くなることから、その後の牧草造営時に西側が大きく削平されたことが推測される。これらのことから、今回の調査区の検出面上では、ほぼ平坦な地形となっているが、本来は西から東に緩く傾斜する地形であったものと思われる。



第4図 調査範囲図



第5図 遺構配置図

3 検出遺構

岩手県教育委員会生涯学習文化課の試掘結果をもとに、重機により表層であるⅠ・Ⅱ層を除去した。調査区とその周辺一帯は、牧草営農により上面が削平されているようで、その影響は調査区西側で顕著に見られる。また、それ以前は畑作が行われていたようで、深さ30～50cmのトレンチャーの跡も確認された。

今回の調査で確認された遺構は、竪穴住居跡(SⅠ)1棟、土坑(SK)2基、陥し穴(SKT)17基である。遺構の大半は陥し穴であり、調査区全域に分布している。

検出時に溝状のものに対しては「SKT」の略号を、円形のものに対しては一括して「SK」の略号を用いた。精査の結果、機能面から明らかに陥し穴に分類されるものについては、整理段階で略号を変更し新たな遺構名を与えた(SK01→SKT15、SK03→SKT16、SK04→SKT17)。これらについては、当初付した遺構名は欠番扱いとし、混乱が生じないようにした。

(1) 竪穴住居跡

SⅠ01竪穴住居跡(第6図、写真図版1・2)

<位置・検出状況>調査区の最南端に位置し、Ⅲ層で検出した。褐色土系の円形プランをし、検出時既に石囲炉の一部が確認できた。本来の埋土上部は、耕作時の削平により消失したものと考えられる。<重複遺構>なし。

<平面形・規模>約250×210cmの楕円形を呈する。長軸方向はおおよそ北-南にある。

<埋土>全体に炭化物が多く混入する褐色土を主体とする。石囲炉内も含めて9層に細分した。堆積状況からは人為か自然流入かの判別はつかない。

<壁・床面>壁は緩やかな立ち上がりで、検出面との境もやや判別しにくい皿状の断面形状を呈する。検出面からの深さは最深部で10cm超と浅い。床面は概ね平坦で、中央部付近がやや堅く締まる。

<炉>南側寄りの中央に構築されている。8個の自然石を長方形に組んだ石囲炉で、規模は約60×40cmである。炉石の石質は、鑑定の結果、北上山地のホルンフェルスである。内部は床面より一段低く、わずかに中央が窪む形状をする。燃焼部は確認されなかった。炉石の周辺には暗褐色土をした炉石の設置痕が確認できる。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため詳細は不明だが、石囲炉の形態から縄文時代中期以降が想定される。本遺構に関し、形状から石囲炉とし、これを伴うため竪穴住居跡と報告しているが、石囲炉内部からは焼成の痕跡が全く確認されなかった。このことから、形態としては石囲炉ではあるが、「炉」として機能していない可能性も想定され、通常の住居とは異なる祭祀・儀礼に関する遺構である可能性も考えられる。

(2) 土 坑

SK02土坑(第6図、写真図版3)

<位置・検出状況>調査区の中央に位置し、検出面はⅢ層である。数本の畑作時のトレンチャーによって切られる黒褐～暗褐色土の円形プランを確認した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>開口部約210×180cm、底部約160×150cmの円形を呈する。

<埋土>17層に細分した。上部には畑作のトレンチャーが数本入り攪乱されている。層位状況から、人為堆積と判断した。

<壁・底面>壁はほぼ直立するが、一部中位が窄まる部分も見られる。深さは最深部で約130cmを測る。底面は凹凸が見られる。

<遺物>出土していない。

<時期・機能>出土遺物がないため、詳細は不明。規模・形状から、貯蔵穴の可能性が考えられる。

SK05土坑(第6図、写真図版3)

<位置・検出状況>調査区の南側に位置し、検出面はⅢ層である。黒褐色土の円形プランを確認した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>開口部径約190cm、底部径約110~130cmの円形を呈する。

<埋土>6層に細分した。上位の黒褐~暗褐色土、下位の褐~黄褐色土に大別できる。自然流入土と判断した。

<壁・底面>壁は底面から緩やかに繋がり、鍋形の断面形状をする。深さは約80cmを測る。底面は平坦である。

<遺物>出土していない。

<時期・機能>遺物の出土がないため、詳細は不明である。

(3) 陥し穴

SKT01陥し穴(第7図、写真図版3)

<位置・検出状況>調査区の北側に位置し、検出面はⅢ層である。暗褐色土の溝状のプランを確認した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は溝状の両端が円形に膨らむアレイ状を呈し、開口部長265×幅60cm、底部長270×幅10~60cmを測る。長軸方向はおよそ北東-南西にある。

<埋土>5層に細分した。上位の暗褐色土、中位の褐色土、下位のぶい黄褐色土に大別できる。自然堆積と思われる。

<壁・底面>壁は中央の短軸部分では開口部がやや開くY字状をする。両端の円形部を含む長軸部分ではほぼ直立し、北東側ではややオーバーハンクする。深さは最深部で110cmを測る。底面は中央が高く、両端に向かってやや低くなる。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT02陥し穴(第7図、写真図版3)

<位置・検出状況>調査区中央からやや北側に位置し、検出面はⅢ層である。試掘トレンチT3にて確認した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は長楕円形をし、開口部225×60~80cm、底部125×10~20cmを測る。長軸方向はおよそ北東-南西にある。

<埋土>4層に細分した。上位は黒褐色土、中位に厚い黄褐色土、下位に褐色土の自然堆積と考えら

れる。

＜壁・底面＞壁は中央の短軸では底部がやや丸いV字状の断面形をし、長軸ではほぼ直立する。深さは最深部で130cmを測る。底面は中央部がやや高く、両端に向かって低くなる。

＜遺物＞出土していない。

＜時期＞出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT03陥し穴(第7図、写真図版4)

＜位置・検出状況＞調査区中央からやや北側に位置し、検出面はⅢ層である。褐色土の不明瞭な溝状プランとして検出した。

＜重複遺構＞東端の上半部がSKT15と重複するが、新旧関係については不明である。

＜平面形・規模＞平面形は両端がやや膨らむ溝状を呈し、開口部長300×幅20～60cm、底部長300×幅5～30cmを測る。長軸方向はおおよそ西-東にある。

＜埋土＞4層に細分した。埋土のいずれも地山と近似する。自然堆積と考えられる。

＜壁・底面＞壁は中央の短軸ではV字状の断面形をし、長軸ではオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で110cmを測る。底面はほぼ平坦である。

＜遺物＞出土していない。

＜時期＞出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT04陥し穴(第7図、写真図版4)

＜位置・検出状況＞調査区の中央に位置し、検出面はⅢ層である。暗褐色土の比較的明瞭なプランとして検出した。

＜重複遺構＞なし。

＜平面形・規模＞平面形は長楕円～溝状を呈し、開口部長330×幅60～90cm、底部長335×幅8～25cmを測る。長軸方向はおおよそ北西-南東にある。

＜埋土＞4層に細分した。上位の暗褐色土以外はいずれも地山と近似する。自然堆積と考えられる。

＜壁・底面＞壁は中央の短軸ではY字状の断面形を呈する。長軸では下位から中位にかけてオーバーハングし、上位で外傾する。深さは最深部で105cmを測る。底面は中央部がやや高いが、概ね平坦と言える。

＜遺物＞出土していない。

＜時期＞出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT05陥し穴(第8図、写真図版4)

＜位置・検出状況＞調査区の中央に位置し、検出面はⅢ層である。耕作痕であるトレンチャーと並行することから、検出が困難であった。

＜重複遺構＞なし。

＜平面形・規模＞平面形は溝状を呈し、開口部長350×幅25～45cm、底部長300×幅5～10cmを測る。長軸方向はおおよそ北-南にある。

＜埋土＞4層に細分した。上位の暗褐色土以外はいずれも地山と近似する。自然堆積と考えられる。

＜壁・底面＞壁は中央の短軸ではU字状の断面形を呈する。長軸では南側の中段でややオーバーハングするが、概ね底面から外傾して立ち上がる。深さは最深部で100cmを測る。底面はほぼ平坦である。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT06陥し穴(第8図、写真図版4)

<位置・検出状況>調査区の中央からやや南側に位置し、検出面はⅢ層である。生文課の試掘時に検出されたものである。トレンチ(T2)により、北側は遺存しない。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は溝状を呈する。開口部長350×幅20~40cm、底部長330×幅7~10cmが残存する。長軸方向はおおよそ北-南にある。

<埋土>4層に細分した。いずれの層位も褐色・黄褐色土で、地山起源の流入土と判断される。

<壁・底面>壁は中央部の短軸ではU字状の断面形を呈し、長軸では直立気味になる。深さは最深部で80cmを測る。底面は概ね平坦である。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT07陥し穴(第8図、写真図版5)

<位置・検出状況>調査区の西側に位置し、検出面はⅢ層である。暗褐色土の比較的明瞭なプランを検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は両端がやや広がる長楕円形を呈する。開口部310×90~110cm、底部270×10~35cmを測る。長軸方向はおおよそ北東-南西にある。

<埋土>7層に細分した。上層の暗褐色土以外は、地山とよく似た褐色・黄褐色土で構成される自然堆積と思われる。

<壁・底面>壁は中央の短軸ではY字状の断面形を呈し、長軸ではほぼ直立する。深さは最深部で120cmを測る。底面は概ね平坦である。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT08陥し穴(第8図、写真図版5)

<位置・検出状況>調査区中央からやや南西側に位置し、検出面はⅢ層である。検出面上においてやや暗い褐色土の不明瞭なプランとして認識した。そのため、上半部を一段掘り下げてからの精査を行った。図示した破線部分は実際の上端を推定したものである。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は溝状を呈し、開口部長335×幅30~45cm、底部長300×幅10~15cmを測る。長軸方向はおおよそ北-南にある。

<埋土>6層に細分した。埋土のいずれも地山と近似した褐色土が主体であり、自然堆積と思われる。

<壁・底面>壁は短軸ではY字状の断面形をし、長軸では中位でややオーバーハングするものの、概ね直立する。深さは最深部で90cmを測る。底面はほぼ平坦である。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT09陥し穴(第9図、写真図版5)

<位置・検出状況>調査区の南東側に位置し、検出面はⅢ層である。周囲よりやや暗い褐色土のプランとして検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は溝状を呈し、開口部長380×幅55cm、底部長410×幅10~20cmを測る。長軸方向はおおよそ北東-南西にある。

<埋土>4層に細分した。上・中位は褐色土を主体とし、下位には暗褐色土が堆積する。自然堆積と思われる。

<壁・底面>壁は中央部の短軸ではU字状の断面形を呈する。長軸では両端ともオーバーハングして立ち上がる。深さは最深部で100cmを測る。底面には凹凸が見られる。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT10陥し穴(第9図、写真図版5)

<位置・検出状況>調査区の南側に位置し、検出面はⅢ層である。周囲よりやや暗い褐色土のプランとして検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は溝状を呈し、開口部長250×幅45cm、底部長240×幅7cmを測る。長軸方向はおおよそ北-南にある。

<埋土>6層に細分した。上・中位は褐~黄褐色土を主体とし、下位には暗褐色土が堆積する。また、中位に竊状に堆積する3・4層は堅い締まりが認められた。自然堆積と思われる。

<壁・底面>壁は中央部の短軸ではU字状の断面形を呈する。長軸では両端とも下位はオーバーハングし、上半部は直立する。深さは最深部で100cmを測る。底面は中央がやや低位となる。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT11陥し穴(第9図、写真図版6)

<位置・検出状況>調査区の南側に位置し、検出面はⅢ層である。検出面と近似した不明瞭な褐色土のプランであった。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は両端が膨らむアレイ状を呈し、開口部長300×幅85~110cm、底部長225×幅6~30cmを測る。長軸方向はおおよそ北北西-南南東にある。

<埋土>5層に細分した。褐色土を主体とする自然堆積と思われる。

<壁・底面>壁は短軸ではY字状の断面形を呈し、長軸では両端とも直立する。深さは最深部で175cmを測る。底面は中央がやや高く、両端に向かってやや低位となる。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT12陥し穴(第9図、写真図版6)

<位置・検出状況>調査区の南側に位置し、検出面はⅢ層である。検出面と近似しており、プランも

不明瞭であったため、南側半分を一段掘り下げてから精査を行った。そのため上半部は遺存しない。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は溝状を呈し、開口部長300×幅60cm、底部長270×幅20～30cmを測る。長軸方向はおよそ北北東-南南西にある。

<埋土>5層に細分した。地山とよく似た褐色土を主体とする自然堆積と思われる。

<壁・底面>壁は中央部の短軸ではU字状の断面形を呈し、長軸では北側が歪ではあるが、概ね直立する。深さは最深部で100cmを測る。底面は中央がやや高く、両端に向かってやや低位となる。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

S K T 13 陥し穴 (第10図、写真図版6)

<位置・検出状況>調査区の南西隅に位置し、検出面はⅢ層である。暗褐色土の比較的明瞭なプランを検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>遺構の西側は調査区外へ延びるため、全容は不明だが、開口部長150cm以上×幅30cm、底部長120cm以上×5cmの溝状を呈するものと思われる。長軸方向はおよそ西-東にある。

<埋土>4層に細分した。上位の暗褐色土、中位の黄褐色土、下位の褐色土に大別できる。自然堆積と考えられる。

<壁・底面>壁は短軸ではV字状の断面形を呈し、長軸ではほぼ直立する。深さは最深部で90cmを測る。底面は確認部分では概ね平坦である。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

S K T 14 陥し穴 (第10図、写真図版6)

<位置・検出状況>調査区の南東側に位置し、検出面はⅢ層である。炭化物が混入する比較的明瞭な褐色土の溝状プランを検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は溝状を呈し、開口部長270×幅40cm、底部長260×幅6cmを測る。長軸方向はおよそ北東-南西にある。

<埋土>5層に細分した。上位の褐色土、中位の黄褐色土系、下位の褐～暗褐色土に大別できる。自然堆積と判断される。

<壁・底面>壁は短軸ではやや細身だがY字状の断面形を呈し、長軸ではほぼ直立する。深さは最深部で110cmを測る。底面は概ね平坦である。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

S K T 15 陥し穴 (第10図、写真図版7)

<位置・検出状況>調査区の中央からやや北側に位置し、検出面はⅢ層である。暗褐色土の明瞭な円形プランを検出した。

<重複遺構>S K T 03と重複する。上半部のみを重複で、新旧関係は不明。

<平面形・規模>平面形は円形を呈し、開口部径160cm、底部径95cmを測る。

<埋土>7層に細分した。上位の褐色土、中位の黄褐色土系、下位の褐～暗褐色土に大別できる。自然堆積と判断される。

<壁・底面>壁は底面からほぼ直立し、上部で外側にやや開く。深さは最深部で125cmを測る。底面は平坦で、中央にピットが1個確認された。ピットは径20cm程の円形で、深さは45cmを測る。逆茂木痕の可能性が考えられる。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT16陥し穴(第10図、写真図版7)

<位置・検出状況>調査区の中央部東側に位置し、検出面はⅢ層である。暗褐色土の比較的明瞭な円形プランとして検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は略円形を呈し、開口部径160cm、底部径75～90cmを測る。

<埋土>8層に細分した。上位の暗褐色土、中位の褐色土、下位の黄褐色土に大別できる。自然堆積と判断される。

<壁・底面>壁はやや外傾して立ち上がり、深さは最深部で90cmを測る。底面は凹凸が見られ、中央にピットが1個確認された。ピットは径20cmの円形で、深さは30cmを測る。逆茂木痕の可能性が考えられる。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

SKT17陥し穴(第11図、写真図版7)

<位置・検出状況>調査区の南側に位置し、検出面はⅢ層である。にぶい黄褐色土の円形プランを検出した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>平面形は円形を呈し、開口部径150cm、底部径100～110cmを測る。

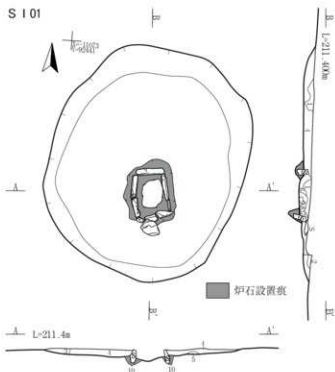
<埋土>11層に細分した。上位のにぶい黄褐色土、中位の褐色土、下位の黄褐色土に大別できる。自然堆積と判断される。

<壁・底面>壁は底面からほぼ直立し、上部で外反する。深さは最深部で125cmを測る。底面は平坦で、中央部にピットが8個集中して確認された。いずれも径10cm前後の円形・楕円形を呈するもので、深さは25～30cmを測る。逆茂木痕の可能性が考えられる。

<遺物>出土していない。

<時期>出土遺物がないため、詳細は不明である。

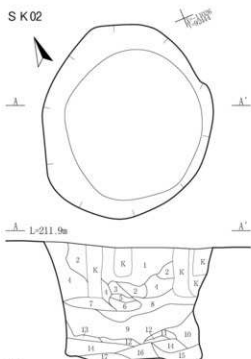
S I 01



S I 01

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性有 締まり有 炭化物少量含む
2. 10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まりやや有 炭化物・黄褐色ブロック多く含む
3. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まり有
4. 10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まり有
5. 全体に炭化物を多く含む
6. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まり有 ブロック土 炭化物微量、明黄褐色ブロック盛入
7. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性有 締まり有
8. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性有 締まり有 礫土状、炭化物微量含む
9. 10YR4/2 濃い黄褐色シルト 粘性有 締まり有
10. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性有 締まり有 黄褐色ブロック多く含む、炉石設置痕

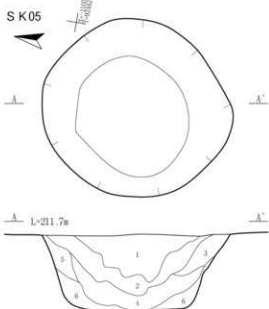
S K 02



S K 02

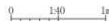
1. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性有 締まり有 明黄褐色ブロック(To-Cu)まばらに含む
2. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性やや有 締まり欠
3. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性欠 締まりやや有 黄褐色土の混入
4. 10YR5/8 黄褐色砂質シルト 粘性やや有 締まり欠
5. 10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性有 締まりやや有 黄褐色ブロック(To-Cu)を偏状に含む
6. 10YR4/2 濃い黄褐色シルト 粘性有 締まり有
7. 10YR4/6 褐色シルト 粘性やや有 締まり欠 黄褐色土ブロック少量含む
8. 10YR5/4 濃い黄褐色砂質シルト 粘性欠 締まり欠 黄褐色土ブロック微量含む
9. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
10. 10YR4/6 褐色シルト 粘性全有 締まり欠
11. 10YR5/8 黄褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
12. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性やや有 締まり欠 炭素盛上
13. 10YR5/6 黄褐色砂質シルト 粘性欠 締まり欠
14. 10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性やや有 締まりやや有
15. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性やや有 締まり欠 黄褐色土ブロック少量含む
16. 10YR4/2 濃い黄褐色砂質シルト 粘性やや有 締まり有
17. 10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まり有 黄褐色土ブロック多く含む

S K 05

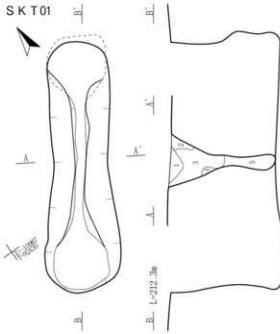


S K 05

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有 黄褐色土中央に多く含む、炭化物微量
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性有 締まりやや有 礫土上の混入、炭化物多い
3. 10YR5/8 黄褐色シルト 粘性有 締まり有
4. 10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まり有 黄褐色土ブロック少量含む
5. 10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まり有 炭化物微量含む
6. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まり欠

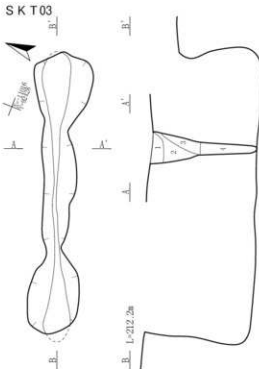


第6図 S I 01竪穴住居跡、S K 02・05土坑



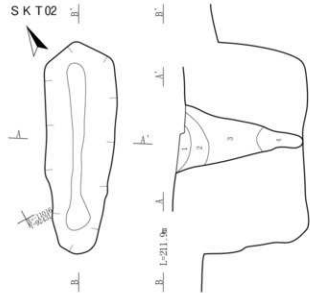
SK T01

1. 101K3/3 暗褐色シルト 粘性有 締まり有 黄褐色ブロック少量含む
2. 101K4/6 褐色シルト 粘性有 締まり有 フロック上
3. 101K4/4 褐色シルト 粘性有 締まり有 黄褐色ブロック少量含む
4. 101K5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まり有 黄褐色ブロック上
5. 101K4/3 に近い黄褐色シルト 粘性有 締まり有 黄褐色土粒全体を含む



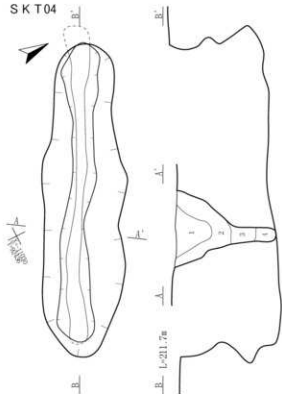
SK T03

1. 101K4/6 褐色シルト 粘性無 締まり欠 炭化物を全体に含む
2. 101K4/4 褐色シルト 粘性有 や有 締まり欠
3. 黄褐色ブロック少量、炭化物を全体に含む
4. 101K5/6 黄褐色シルト 粘性有 や有 締まり欠 炭化物を全体に含む
5. 101K4/4 褐色シルト 粘性有 締まり有 炭化物を少量、黄褐色ブロックを全体に含む



SK T02

1. 101K2/3 黒褐色シルト 粘性有 締まり有 黄褐色土との混入、炭化物微量
2. 101K4/6 褐色シルト 粘性有 締まり有 や有 地山混入
3. 101K5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まり有 地山混入
4. 101K4/4 褐色シルト 粘性有 締まり欠 地山混入

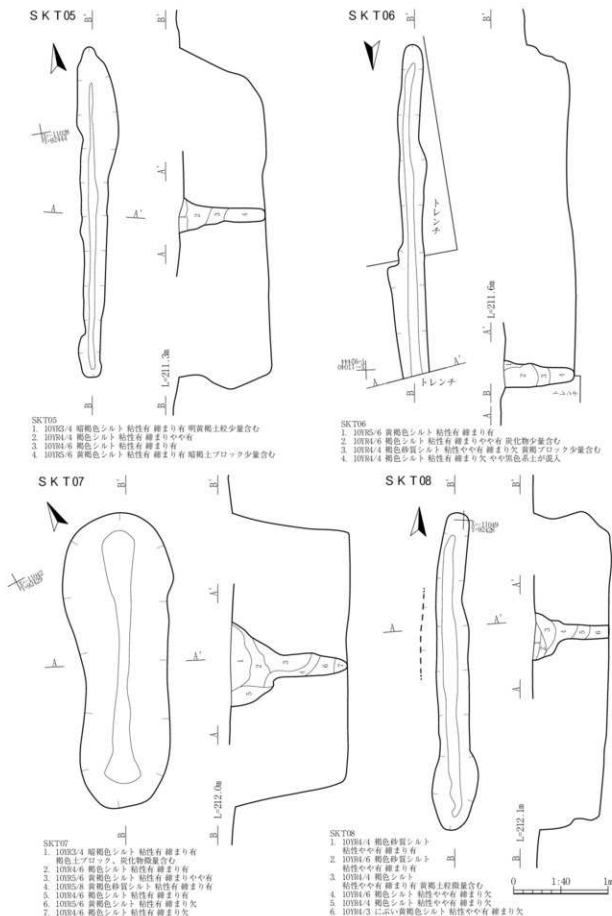


SK T04

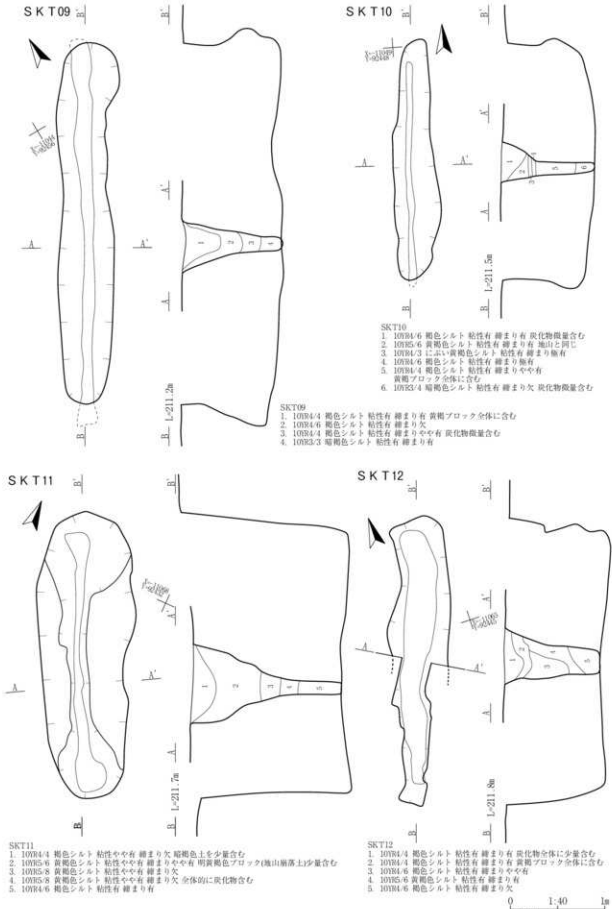
1. 101K3/4 暗褐色シルト 粘性有 締まり有 や有 炭化物少量含む
2. 101K4/6 褐色シルト 粘性有 締まり有 地山混入上
3. 101K5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まり有 や有 地山混入上
4. 101K4/6 褐色シルト 粘性有 締まり欠 地山混入上

0 1:40 1m

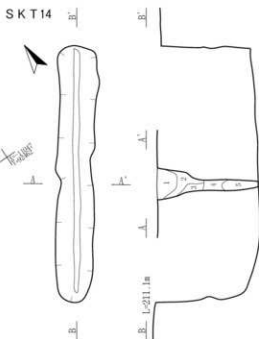
第7図 SK T01~04陥穴



第8図 SKT05～08掘し穴

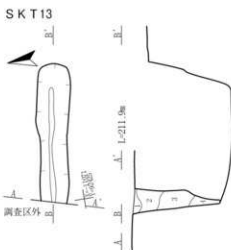


第9図 SKT09～12掘し穴



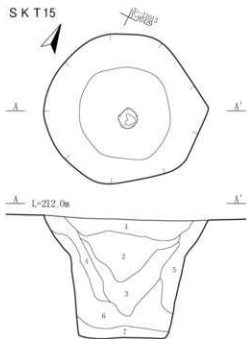
SKT14

1. 10YR4/6 褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
全体的に暗褐色土が入り、炭化物を微量含む
2. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 粘性欠 締まり欠
3. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性欠 締まり欠 上位に黒褐色土が少量入る
4. 10YR4/6 褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
全体的に黄褐色ブロックが入る
5. 10YR4/4 褐色シルト 粘性有 締まり有 全体的に暗褐色土が入る



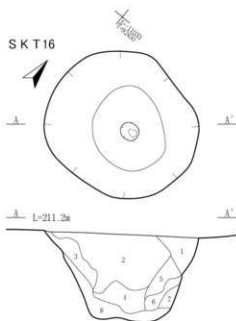
SKT13

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや有 締まり欠 炭化物少量含む
2. 10YR5/8 黄褐色シルト 粘性やや有 締まりやや有
2層に対して炭化物は少し
3. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性やや有 締まり有
炭化物少し、2層と低ているが2層より土が硬く粘性有
4. 10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まり有
2層よりも更に硬く粘性強い、一部地山崩落土が入る



SKT15

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性有 締まりやや有 黄褐色ブロック全体に含む
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性有 締まりやや有 黄褐色ブロック下段に多く含む
3. 10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まりやや有 黄褐色ブロック少量含む
4. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まり欠
5. 10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まりやや有 地山と同じ(破入)
6. 10YR5/8 黄褐色シルト 粘性有 締まり欠
7. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト 粘性有 締まり欠 黄褐色ブロック全体に含む

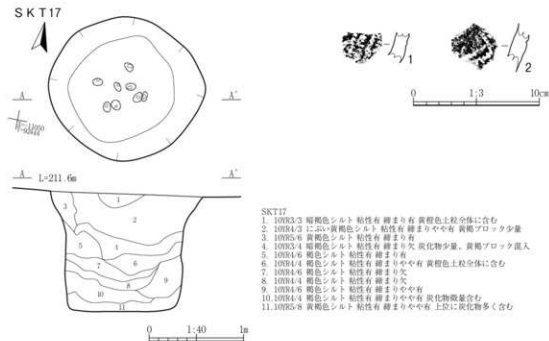


SKT16

1. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まりやや有
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性有 締まりやや有
黄褐色ブロック全体に含む、炭化物少量
3. 10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まりやや有
暗褐色土全体に混入、炭化物微量
4. 10YR4/4 褐色シルト 粘性有 締まり欠
褐色土少量混入
5. 10YR4/6 褐色シルト 粘性有 締まりやや有
6. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まり欠
7. 10YR5/8 黄褐色シルト 粘性有 締まり欠
8. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まり有

0 1:40 1m

第10図 SKT13~16随穴



第11図 SKT17陥し穴、出土土器

第2表 土器観察表

No.	出土地点	層位	器形	残存部	文様・特徴	備考
1	調査区南側	Ⅱ層	深鉢	胴部	LR横/内面ナデ	磨減著しい
2	調査区南側	Ⅱ層	深鉢	胴部	LR横/内面ナデ	磨減著しい

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺構外から出土した縄文土器8点のみである。いずれも小破片で、磨減も著しく、文様等がわかるものはない。このうち、残存状態が比較的良好な2点(1・2)を掲載した。

1・2とも、胴部片と考えられ、LR横回転が施されている。磨減が著しいが、胎土の色調等から両者は同一個体の可能性が高い。

5 自然科学分析

鳥越Ⅱ遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1. 測定対象試料

鳥越Ⅱ遺跡は、岩手県下閉伊郡田野畑村鳥越399-2に所在する。測定対象試料は、堅穴住居跡、土坑から出土した炭化物の合計3点である(表1)。

2. 測定 の 意義

遺跡内における聖穴住居跡、土坑の時期を特定する。

3. 化学 処理 工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸・アルカリ・酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定 方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算 出 方 法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正

ログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6. 測定結果

測定結果を表1・2に示す。

試料の ^{14}C 年代は、No.1が $4100 \pm 30\text{yrBP}$ 、No.2が $5600 \pm 30\text{yrBP}$ 、No.3が $5660 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1 σ)は、No.1が縄文時代中期中葉から後葉頃、No.2・3が前期前葉頃に相当する(小林編2008)。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

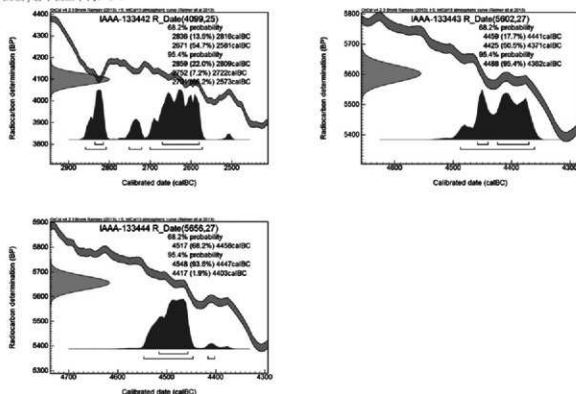
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-133442	No.1	SI01 床面	炭化物	AAA	-25.20 \pm 0.36	4,100 \pm 30	60.03 \pm 0.19
IAAA-133443	No.2	SK04 床面直上	炭化物	AAA	-25.20 \pm 0.38	5,600 \pm 30	49.79 \pm 0.17
IAAA-133444	No.3	SK05 最下層	炭化物	AAA	-24.53 \pm 0.30	5,660 \pm 30	49.45 \pm 0.17

表2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-133442	4,100 \pm 20	60.01 \pm 0.18	4,099 \pm 25	2836calBC - 2816calBC (13.5%) 2671calBC - 2581calBC (64.7%)	2859calBC - 2809calBC (22.0%) 2752calBC - 2722calBC (7.2%) 2701calBC - 2573calBC (66.2%)
IAAA-133443	5,610 \pm 30	49.77 \pm 0.17	5,602 \pm 27	4459calBC - 4441calBC (17.7%) 4425calBC - 4371calBC (60.5%)	4488calBC - 4362calBC (95.4%)
IAAA-133444	5,650 \pm 30	49.50 \pm 0.17	5,656 \pm 27	4517calBC - 4458calBC (68.2%)	4548calBC - 4447calBC (93.5%) 4417calBC - 4403calBC (1.9%)

[参考値]

[国版] 暦年較正年代グラフ



6 総括

今回の調査において検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、土坑2基、陥し穴17基である。遺構の大半を占めるのは陥し穴であり、調査区全域に散在している。これらを総括として若干概観したい。

形態としては、溝状と円形の2つに大別できる。溝状のものがほとんどで、14基がこれに含まれる。また、溝状の中には、両端部が円形に膨らむ、アレイ形状をするものが見られ、SKT01・03・11などがこれに含まれる。長さは最短で2.5m、最長で3.8mを測るが、3m前後のものが最も多い。長軸方向は概ね北-南または北西-南東にあるものがほとんどだが、SKT04・13のみこれに外れる。遠う時期の構築であろうか。現況が削平されているため、地点によって影響が異なるが、深さは最深のもので1.6m、最浅で0.7mを測り、多数が0.9~1m前後に含まれる。一方、円形のものには3基確認しており、SKT15~17がこれにあたる。これらは当初は土坑と考えていたが、底面に逆茂木痕が検出されたため、陥し穴と判断したものである。いずれも開口部径1.5~1.6mの円形基調である。SKT16のみ断面形状や深さが異なるが、SKT15・17に関しては共通する部分が多い。なお、SK02についても、底面に逆茂木痕が確認できなかったため今回は土坑として報告したが、これらと規模・形状が似ていることから陥し穴の可能性も考えられる。

分布状況についてだが、調査区全域で検出されており、傾向等は窺い知れないが、密度的には高い状況であると言えよう。また、陥し穴同士の重複は見られないことから、同時期に計画的に構築された可能性が考えられる。今回の調査区は、丘陵上の緩斜面の一部を調査したに過ぎず、東西方向にはこれらの分布が広がる可能性が示唆される。狩猟場としての全容解明のため、今後の調査に期待したい。

写 真 図 版
(島越Ⅱ遺跡)



調査区 全景(N→)



S101 実掘(S→)

写真図版1 調査区全景、S101竪穴住居跡(1)



S 101 埋土(N→)



S 101 埋土(W→)



S 101 石囲炉 完掘(S→)



S 101 石囲炉 断ち割り(N→)



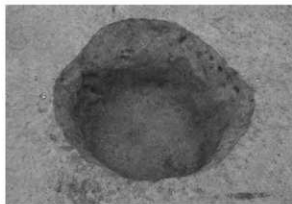
S 101 完掘(S→)



S 101 石囲炉 断ち割り(W→)



S K 02 完掘(W→)



S K 05 完掘(W→)



S K 02 埋土(N→)



S K 05 埋土(W→)



S K T 01 完掘(W→)



S K T 02 完掘(W→)



S K T 01 埋土(W→)



S K T 02 埋土(W→)

写真図版3 S K 02・05土坑、S K T 01・02陥し穴



S K T03 完掘(W→)



S K T04 完掘(E→)



S K T03 埋土(W→)



S K T04 埋土(E→)



S K T05 完掘(E→)



S K T06 完掘(N→)



S K T05 埋土(N→)



S K T06 埋土(N→)



S K T 07 完掘(W→)



S K T 08 完掘(N→)



S K T 07 埋土(S→)



S K T 08 埋土(N→)



S K T 09 完掘(W→)



S K T 10 完掘(S→)



S K T 09 埋土(W→)



S K T 10 埋土(S→)

写真図版5 SK T07~10陥し穴



S K T 11 完掘(S→)



S K T 12 完掘(W→)



S K T 11 埋土(E→)



S K T 12 埋土(S→)



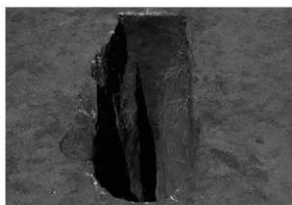
S K T 13 完掘(E→)



S K T 14 完掘(E→)



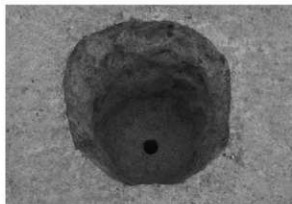
S K T 13 埋土(E→)



S K T 14 埋土(W→)



S K T 15 完掘(N→)



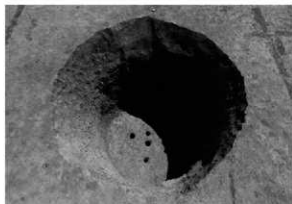
S K T 16 完掘(E→)



S K T 15 埋土(N→)



S K T 16 埋土(N→)



S K T 17 完掘(W→)



S K T 17 埋土(N→)



写真図版7 S K T 15~17陥し穴、出土土器

V 島越 XIV 遺跡

1 遺跡の概観

島越XIV遺跡は、田野畑村島越399-2ほかに所在し、田野畑村役場から南南東約4.5kmの地点に位置する。北緯39度53分45秒、東経141度54分43秒付近を中心に、西側の山地から繋がる標高190m台の丘陵地上に立地する。遺跡の現況は山林で、幅の狭い尾根とこれを挟む南北の斜面地が今回の調査区である。

2 調査の概要

(1) 調査経過

8月19日に資材を搬入し、調査を開始。生文課による試掘トレンチを再掘削、併せて新規にも試掘トレンチを設定し、層位の状況や遺物の出土状況を確認した。

8月22日、並行して北側斜面部から重機による表土掘削を開始。遺物が集中する箇所が確認された。

8月23日、同様に並行して遺構検出を開始。北側斜面部から着手したが、斜度があるため土捨てに苦慮した。

8月27日、重機による表土掘削を終了。

9月1日、隣接する浜岩泉Ⅲ遺跡も併せての調査のため、調査の進行上、検出作業を前日で一旦終了し、9月5日まで浜岩泉Ⅲ遺跡の試掘調査へと一時移行した。

9月6日より本遺跡の調査を再開したが、9月11日から再び調査進行の都合上、浜岩泉Ⅲ遺跡へと移動した。折りしも、近隣遺跡の調査の支援等が重なり、作業員の人数は7名前後での作業となった。

9月30日、浜岩泉Ⅲ遺跡の検出作業が一段落したことを受け、本遺跡の精査に本格的に着手し始めた。本遺跡の遺構は土色が検出面層と近似しており、平面状況からはほとんど認識できない状況であった。そのため、トレンチを穿ち、遺構を確認・精査していく方法を進めることとした。

10月17日、遺構精査が難航しているため、今後の協議と部分的に終了した北側斜面について、委託者・生文課立ち合いのもと、部分終了確認を行った。11月中旬を目標に終了できるよう調査を継続することとなった。

10月中～下旬は、天候にも恵まれず、雨天が集中や台風により、思うように調査を進行できなかった。

10月31日、委託者・生文課立ち合いのもと、終了確認を行った。

11月11日より、調査も終盤に差し掛かり、浜岩泉Ⅲ遺跡に半数の作業員が移動。並行して調査を行うこととした。

11月22日を以って、本遺跡の調査を終了した。

(2) 基本層序

本調査区の基本層序は以下のとおりである。

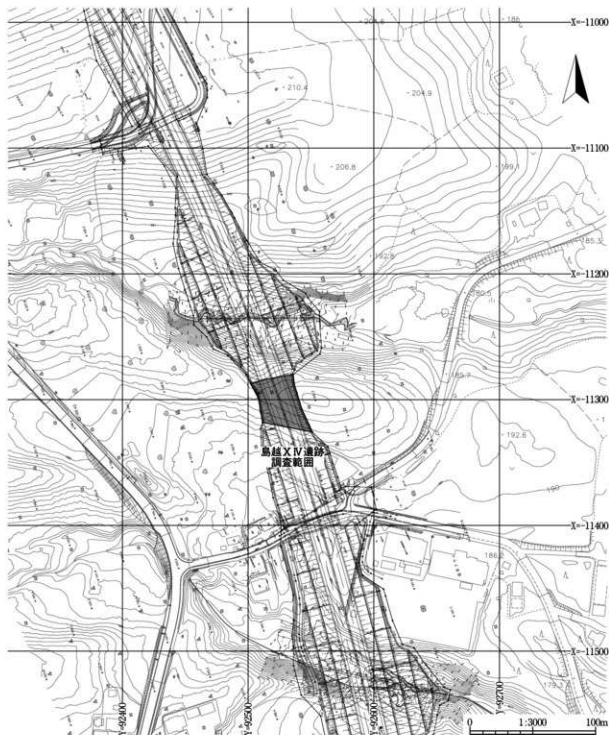
I層：黒褐色土－表土、層厚約5～20cm

II層：褐色土－斜面下方に向かうに従い厚くなる、遺物包含層

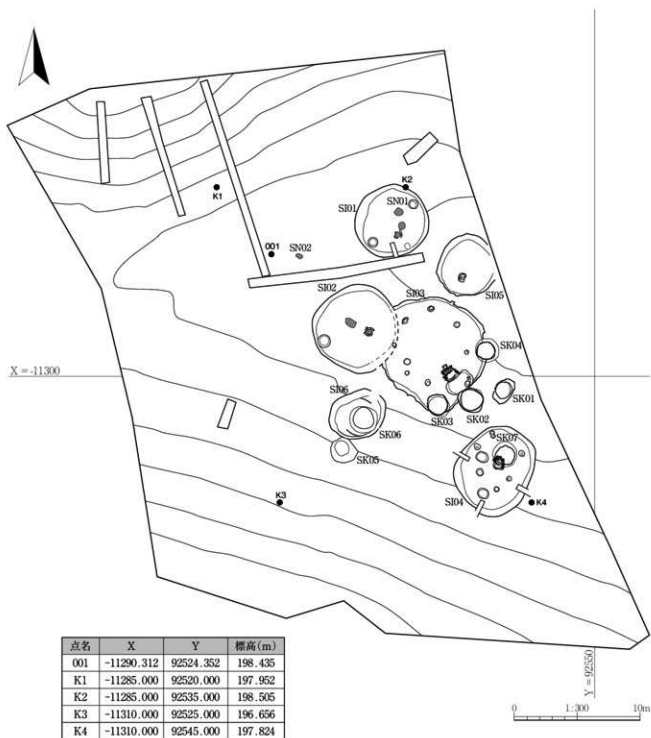
III層：褐～黄褐色土－遺構検出面、地山相当、層厚不明

本調査区の現況は山林であり、現代まで著しい地形の改変等はほほないものと考えられる。

尾根上は土層の堆積も薄く、表土直下が遺構検出面となる。斜面の肩口付近から徐々にⅡ層の堆積が厚くなり、北側斜面においては集中的に遺物を包含する層となる。Ⅱ層は南側斜面にも同様に堆積しており、その層厚は北側ほど厚くない。斜面の傾斜度が異なることに起因するものと思われる。今回の調査区が地形上では両斜面とも中腹ほどまでのため詳細は不明だが、下方に向かうに従い厚くなるようである。Ⅱ層とⅢ層には、明確な差異が色調にはなく、Ⅲ層の方がやや明るみが強く、且つ締まりが若干強い印象を受ける。この差によってⅢ層を遺構検出面として認識した。



第12図 調査範囲図



第13図 遺構配置図

3 検出遺構

岩手県教育委員会生涯学習文化課の試掘結果をもとに、重機により表土を除去した。表土直下5～10cmほどで尾根上で焼土遺構が検出されたため、これを遺構検出面と捉えることとした。北側斜面においては、遺物が集中して出土したため、この範囲については人力で掘り下げることにした。この部分に対しては、トレンチを入れ確認したが、遺構は存在せず、小規模に広がる遺物包含層であると判断した。

今回の調査で確認された遺構は、堅穴住居跡(S I)5棟、土坑(S K)7基、焼土遺構(S N)2基である。いずれの遺構も尾根頂部から南側斜面にかけて分布している。

(1) 堅穴住居跡

S I 01 堅穴住居跡(第14図、写真図版9・10/遺物:第22・33図、写真図版20・27)

<位置・検出状況>調査区東側、尾根上平坦部に位置し、Ⅲ層で検出した。他の遺構と比較して、明瞭な暗褐色土の円形プランを確認した。

<重複遺構>S N 01と重複する。本遺構埋没後にS N 01が形成。

<平面形・規模>径約580cmの円形を呈する。

<埋土>4層に細分した。壁際及び下位に地山の黄褐色土、中位に褐色土、上位に暗褐色土の自然堆積と判断される。

<壁・床面>壁はほぼ直立し、検出面からの深さは最深約65cmを測る。床面はほぼ平坦で、強く締まりが認められる。

<炉>中央から南寄りに構築されている。角礫を方形に組んだ石囲炉で、規模は一辺約70cmである。内部には径約40cmの円形に赤褐色焼土が広がる。炉内の埋土は床面精査時に同時に取り除いたため測量できなかったが、黄褐色土に焼土粒・炭化物が多く混入する土層であった。床面からの深さは10cm前後と比較的浅い。炉石の周囲には褐色土の設置痕が確認できる。また、北側には径約55cmの円形に広がる地床炉が接する。焼成は弱く、周辺には掘り方等は確認できなかったが、本遺構炉の前庭部であった可能性も考えられる。

<床面施設>南東(P 1)・南西(P 2)・北東(P 3)側に柱穴が確認された。いずれも径約60～70cmの円形を呈し、深さは25～40cmを測る。規模や配置状況から主柱穴の可能性が高い。

<遺物>土器が4.6kg、石器が7点出土した。このうち、土器10点(1～10)と石器3点(192～194)を掲載した。下層より出土の1・2は縄文のみであるが、器形から大木8b～9式に比定されるものと考えられる。そのほか、埋土中からの土器も中期中葉～後葉に含まれるものが多い。

<時期>出土遺物や石囲炉の形態から、縄文時代中期中葉～後葉と推測される。

S I 02 堅穴住居跡(第15図、写真図版10・11/遺物:第20・21・33図、写真図版20・21・27)

<位置・検出状況>調査区中央、尾根上平坦部に位置し、Ⅲ層で検出した。当初は小径の黒褐～褐色を埋土とする土坑と考え精査を始めたが、これらは単なる上位層にあたり、下位に褐色土を主体とする遺物を含む層が続くことから掘り進めたところ、フラットな床面と石囲炉を発見するに至った。

<重複遺構>S I 03と重複。これを切る。

<平面形・規模>S I 03との重複が平面上わからず掘り進めたため、東側の壁を損失した。径約

670cmの円形を呈する。

＜埋土＞8層に細分した。下位に黄褐色土、中位に褐色土、上位に暗褐色土が堆積する。中位以下は混入物の状況から、人為堆積の可能性がある。

＜壁・床面＞壁は床面から緩やかに立ち上がり、深さは最深部で約70cmを測る。床面は概ね平坦である。

＜炉＞中央から東寄りに石囲炉が確認された。「コ」字状に自然石を配置しており、規模は一辺約70cmである。内部には円状に赤褐色焼土が広がる。炉内の埋土は褐色土を主体とし、床面との高低差は約20cmである。炉石の周囲には暗褐色の設置痕が見られる。このことから、東側の炉石は廃絶後に損失したものと考えられ、炉石が全周していたものと判断される。

＜床面施設＞南西側の壁際に土坑(K1)が検出された。径約100cmの円形を呈し、床面からの深さは約35cmである。貯蔵施設か。

＜遺物＞土器が5.5kg、石器が11点出土した。このうち掲載したのは、土器12点(11～22)と石器8点(195～202)である。土器は文様をもつものが少ないが、床面出土の11は木木10式に比定されるものと考えられる。石器は多種出土しており、埋土から有孔石製品(198)や磨製石斧(199)、床面から特殊磨石(200)や石皿類(201・202)などがある。

＜時期＞出土遺物や炉の形態から、縄文時代中期後葉に帰属するものか。

S103竪穴住居跡(第16・17図、写真図版12・13/遺物:第23・24・34・35図、写真図版21・28・29)

＜位置・検出状況＞調査区東側、尾根上平坦部に位置し、Ⅲ層で検出した。平面的なプランは土色が地山とほぼ同じため、全く認識できなかったが、この周辺から遺物が多く出土することや焼土粒や炭化物といった混入物が入ることから、グリッドを設定し掘り進めることにした。その結果、堅く締まるフラットな面や石囲炉が見つかったことから、竪穴住居跡と認識した。

＜重複遺構＞S102、SK02・03・04と重複する。SK04のみ新旧関係は不明。これ以外は本遺構に切る。

＜平面形・規模＞北西側の壁はS102に切られるため遺存しない。やや歪だが、径約850cmの円形を呈する。

＜埋土＞6層に細分したが、ほぼ全体が地山起源の褐色～黄褐色土で占められる。人為堆積の可能性が高い。

＜壁・床面＞壁は直立気味に立ち上がり、検出面からの深さは約70cmを測る。床面は概ね平坦で、堅く締まる。

＜炉＞南壁寄りに石囲炉が確認された。角礫・亜角礫を複雑に組み合わせた複式炉である。一辺約100～110cmの方形組石を中心に、この北側に一辺40cmの小方形組石が取り付く。また中心の方形組石の内部は間仕切りの石列が配置されており、全体で3室に分かれる。小組石内には焼土は確認できないが、中心の組石内の2室には焼土が見られる。炉内は褐色・黄褐色土で覆われており、焼土ブロックなどが多く混入する。床面からの深さは約50cmを測る。組石の南側、南壁際には225×150cmの楕円形の前庭部が確認できる。前庭部底面は非常に硬化している。炉石周囲には炉石の設置痕が見られ、掘り方は深いもので30cmにも及ぶ。また、この石囲炉を断ち割ったところ、北側に長方形に広がる赤褐色焼土を検出した。この周囲から石組の一部が確認されたことから、本遺構は炉の作り替えが行われたものと推測される。

＜床面施設＞柱穴を10個確認した(P1～11、P8は欠番)。

＜遺物＞土器が5.4kg、石器が32点出土した。このうち土器11点(23～33)、石器17点(203～219)を掲

載した。比較的土器の出土量は多いが、復元できたもの、文様をもつ個体は少数である。埋土中ではあるが、23は胴部下半が膨らむ形状から大木9～10式に、文様のあるものは大木8b～10式に比定されるものと考えられる。石器の出土量は今回確認した遺構の中では最も多い。床面からの出土も豊富で、磨製石斧や敲磨器類、石皿類などがある。また炉石として転用されたものもあり、217・218がこれにあたる。

<時期・小結>出土遺物・炉の形態から、縄文時代中期後葉(大木9～10式期)と求めたい。また炉内より採取した炭化物を¹⁴C年代測定をしたところ、4,060±20yrBPという結果が得られた。出土土器の編年ともおおよそ合致する。本遺構の複式炉は複雑に石組されたもので、石組から前庭部を合わせた規模は長軸で約260cmを測る大きなものである。燃焼部は中央の方形組石を間仕切りした2か所と判断される。これに取り付く小組石には焼成痕がないことから、異なった機能をもつものと考えられる。また、これ以前の旧炉が断ち割り後に確認でき、本遺構が2時期に分かれることが伺える。これは柱穴の配置からも推察でき、新段階と旧段階の柱穴があるものと考えられる。各柱穴の規模や配置から、P1・2・4・5・6・7・9・10は新段階に伴うものか。

S104竪穴住居跡(第18図、写真図版14・15/遺物:第24～26・35、写真図版22・29)

<位置・検出状況>調査区南西側斜面部に位置し、Ⅲ層で検出した。S103同様、平面的なプランは検出段階では全く認識できず、地山との差は判別が付かなかったため、グリッドを設定し掘り進めたところ、石囲炉が検出され、住居跡と判断するに至った。

<重複遺構>SK07と重複し、これを切る。

<平面形・規模>約715×590cmの楕円形を呈する。

<埋土>8層に細分した。褐色土が大部分を占め、下位にやや明るめの黄褐色土ブロックが堆積する。人為堆積か。

<壁・床面>壁は床面から緩やかに立ち上がり、山側がほぼ直立する。検出面からの深さは最深部で約70cmを測る。

<炉>中央のやや北東寄りに石囲炉が構築されている。石囲部が大小2室ある複式炉である。主体となる石囲部は一辺約170cmの方形、これの北側に約40×80の小長方形が取り付く。両室内に焼土が確認できるが、小室内の焼成は微弱である。炉内の埋土は褐色土の単一層で、床面からの深さは約15cmである。これらの周囲には褐色の炉石の設置痕が見られる。

<床面施設>土坑2基(K1・2)、柱穴7個(P1～7)を確認した。K1は炉の西側に隣接し、約100×85cmの楕円形を呈する。床面からの深さは約50cmを測る。K2は南側の壁寄りに位置し、径約85cmの円形を呈する。深さは約40cmである。両者とも貯蔵施設であろうか。柱穴は大小様々だが、径35～50cmの円形、床面からの深さは13～42cmを測る。P3・4が重なるが、概観としては全周するような配置となる。

<遺物>土器が8.8kg、石器が17点出土した。このうち掲載したのは、土器27点(34～60)、石器7点である。土器の出土量は今回確認された遺構の中で最も多い。文様のあるものは渦巻文や匚字状文が見られることから、大木8b・9式に比定される。石器は石鎌や石錐といった剥片石器類が多く出土している。

<時期>出土遺物からは大木8b・9式が想定されるが、炉の形態を踏まえて、縄文時代中期後葉(大木9式期)の帰属と考えたい。

S I 05 竪穴住居跡(第19図、写真図版15・16/遺物:第36図、写真図版29)

<位置・検出状況>調査区東側、尾根上平坦部に位置し、Ⅲ層で検出した。S I 03同様、平面的なプランは土色が地山とほぼ同じため、全く認識できなかったが、この周辺から遺物が多く出土することや焼土粒や炭化物といった混入物が入ることから、グリッドを設定し掘り進めた結果、竪穴住居跡と認識した。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>東側は調査区外へと延びるため未確認であるが、径約470~490cmの円形を呈する。

<埋土>7層に細分した。上位は暗褐色土で覆われるが、これより下位は褐色土に炭化物・焼土粒が混入する層を主体とする。

<壁・床面>壁はほぼ直立し、検出面からの深さは約65cmを測る。南西側の床~壁面には約80×20×25cmの自然石が遺存している。設置の掘り方は確認できなかったが、意図的にこの位置に設置された可能性がある。この南西側は斜面の下方側にあたり、深度が最も浅い部分であることから、出入りの昇降に使用されたものと考えられる。床面は概ね平坦で、堅く締まる。炉周辺には数か所の焼土の広がり確認できる。いずれも焼成は弱く、不整形を呈する。土層の混入状況と合わせ、焼失住居の可能性が考えられる。

<炉>中央からやや南西寄りに石囲炉が検出された。南西辺にのみ大きな石を配置し、規模は約75×60cmを測る。炉内には2か所に赤変した焼土が広がるが、焼成は弱い。埋土は炭化物を多量に含む褐色土で、床面からの深さは約10cmである。炉石の掘り方は平面上は明瞭ではないが、床面から約20cmの深さに掘削され、設置されている。

<床面施設>なし。

<遺物>土器が1.2kg、石器が8点出土した。土器の出土量は少量で、微細な破片が主である。そのため掲載したのは石器6点(227~232)のみである。

<時期>時期が特定できる出土遺物ないため詳細は不明である。下層より出土した炭化物を¹⁴C年代測定したところ、3,870±20yrBPという結果が得られた。縄文時代後期前葉に属するか。

S I 06 竪穴住居跡(第19図、写真図版16/遺物:第26・36図、写真図版23・29)

<位置・検出状況>調査区中央斜面部に位置し、Ⅲ層で検出した。検出時は全く平面プランが判らなかったが、遺物が出土することからトレンチを入れ状況を確認したところ、締まりのある平坦面が現れたことから、土色を地山とほぼ同じとする褐色土を覆土とする住居跡が存在することが判った。また床面の中央付近では、円形に広がる褐色土のプランが確認でき、本遺構を切る土坑の存在も明らかとなった(S K06)。本遺構は中央部の大部分が重複により損失しているため、炉跡を確認することができなかったが、形態的に竪穴住居跡と判断した。

<重複遺構>上記のとおり。S K06と重複し、これに切られる。また、S K05とも南側でわずかに重なるが、新旧については判別が付かなかった。

<平面形・規模>約480×370cmの楕円形を呈する。

<埋土>5層に細分した。地山起源の褐色土が主体。山側からの自然流入か。

<壁・床面>壁は床面から直立し、上半部で外傾する。深さは約80cmを測る。

<炉>上述したように未検出。

<床面施設>なし。

<遺物>土器が2.5kg、石器が5点出土した。このうち、土器6点(61~66)と石器3点(233~235)を

掲載した。床面よりはほぼ完形の小型鉢(61)が出土しており、大木9式に比定されるものである。石器は石鏃2点(233・234)と有孔石製品1点(235)がいずれも埋土中から出土している。

<時期>出土遺物から、縄文時代中期中葉(大木9式期)と判断される。

(2)土 坑

SK01土坑(第20図、写真図版17/遺物:第26・27図、写真図版23)

<位置・検出状況>調査区東側、斜面部に位置し、検出面はⅢ層である。覆土が地山と似ているため、プランとしての認識は困難であった。

<重複遺構>なし。

<平面形・規模>周辺をグリッド掘削したため、開口部の形状は現状不整である。開口部約200×140cm、底部径約130cmの円形を呈する。

<埋土>6層に細分した。下位に黄褐色土、中位に暗褐色土、上位に褐色土が堆積する。自然堆積と考えられる。

<壁・底面>壁はやや外傾するが、直立気味に立ち上がり、深さは約140cmを測る。底面は平坦で、堅く締まる。また底面の西側には礫が複数個確認された。使用痕跡のない角礫であるが、廃棄されたものであろうか。詳細は不明。

<遺物>土器が0.7kg出土した。石器は出土していない。掲載したのは7点(67~73)である。いずれも埋土中の出土であるが、67~69は隆沈線による渦巻文の一部と見られることから、大木8b式が想定される。

<時期・機能>時期を特定できるものは少ないが、縄文時代中期中葉~後葉と考えられる。規模・形状から貯蔵穴の可能性はある。

SK02土坑(第20図、写真図版17)

<位置・検出状況>調査区東側、斜面部に位置し、検出面はⅢ層である。検出時は判別が付かなかったが、S I 03精査過程で認識した。

<重複遺構>S I 03と重複し、これを切る。

<平面形・規模>開口部約200×180cm、底部約190×170cmのやや楕円形を呈する。

<埋土>8層に細分した。下位に粘性の高い褐色土が一律に堆積し、その後褐色・黄褐色土が全体に堆積する。下層は人為的に廃棄された土層を示すが、その後は自然流入したものか。

<壁・底面>壁は底面から内傾し、中位から一転し外傾するフラスコ状を呈する。検出面からの深さは約120cmを測る。底面は平坦で堅く締まる。

<遺物>土器片が数点(29g)出土した。掲載したものは無い。

<時期・機能>時期を特定できるものがないため、詳細は不明である。規模・形状から貯蔵穴の可能性が高い。

SK03土坑(第20図、写真図版17/遺物:第27図、写真図版23)

<位置・検出状況>調査区東側、斜面部に位置し、検出面はⅢ層である。検出時は判別が付かなかったが、S I 03精査過程で認識した。

<重複遺構>S I 03と重複し、これを切る。

<平面形・規模>S I 03と並行して精査したため、本来の検出面より低い位置での形状である。現状

開口部約170×160cm(断面ベルトから推定190cmは見込まれる)、底部約170×150cmのやや楕円形を呈する。底部が南東側に大きく張り出す。

<埋土>5層に細分した。下位は褐色土、上位は黄褐色土を主体とする自然堆積と考えられる。

<壁・底面>壁は北西側はやや外傾するがほぼ直立し、南東側は中位を境に下位は内傾、上位は外傾するフラスコ状を呈する。深さは約120cmを測る。底面はほぼ平坦である。

<遺物>土器が0.4kg出土した。石器は出土していない。74・75の2点を掲載した。どちらも埋土中からの出土で、74は口縁波頭部に渦巻文、75は垂下する沈線が見られる。74は大木8 bまたは9式、75は大木9式に比定される。

<時期・機能>出土遺物から縄文時代中期に帰属するものと考えられる。規模・形状から貯蔵穴の可能性が高い。

S K04土坑(第20図、写真図版17)

<位置・検出状況>調査区東側、斜面部に位置し、検出面はⅢ層である。検出時は判別が付かなかったが、S I03精査過程で認識した。

<重複遺構>S I03と重複するが、新旧関係については不明である。

<平面形・規模>S I03と並行して精査したため、本来の検出面より低い位置での形状である。開口部径約140cm、底部径約190cmの円形を呈する。開口部より底部が外側に大きく張り出す。

<埋土>18層に細分した。褐色土・黄褐色土が混在する人為堆積と判断される。

<壁・底面>壁は底面から内傾した後、中位より上で外反するフラスコ状を呈する。検出面からの深さは推定140cm。底面は平坦である。

<遺物>なし。

<時期・機能>出土遺物がないことから詳細な時期は不明である。規模・形状から貯蔵穴の可能性が高い。

S K05土坑(第21図、写真図版18/遺物：第27図、写真図版23)

<位置・検出状況>調査区中央、斜面部に位置し、検出面はⅢ層である。S I06精査過程で床面に褐色土の円形プランを確認したことにより認識した。

<重複遺構>S I06と重複し、新旧関係については不明である。

<平面形・規模>S I06と並行して精査したため、東側の開口部が本来の検出面より低い位置での形状である。開口部径約200～210cm、底部径約100～110cmの円形を呈する。

<埋土>18層に細分した。褐色土・黄褐色土が混在する人為堆積と考えられる。

<壁・底面>壁は底面からほぼ直立し、深さは約140cmを測る。底面は概ね平坦である。

<遺物>土器が1.8kg出土した。石器の出土はなし。掲載したのは7点(76～82)である。いずれも埋土中からの出土だが、文様のあるものは大木8 b～10式に比定されるものが多い。

<時期・機能>出土遺物から、縄文時代中期中葉～後葉に帰属する可能性がある。機能については不明である。

S K06土坑(第21図、写真図版18/遺物：第27・36図、写真図版23・29)

<位置・検出状況>調査区中央、斜面部に位置し、検出面はⅢ層である。S I06精査過程で確認した。

<重複遺構>S I06と重複するが、新旧関係については不明である。

＜平面形・規模＞上述したように、検出段階がS I 06精査過程においてであったことにより、開口部の大半は損失しており、現段階で確認できる開口部はS I 06床面と同レベルのものである。現状、開口部径約170cm(断面ベルトから推定される本来の開口部は径300cm程か)、底部径約220cmの円形を呈する。底部が外側に大きく膨らむ形状となる。

＜埋土＞22層に細分した。中位以下は黄褐色土・褐色土を主体に複雑に混在する人為堆積と考えられ、これより上位は層位状況から自然堆積の可能性が考えられる。

＜壁・底面＞壁は底面から内湾、その後中位から上位にかけて外反するフラスコ状を呈する。検出面からの深さは最深部で約200cmを測る。底面はほぼ平坦で、堅く締まりが認められる。

＜遺物＞土器が0.2kg、石器が1点出土した。掲載したのは、土器は大木9式に比定される胴部片1点(83)と石鉄1点(236)のみである。いずれも埋土中からの出土である。

＜時期・機能＞出土遺物が少量なことから、時期の特定は困難だが、およそ縄文時代中期に帰属するものと思われる。規模・形態から貯蔵穴と判断される。

S K 07土坑(第21図、写真図版18/遺物:第27図、写真図版23)

＜位置・検出状況＞調査区中央、斜面部に位置し、検出面はⅢ層である。S I 06精査過程で確認した。

＜重複遺構＞S I 06と重複するが、新旧関係については不明である。

＜平面形・規模＞上述したように、検出段階がS I 06精査過程においてであったことにより、開口部の大半は損失しており、現段階で確認できる開口部はS I 06床面と同レベルのものである。現状、開口部径約170cm(断面ベルトから推定される本来の開口部は径300cm程か)、底部径約220cmの円形を呈する。底部が外側に大きく膨らむ形状となる。

＜埋土＞22層に細分した。中位以下は黄褐色土・褐色土を主体に複雑に混在する人為堆積と考えられ、これより上位は層位状況から自然堆積の可能性が考えられる。

＜壁・底面＞壁は底面から内湾して立ち上がるが、その後中位から上位にかけて外反する。断面形状はフラスコ状を呈する。検出面からの深さは最深部で約200cmを測る。底面はほぼ平坦で、堅く締まりが認められる。

＜遺物＞土器が0.3kg出土し、石器は出土していない。土器は2点(84・85)を掲載した。いずれも埋土中からの出土で、84には隆沈線による渦巻文様が見られることから、大木8b式に比定される。

＜時期・機能＞出土遺物が少量なことから、詳細な時期の特定はできないが、概ね縄文時代中期に帰属するものと考えられる。規模・形態から貯蔵穴と判断される。

(3) 焼土遺構

S N 01焼土遺構(第21図、写真図版18)

＜位置・検出状況＞調査区東側、尾根上平坦部に位置する。検出面はⅢ層で、表土直下約10～15cmで確認した。

＜重複遺構＞S I 01と重複する。S I 01埋没後に焼成されている。

＜平面形・規模＞約70×65cmの歪な円状に広がる。

＜厚さ・色調＞赤褐色を呈し、焼成深度は約7cmである。硬化は認められず、土性も脆い印象である。

＜遺物＞なし。

＜時期＞詳細は不明である。

S N02焼土遺構(第21図、写真図版19)

＜位置・検出状況＞調査区中央、尾根上平坦部に位置する。表土直下約10cmで、赤変した範囲を確認した。検出面はⅢ層である。

＜重複遺構＞なし。

＜平面形・規模＞約55×35cmの楕円形状に広がる。

＜厚さ・色調＞赤褐色を呈し、焼成深度は最大10cmを測る。上面は堅く締まりが認められる。

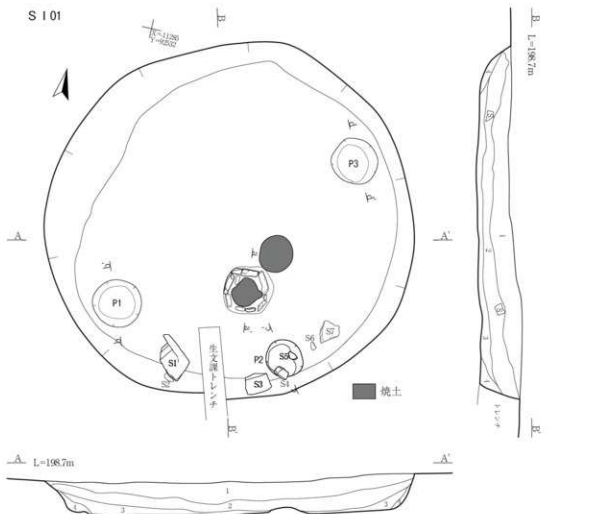
＜遺物＞なし。

＜時期＞詳細は不明である。

(4)遺物包含層

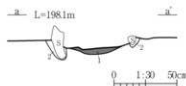
今回の本遺跡の調査において、検出段階での遺構の判断には困難を極めた。その理由として、第一に遺構の覆土が地山とほぼ同色であることが挙げられる。そのため、遺構の有無は、平面プランからはほとんど認識できず、土性のわずかな差異(色調の違いや混入物等)を見極めるほか、遺物の出土が重要であった。特に遺物が集中する地点においては、直下に遺構が存在する可能性を考え、簡易メッシュを張ったり、トレンチを開けたりすることとした。その結果、調査区東側の平坦部から南斜面においては、複数の遺構を確認することができた。この範囲以外においても、遺物が多く出土する部分が見られたが、北斜面の西側や尾根上の中央から西側、南斜面の中央から西側などがこれに該当する。これらの部分においてもトレンチ等で状況を逐一確認したが、遺構は確認されず、基本層序Ⅱ層上位に遺物が多く含まれている状況であった。ただし、北斜面においてのみ斜面下方に堆積が厚くなる状況が見られたが、遺物の混在する部分としては、他地点と変わらず上位のみであった。これらの結果から、Ⅱ層を自然堆積による遺物包含層と捉えた。Ⅱ層の広がりは、尾根頂部には薄く、斜面西側に広く堆積する。出土遺物においても、地点・層位の大きな差異はないものと判断し、他の遺構外遺物と同様とした。

遺物は土器が54.2kg、石器が87点出土している。このうち土器101点と石器33点を掲載した。出土地点は、尾根上中央～東側や北斜面西側からが多い傾向にある。土器の形式としては、遺構内土器同様に大木8b～10式に比定されるものが多く、概ね縄文時代中葉～後葉に帰属するものが大半である。石器も器種としては遺構内と大差はない。本遺跡が該期を主体とする一要因にあたると判断できる。



S101

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや有 締まり欠 根による痕跡がひどい 1mm程度の炭化物の粒が全体に入る
2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性やや有 締まり欠 根による痕跡がひどい 1mmと同様に炭化物の粒が全体に入る 焼土粒が少量入る
3. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まり有 根による痕跡がひどい ベルト文帯付宮に焼土粒が少量入る
4. 10YR5/6 黄褐色シルト 粘性有 締まりやや有 3層に類似するが、所々に濃い黄褐色ブロックが入る (地山崩落土)



S101P

1. 2.5YR3/6 暗赤褐色シルト 粘性有 締まり欠 焼土
2. 10YR4/4 褐色シルト 粘性有 締まり欠 石振り方



P1

1. 10YR5/6 黄褐色 粘性有 締まり有
Ti-Cu?ブロック多量入る
2. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まり有



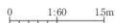
P2

1. 10YR5/6 黄褐色 粘性有 締まり有

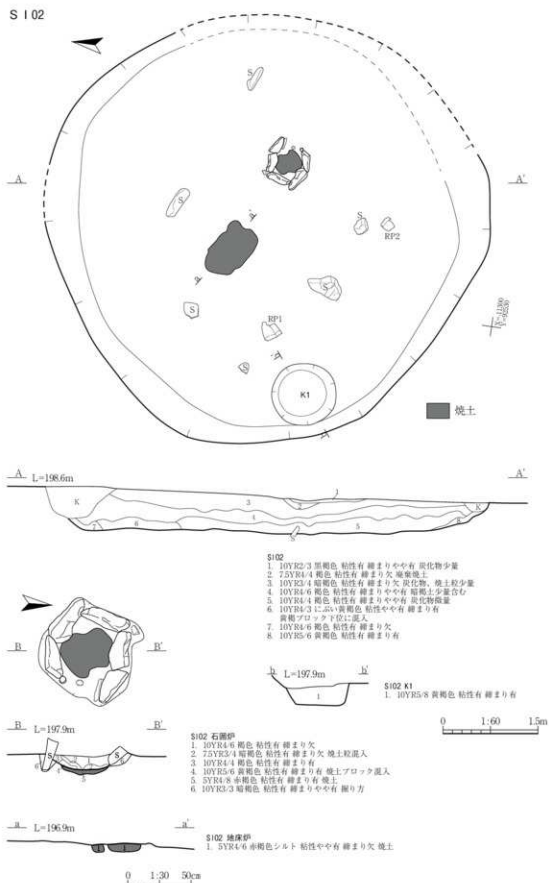


P3

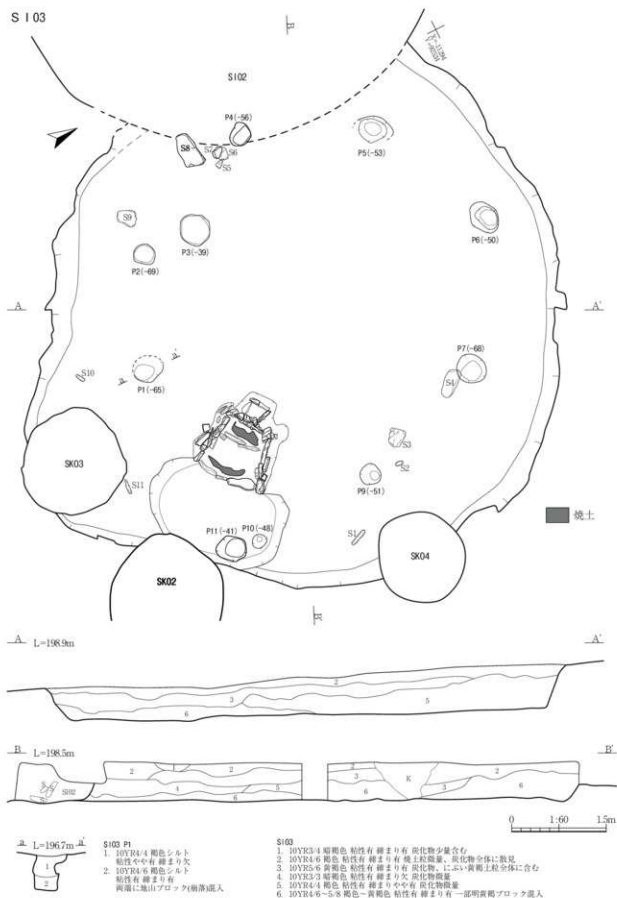
1. 10YR5/6 黄褐色 粘性有 締まり有



第14図 S 101 竪穴住居跡

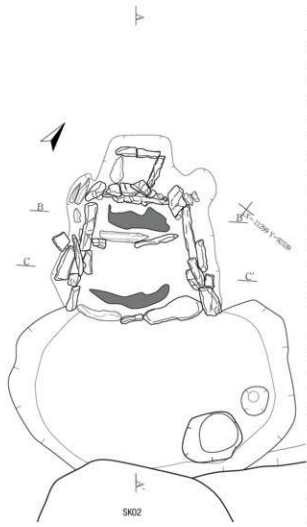


第15図 S102竪穴住居跡

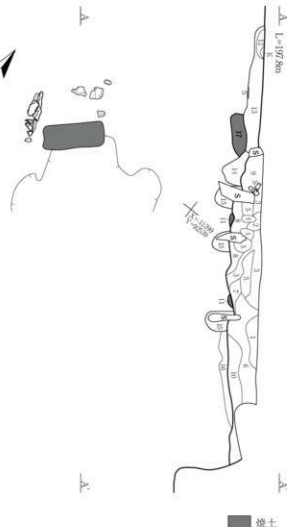


第16図 S103竪穴住居跡

S103 石囲炉



S103 石囲炉(旧)

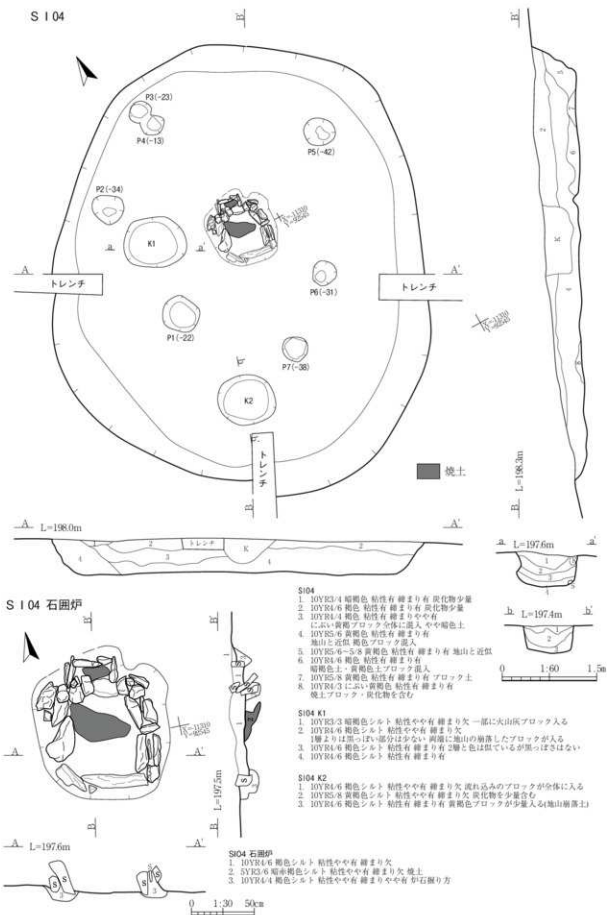


S100 石囲炉

1. 10YR5-6 黄褐色 粘性有 締まり有 炭化物微量含む
2. 10YR4-6 褐色 粘性有 締まり有 焼土粒・炭化物微量
3. 10YR5-6 黄褐色 粘性有 締まり有 黄褐色粒・炭化物微量
4. 10YR5-6 黄褐色 粘性有 締まり有 稀めて有 プロック土
5. 10YR4-6 褐色 粘性有 締まり有 焼土粒・炭化物・黄褐色粒微量
6. 10YR5-6 黄褐色 粘性有 締まり有 稀やや褐色。にふい黄褐色プロック微量
7. 10YR4-6 褐色 粘性有 締まり有 稀やや 焼土プロック微量
8. 10YR4-6 褐色 粘性有 締まり有 稀やや 焼土プロック多く含む
9. 10YR3-4 暗褐色 粘性有 締まり有 炭化物・にふい黄褐色プロック少量含む
10. 10YR3-4 暗褐色 粘性有 稀やや 稀やや 稀やや
11. 5YR4-8 赤褐色シルト 粘性有 稀やや 稀式焼土
12. 5YR4-6 赤褐色シルト 粘性有 稀やや 稀式焼土・田中に属さない焼土
13. 10YR5-6 黄褐色シルト 粘性有 稀やや 田中焼土→稀式が構築時の敷地
14. 10YR4-6 褐色シルト 粘性有 稀やや 田中焼土→稀式が構築時の敷地、炭化物少ない
15. 7.5YR3-4 暗褐色シルト 粘性有 稀やや 稀やや 田中焼土
16. 10YR5-6 黄褐色シルト 粘性有 稀やや 稀やや 田中焼土
17. 2.5YR4-8 赤褐色シルト 粘性有 稀やや 稀やや 田中焼土

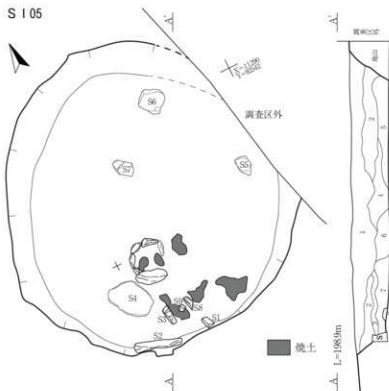
0 1:30 50cm

第17図 S103 石囲炉



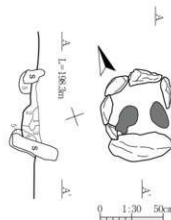
第18図 S 104 竪穴住居跡

S 105



S105

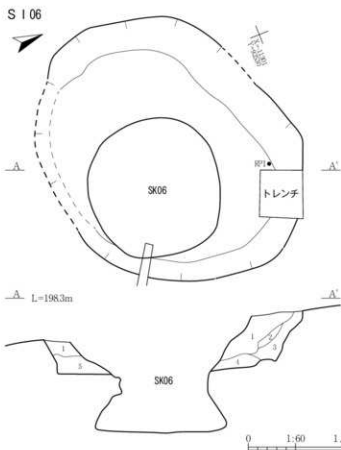
1. 10YR2/3 暗褐色 粘性有 締まり有 炭化物少量含む
2. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まりやや有 炭化物微量含む
3. 10YR2/4 暗褐色 粘性有 締まり欠 黄褐色ブロック少量
4. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まり欠 焼土粒・炭化物微量
5. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まり欠 黄褐色土粒・焼土粒少量
6. 10YR2/4 暗褐色 粘性有 締まり欠 炭化物少量
7. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まりやや有 ブロック状焼土・炭化物多量



S105 石焼炉

1. 10YR2/3 暗褐色 粘性有 締まり有 炭化物微量
2. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まり欠 焼土粒・炭化物微量
3. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まりやや有 焼土粒多い
4. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まり有 に、黄褐色ブロック混入
5. 7.5YR4/6 褐色 粘性有 締まり有 石屑入り

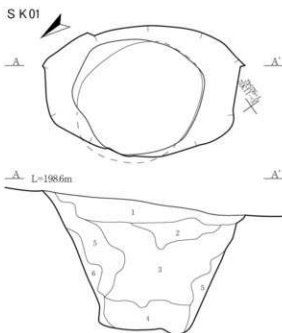
S 106



S106

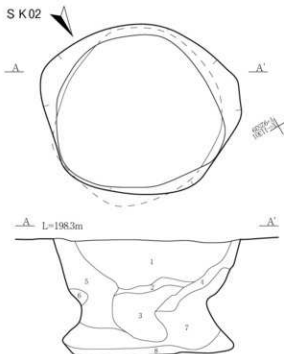
1. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まりやや有
2. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まり欠 黄褐色土粒少量
3. 10YR5/6 黄褐色 粘性有 締まりやや有 炭化物微量
4. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まり有 炭化物・黄褐色土粒少量
5. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まり有 炭化物少量・黄褐色ブロック多く含む

第19図 S 105・06 竪穴住居跡



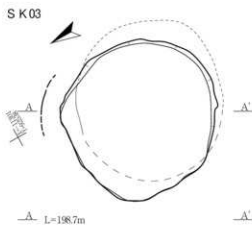
SK01

1. 10YR4/6 褐色 粘性やや有 締まり欠
2. 10YR4/4 褐色 粘性やや有 締まり欠 2%炭化物
3. 10YR3/4 暗褐色 粘性やや有 締まり有 7%炭化物
4. 10YR5/6 黄褐色 粘性有 締まり欠
5. 10YR5/8 黄褐色 粘性やや有 締まり欠
6. 10YR4/6 褐色 粘性やや有 締まり有



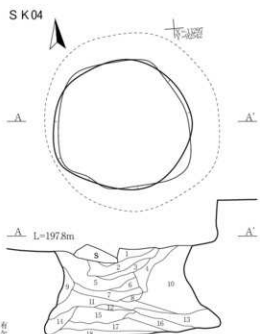
SK02

1. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まりやや有 T₂-Cu₂Oブロック微量
2. 10YR4/3 に近い黄褐色 粘性有 締まり粗有
3. 10YR5/8 黄褐色 粘性有 締まりやや有
4. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まりやや有
5. 10YR5/6 黄褐色 粘性有 締まり有 炭化物・明黄緑土粒少量含む
6. 10YR5/8 黄褐色 粘性有 締まり有 7%ブロック土
7. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まりやや有
8. 10YR4/6 褐色 粘性粗有 締まり有 暗褐色土混入



SK03

1. 10YR5/8 黄褐色 粘性やや有 締まり欠
2. 10YR5/6 黄褐色 粘性有 締まり欠
3. 10YR3/4 暗褐色 粘性やや有 締まり欠
4. 10YR5/6 黄褐色 粘性やや有 締まり欠
5. 10YR4/6 褐色 粘性やや有 締まり欠

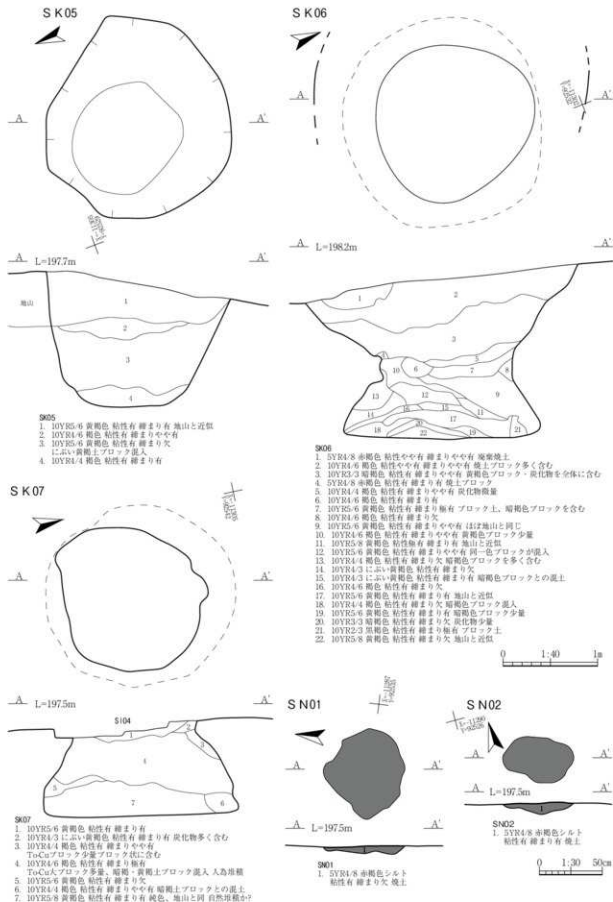


SK04

1. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まり有
2. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まり欠 暗褐色土との混入
3. 10YR4/3 に近い黄褐色 粘性有 締まり欠 暗緑土に黄褐色土含む
4. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まりやや有
5. 10YR3/4 暗褐色 粘性有 締まり欠 黄緑土ブロック全体に少量
6. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まり有 炭化物少量
7. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まり有 黄緑土ブロック少量
8. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まり欠
9. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まり欠
10. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まり欠 10YR4/3 に近い黄緑土に黄緑土混入
11. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まり欠 暗褐色土混入
12. 10YR4/3 に近い黄褐色 粘性有 締まり有
13. 10YR5/6 黄褐色 粘性有 締まりやや有
14. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まり欠
15. 10YR4/3 に近い黄褐色 粘性有 締まり有 炭化物少量
16. 10YR5/8 黄褐色 粘性有 締まりやや有
17. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まり有 全体に黄緑土粒混入
18. 10YR4/6 褐色 粘性粗有 締まり欠 炭化物微量

0 1:40 1m

第20図 SK01~04土坑



第21図 S K05~07土坑、SN01・02焼土遺構

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の総量は、中コンテナ(42×32×18cm)で14箱(総重量129kg)である。これらを土器、土製品、石器・石製品に分類した。各種の内訳は土器が中コンテナ8箱、石器・石製品が同6箱、土製品が5点である。ここでは、遺構内と遺構外出土遺物を併せて扱い報告する。

(1) 土 器

今回の調査で出土した土器は、中コンテナで8箱(総重量85.6kg)、遺構内外の内訳は遺構内土器が31.4kg(37%)、遺構外土器が54.2kg(63%)である。このうち、掲載したのは186点である。全体的に遺構内外とも復元できるほどの個体は少なく、破片が多い。時期としては、縄文時代中期中葉～後葉にほぼ集中し、これ以外に該当する明確な遺物は少数である。これらを既存の型式に分類すると、①大木8b式、②大木8b～9式、③大木9式、④大木10式に比定されるものとなる。その他、形式の判別ができなかったものを⑤その他とした。以下、各型式ごとに概観する。

<①大木8b式>主に渦巻文が施文されているものをこの型式の特徴として抽出した。後述する大木9式においても渦巻文(蕨状文)が施されるが、ここに含めたものは渦巻文の展開方向が縦・横位するものである。破片資料においては、その判別が付かないものもあるため、次項の大木8b～9式を設けた。器形は深鉢がほとんどである。口縁部が残るものは波状となるものが多い。地文は単節・複節縄文が認められるが、施文方向はすべて縦回転のみである。4・24・25・34・35は隆沈線による渦巻文が施されている。89は波頭部に渦巻文が貼付されている。

<②大木8b～9式>前述したように、破片資料のため大木8b～9式の判別ができなかったものをこれに含めた。渦巻文系または匚字文の一部と見られるもの(74・95・110)や、胴部下半から底部にかけての垂下する2ないし3条の隆沈線または沈線が見られるもの(101～103)がある。

<③大木9式>主に匚字文や円・楕円文が施文されるものを抽出した。渦巻文様が施文されるものもあるが、この形式の特徴として縦位に文様が展開するため、蕨状となるものがある。61はほぼ完形個体の小型鉢であるが、縦位展開する隆沈線による蕨状文が見られる。大木9式の中でも古段階のものであろう。匚字文様は主に沈線によるものが多く、これによって区画された文様の内部と外部で異なる施文がなされるものが多い。27・37・64・107・108・110～113は沈線による匚字文が施文され、内部は縄文、外部はミガキ・ナデ調整がされ無文となる。105・106は区画内に刺突、外部は無文である。104は全体がある程度わかる資料だが、頸部の隆線を文様帯区画とし、口縁部は沈線による楕円文内は刺突、外は無文、胴部は隆線による蕨状文(匚字文2対で1出現)と沈線による匚字文で、区画内は縄文、外は無文となる。地文は単節縄文が多いが、複節縄文・無節縄文も少数ある。大木8b式同様、縦回転しか確認されていない。

<④大木10式>前段階の大木9式の匚字文が変形した曲線文やノ字状の文様が描かれるものをここに分類した。11は口縁部と胴部の文様帯が頸部の縄文圧痕を境に区画されるもので、波状口縁部にノ字状文が貼付されている。7・33・78・79・129・130は沈線による曲線文の一部が認められるもので、沈線内はミガキ無文となる。118は小型鉢で、曲線文様区画内に縄文が充填されている。

<⑤その他>型式の特定できなかったものを一括した。多くは地文のみのものであるが、一部の文様しか認められないため判別できなかったものもある。8は口縁部片だが、壺と考えられるものである。並行する3本の沈線が上部に引かれ、そのほかは丁寧なミガキが施されている。後～晩期のものか。

32は口縁部近くの破片と思われるが、並行する2本の沈線間に刺突が施され、これを境に上部がミガキ無文帯、下部が縄文となるものである。中期前葉(大木7b式比定)のものか。131は沈線によるS字状の曲線文が描かれており、後期前葉の可能性が考えられる。縄文のみのものが大半を占めるが、単節縄文が最も多く認められる。次いで、複節、無節縄文も見られるが、これらのほとんどは施文方向が縦回転で、横回転のものは非常に少数である。53・70・71・124・163・164は単軸絡条体1類である。大木10式期のものか。167は組紐が施文されるもので、胎土に繊維を含む。前期前葉の可能性が高い。その他、0段多条(133・165)や結節縄文(135)などがある。底部に数痕が確認できるものは拓本を掲載した。9・21・55・56・60・171・173・184には網代痕、73・169・170・172・181・182には木葉痕が認められる。

(2)土製品

今回の調査で出土した土製品は、円盤状土製品が5点(187～191)である。すべて遺構外からの出土である。破損した土器片を再利用したものと考えられ、縁辺に磨り痕跡が認められる。文様からいずれも縄文時代中期中葉～後葉(大木8b～9式に比定)と判断される。

(3)石器・石製品

今回の調査で出土した石器・石製品は、中コンテナで6箱(総重量43.4kg)、総点数147点である。器種は石鏃・石錐・石匙・楔形石器・スクレイパー類・剥片(フレイク)・礫器・磨製石斧・敲磨器類・砥石・石皿類・石製品が確認された。このうち、剥片石器と礫石器の中でも磨製石斧・礫石器・砥石、石製品については全点を掲載している。掲載に至らなかったものの大半は敲磨器類(敲打痕のあるものは全点掲載)であるが、これらには自然石との判別が不明なものも含まれる。掲載したものについては、明らかな人為痕跡が認められるものを対象とした。全体的な傾向としては、剥片石器類は少なく、礫石器類の比率が高い。中でも磨製石斧や敲磨器類、石皿類に分類したものが多い。以下、器種ごとに既観する。

<①石鏃>遺構内から8点、遺構外から9点、合わせて17点が出土している。長さ最小1.7cm～最大4.0cmを測るが、概ね長さ3cm前後のものが多い。茎部の有無と基部の形状から細分すると、無茎凹基鏃が10点、無茎平基鏃が3点、無茎凹基鏃が1点、有茎凸基鏃が2点、不明なものが1点である。無茎凹基鏃は茎部を持たず、基部に挟りがあるものとし、195・220・227・234・236・238～242がこれに該当する。227・236は挟りが深く入るが、これ以外はやや浅い挟りである。195は欠損部もあり判然としないが、平基に分類される可能性もある。無茎平基鏃は茎部を持たず、基部が直線的なものとした。233・243・244がこれに該当する。無茎凹基鏃は茎部を持たず、基部が曲線的になるものを分類し、245のみがこれに該当する。有茎凸基鏃は茎部を有し、基部が突出するものとし、221・237をこれに含めた。222は剥離調整が片面のみで、基部にも加工痕はない。本種に含めたが、未成品または石鏃の可能性も考えられる。

<②石錐>尖頭状の端部に剥離加工されているものを石錐とした。遺構内外ともに各1点、計2点が出土している。223は上部に円形つまみ部を有するものである。

<③石匙>つまみ部を有し、刃部を作り出しているものを石匙に分類した。遺構内から2点、遺構外4点、計6点が出土している。つまみ部を上部にした場合の形状から、縦型・横型・斜型に分類できる。縦型には196・248・249の3点を含めた。196は幅の狭い細長い形状、248は円状、249は柳葉状をする。横型には250の1点を含めた。側面半分を欠損するが、刃部が弧状をなすものと考えられる。斜型と

したのは192で、つまみ部が左側面部の直線上に設けられている。196は欠損部分が大きいため判別は不明である。また、刃部形態に着目すると、片刃のものは192・196・248、両刃のものは250である。247・249は片側の側面は両刃、もう一方の側面は片刃となっている。

<④楔形石器>台形状をし、両極に剥離をもつものを分類した。遺構外出土の251のみである。下端の片面にのみ刃部が見られる。

<⑤スクレイパー類>定形性がなく、一部に刃部を有するものを分類した。遺構内出土の203、遺構外出土の252・253をこれに含めた。203は円状を呈し、下端を中心に半円状に片刃を作出している。252は片側の側面の一部に二次加工が見られる。253は下端片面に剥離痕が見られる。

<⑥剥片(フレイク)>剥離工程で産出された加工・使用痕のないものをこれに含めた。遺構内から3点出土している。197は今回の調査で唯一確認された黒曜石の石材である。肉眼同定の結果、北上川流域産であった。

<⑦礫器>遺構外出土の254のみである。円礫の剥片に半円状に片刃を作出している。

<⑧磨石斧斧>器面を研磨して成形した斧形石器である。遺構内外から各5点、計10点が出土している。欠損しているものが多く、257～260は刃部のある下半部がない。205・206は刃部に使用痕跡が見られる。228は基部に使用痕が見られるものである。榎様としての使用も考えられる。207・260は小型のものである。どちらも頁岩を石材としているが、207は表面にやや光沢をもつ青灰色をするものである。実用的な機能ではないのかもしれない。

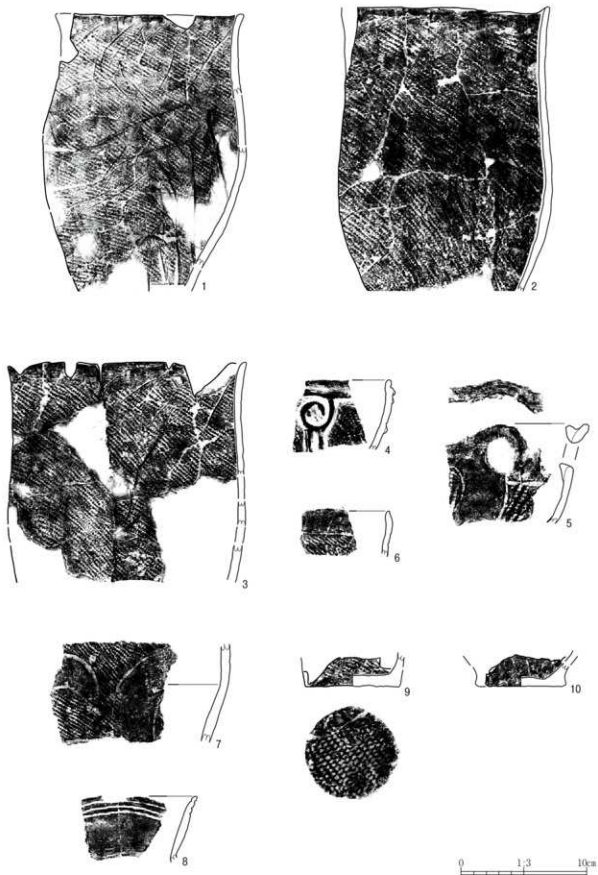
<⑨敲磨器類>礫に敲打痕、磨り痕が見られるものを総称した。これらを細分類して、敲打・磨り痕両方認められるものを敲磨石、敲打痕のみ認められるものを敲石、磨り痕のみ認められるものを磨石とした。敲磨石は遺構内出土の209のみで、上下端部に敲打痕、側面に磨り痕が認められる。敲石は遺構内から3点、遺構外から4点、計7点出土している。204・210・255は下端部に敲打痕剥離が見られるものである。263は下端部に敲打痕がある。208・261・262は第4表内で敲石(特)と表記したが、これら3点の敲打痕は磨滅が著しい潰れたような痕跡である。使用痕の可能性から敲石としたが、もしかしたら何らかの未成品である可能性も考えられる。磨石は遺構内出土8点、遺構外出土1点を掲載している。211・212・229は複数面に磨り痕跡が認められるものである。194・200・213～215・264は特殊磨石と分類した。前出の磨石とは異なり、礫の側面または稜にのみ磨り痕跡が認められるものである。194・215は断面形状が三角形をするもので、稜に磨り痕跡がある。

<⑩砥石>礫の表面に溝状の痕跡が認められるものを分類した。遺構外出土の267が該当する。軟質な砂岩を石材とし、正背面及び一側面に複数の溝状の使用痕が見られる。また、表面の一部には赤変した被熱痕跡が認められる。

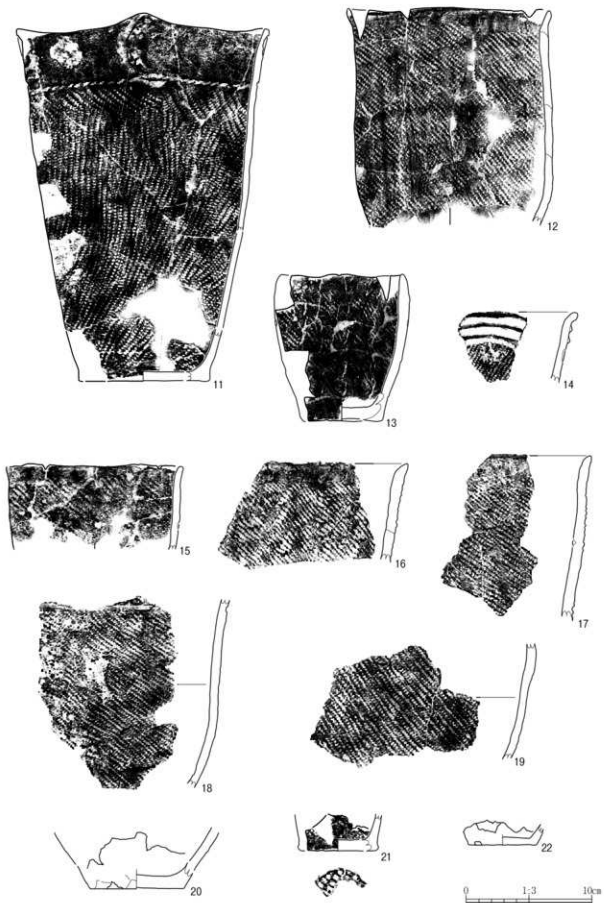
<⑪凹石>角礫に凹み痕のあるもので、遺構内出土の230のみが確認されている。台石としての使用も考えられ、正背面に複数の凹み痕が認められる。

<⑫石皿類>表面に使用痕跡が認められる扁平部分をもつ礫を分類したもので、石皿・台石などをまとめた。遺構内から10点、遺構外から2点、計12点が出土している。201・202は両面に磨り痕が見られる。216は縁辺部が高く、中央のみ使用痕が認められるものである。

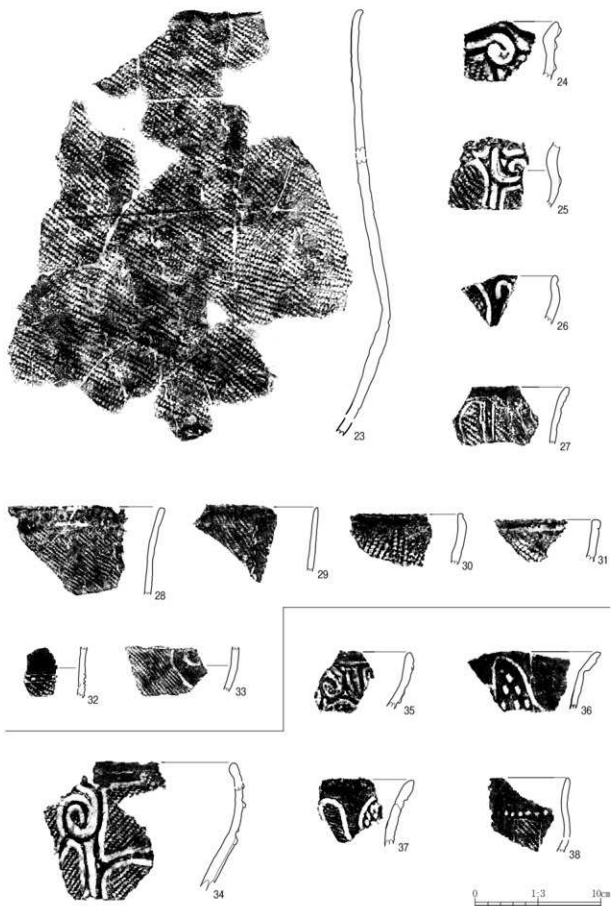
<⑬石製品>遺構内外から各2点、計4点が出土している。198・235・269は貫通孔を有するもので、表面は丹念に研磨されている。石材は198が奥羽山脈(十和田火山?)産の軽石、235・269は北上山地(早池峰山周辺?)産の滑石との鑑定結果が得られた。



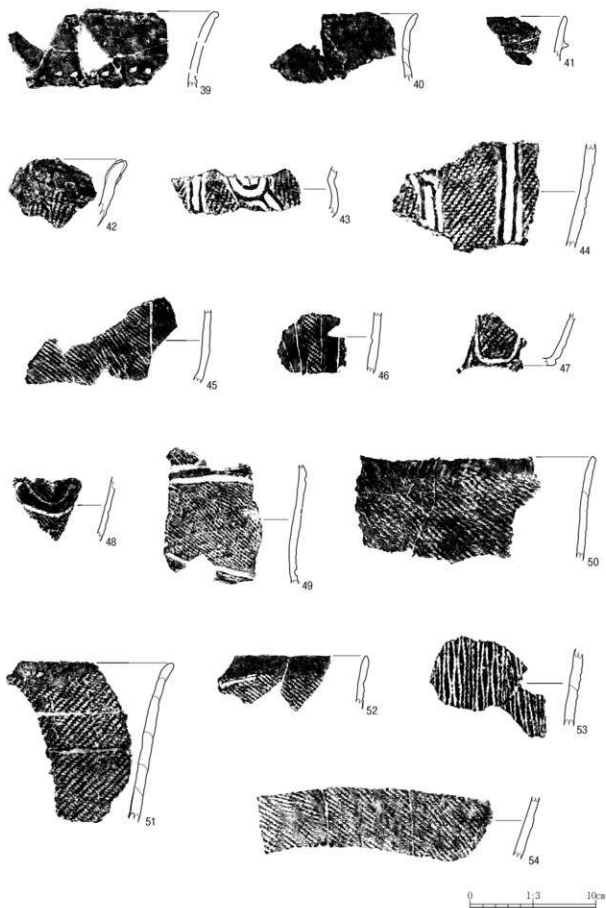
第22図 土器1(S101)



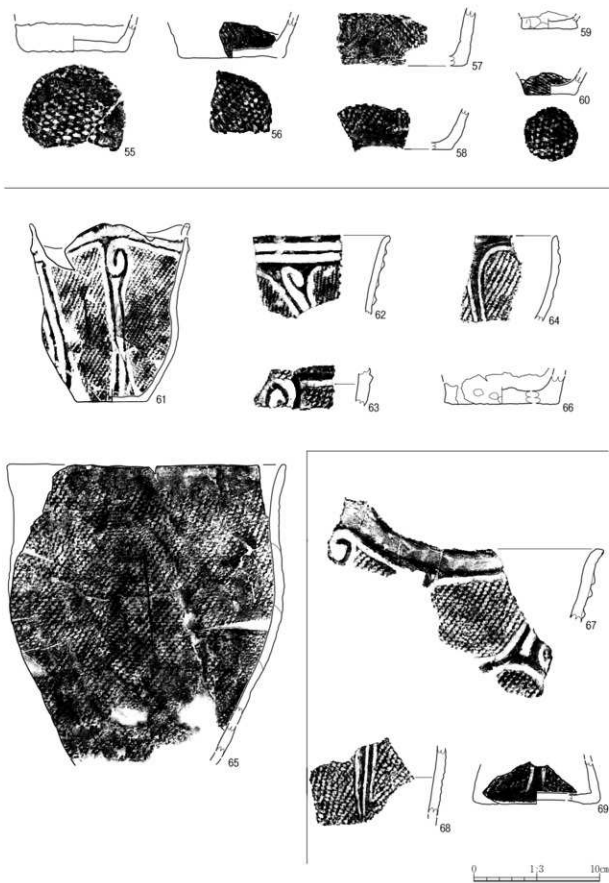
第23図 土器 2 (S 102)



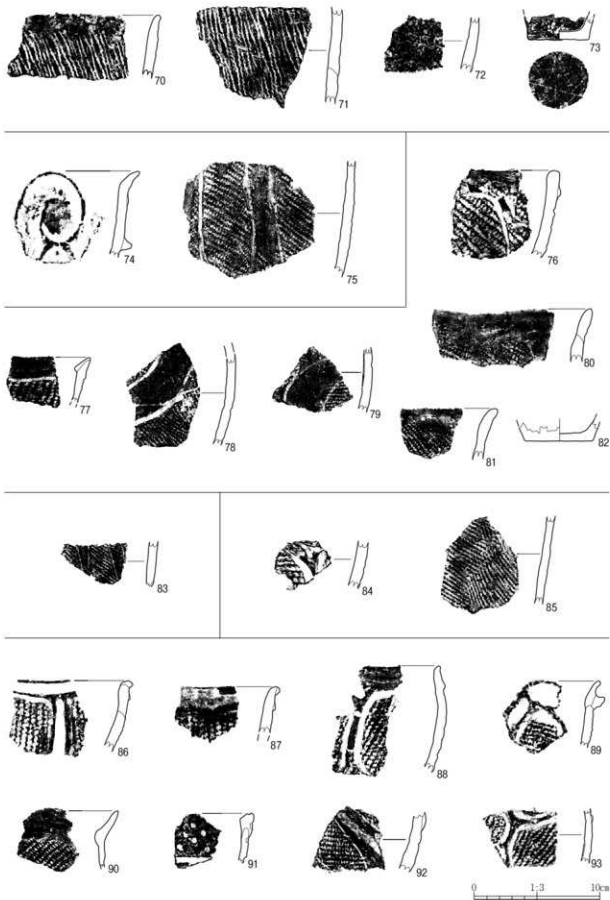
第24図 土器3(S103・04①)



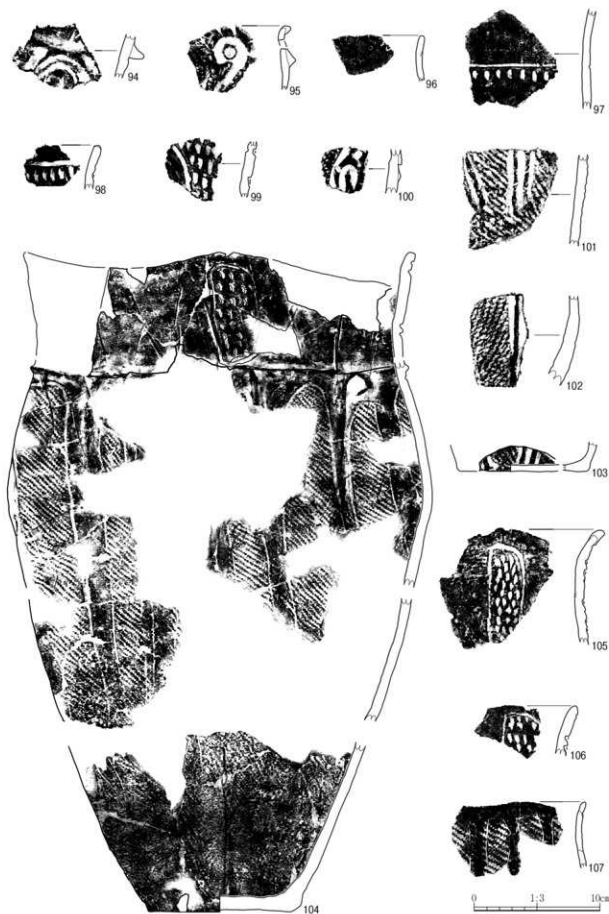
第25図 土器4(S104②)



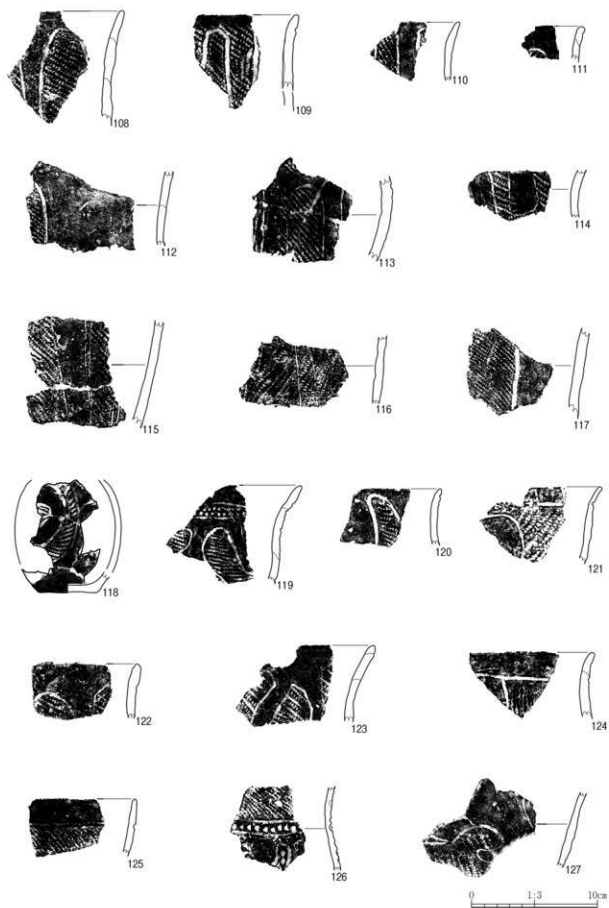
第26図 土器5(S104③・06、SK01①)



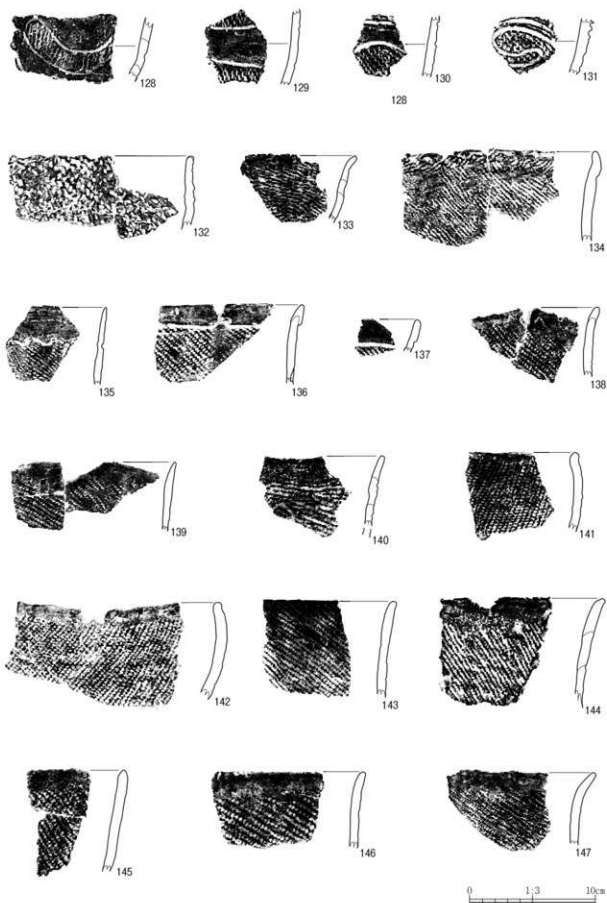
第27図 土器6 (S K 01②・03・05~07、遺構外①)



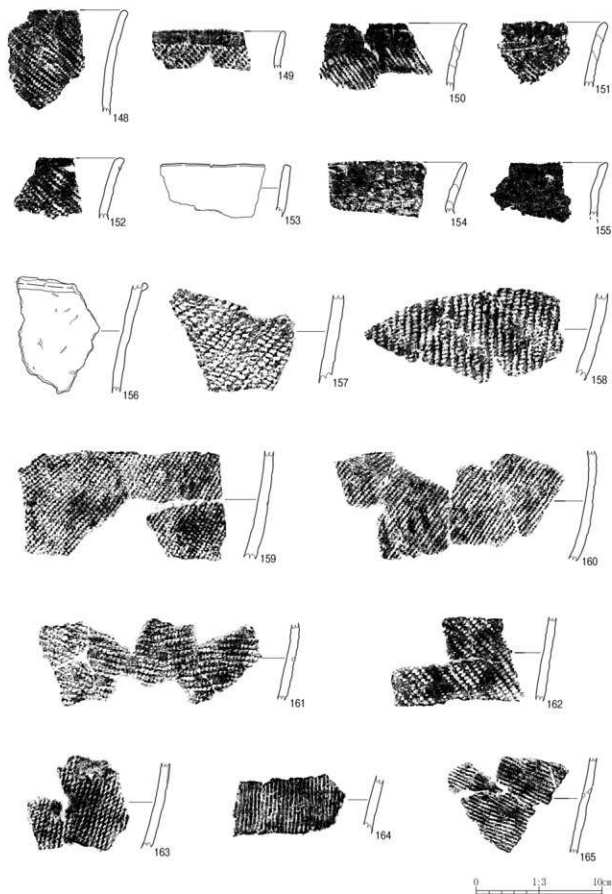
第26図 土器7 (遺構外②)



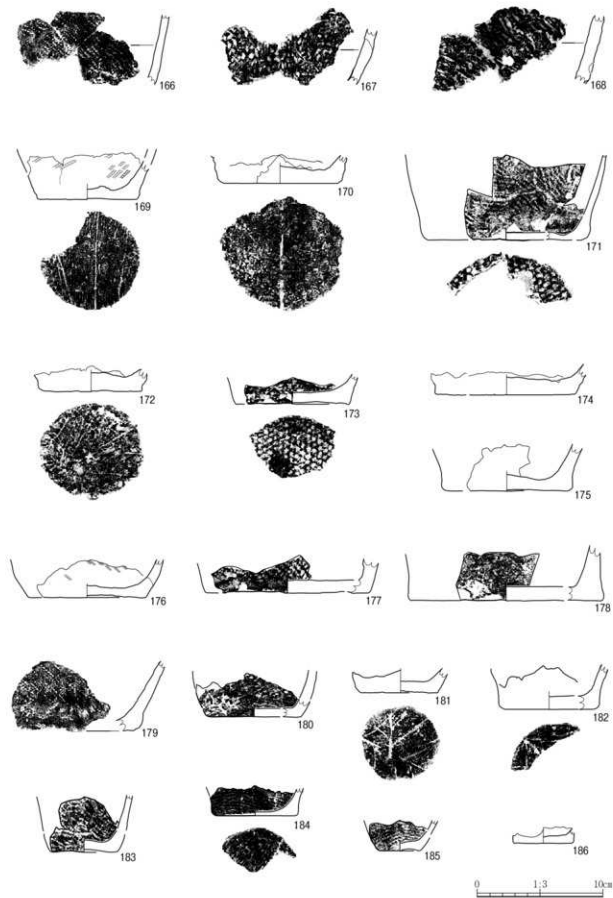
第29回 土器8 (遺構外③)



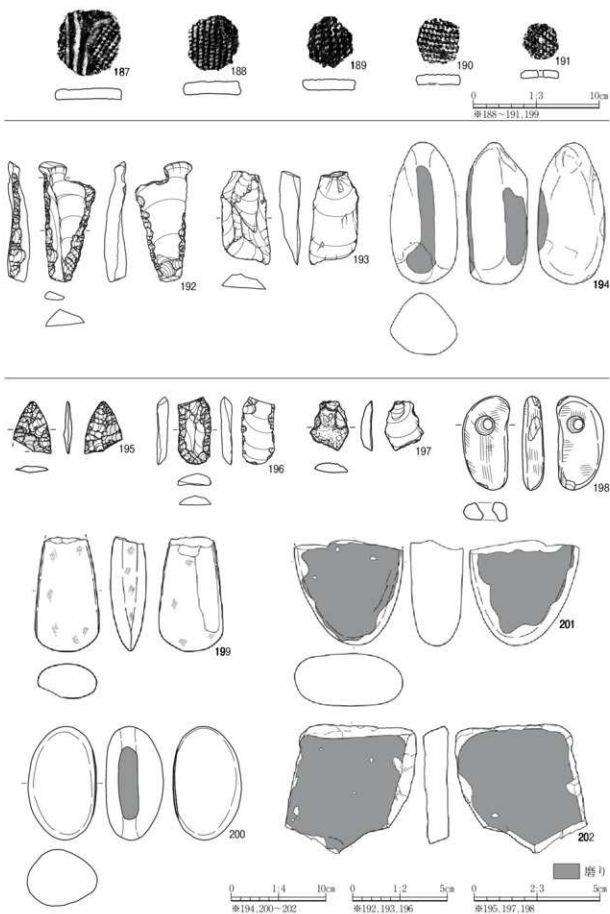
第30図 土器9 (遺構外④)



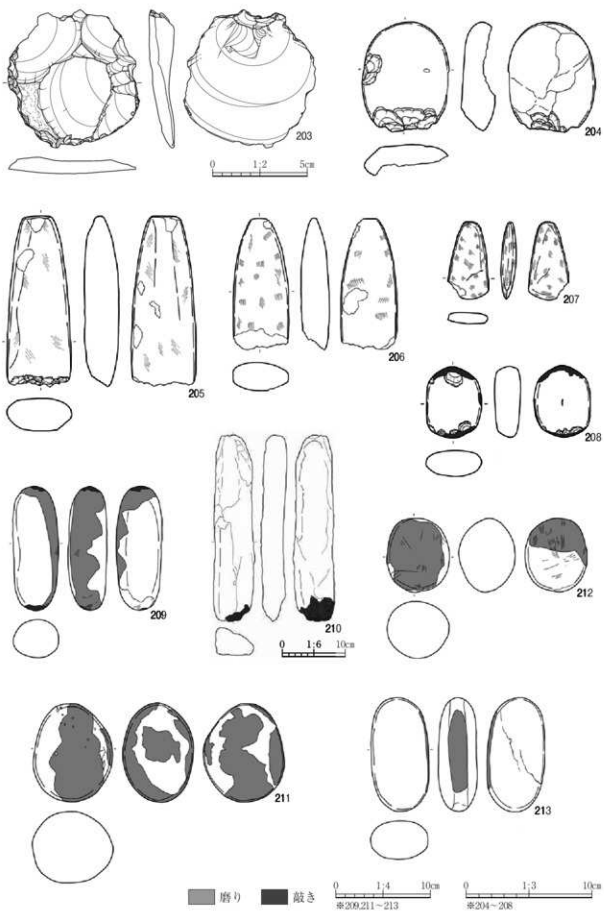
第31図 土器10(遺構外⑤)



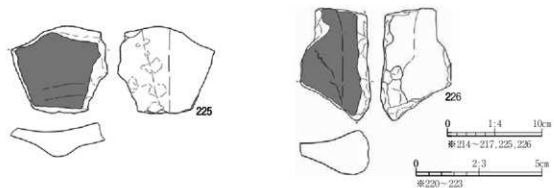
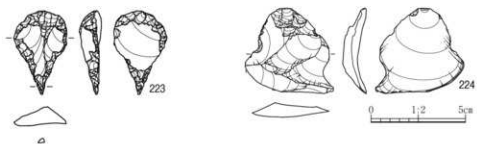
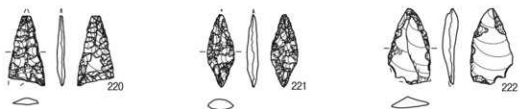
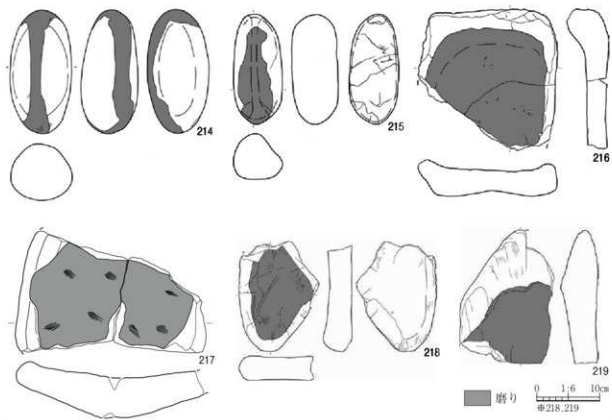
第32図 土器11(遺構外⑥)



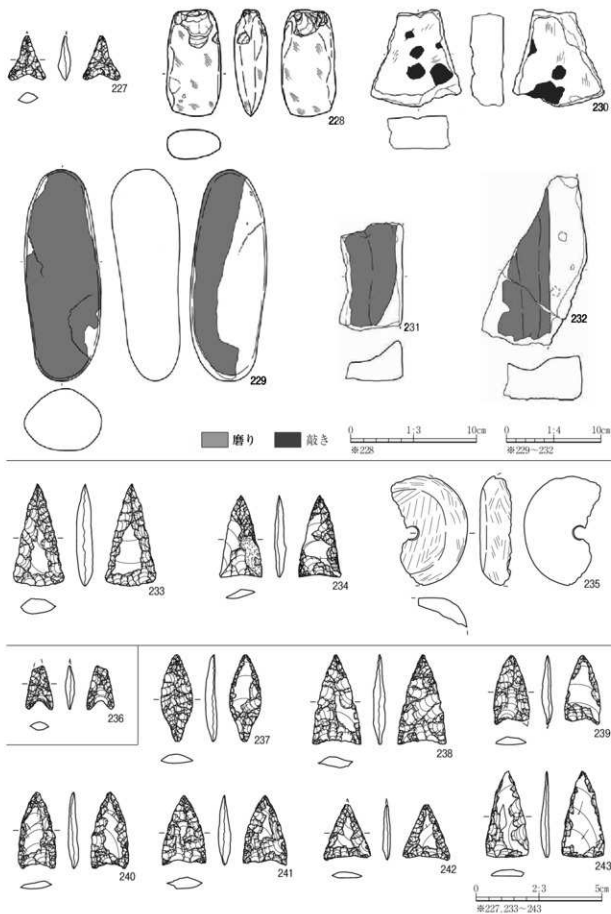
第33図 土製品、石器・石製品1 (S101・02)



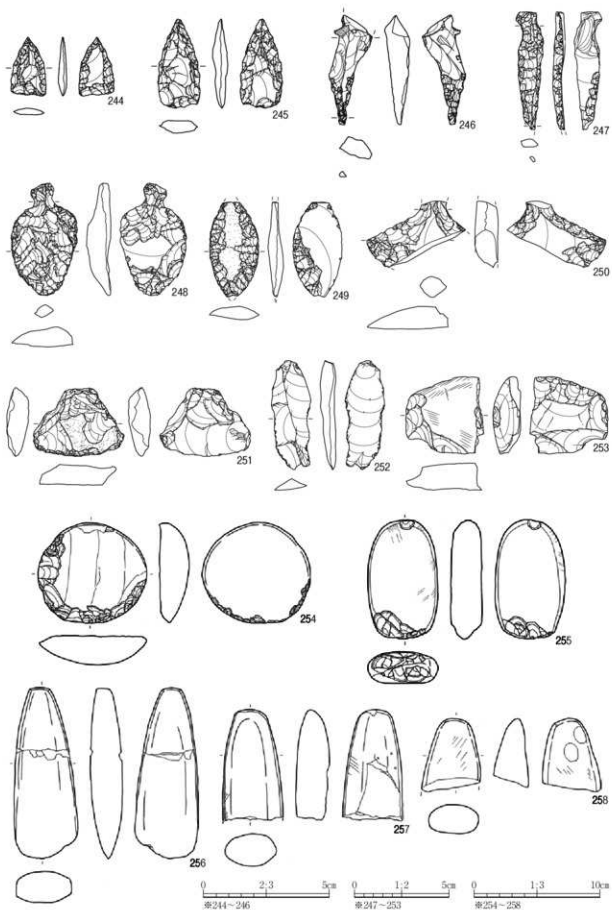
第34図 石器・石製品2 (S103①)



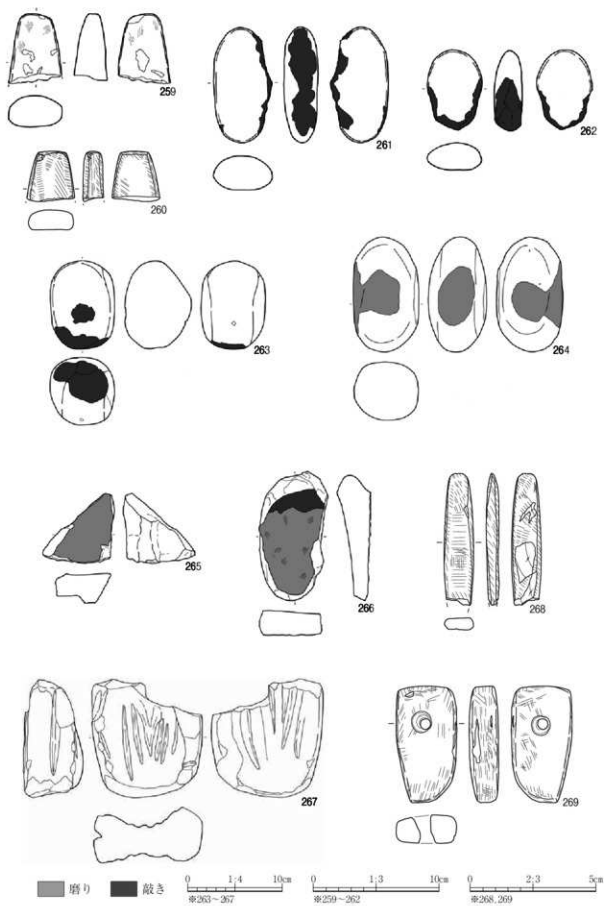
第35図 石器・石製品3 (S103②・04)



第36図 石器・石製品4 (S105・06、SK06、遺構外①)



第37図 石器・石製品5 (遺構外②)



第38図 石器・石製品6 (遺構外③)

第3表 土器・土製品観察表

No.	出土地点・層位	器形	残存部	時期・形式	支様・特徴	備考	国図	写真 掲載
1	S01 RP1・2	深鉢	口縁～胴	大木8b～9	LR様		22	30
2	S01 RP1	深鉢	口縁～胴	大木8b～9	LR様/内面：焼けハジキ		22	30
3	S01 埋土一括	深鉢	口縁～胴		LR様		22	30
4	S01 埋土一括	深鉢	口縁	大木8b	褐色文隆沈陶、LR様、表面スス付着/内面：ナデ		22	30
5	S01 埋土一括	深鉢	口縁	大木8b～9	流状口縁、口縁粘付、穿孔、沈陶、RL様/内面：ナデ		22	30
6	S01 埋土一括	深鉢	口縁		沈陶、LR様/内面：ナデ		22	30
7	S01 埋土一括	深鉢	胴	大木10	曲線文沈陶→LR様、表面剥落/内面：焼けハジキ		22	30
8	S01 埋土一括	底?	口縁	後～晩期?	沈陶、ミガキ/内面：ミガキ		22	30
9	S01 埋土一括	深鉢	底		LR様、底部網代痕、粘土堆い		22	30
10	S01 埋土一括	深鉢	底				22	30
11	S02 RP1 溝敷区一括 土層	深鉢	ほぼ完形	大木10	小流状口縁、ノ字文粘付+刺突、R/L圧痕、RL横溝部→LR様、 鉄全傷/内面：ナデ		23	30
12	S02 RP2 S02 埋土	深鉢	口縁～胴	大木9～10?	散流状口縁、LR様	輪郭のみ	23	21
13	S02 埋土	小型鉢	口縁～底		散流状口縁、LR様?、磨減著しい		23	21
14	S02 前面	深鉢	口縁	大木8b?	流状口縁、散流陶片、RL様/内面：ナデ		23	21
15	S02 埋土	深鉢	口縁		LR様?、磨減著しい		23	21
16	S02 埋土	深鉢	口縁		LR様/内面：ナデ	輪郭のみ	23	21
17	S02 埋土	深鉢	口縁		LR様/内面：ナデ		23	21
18	S02 前面	深鉢	胴		沈陶、LR様、磨減/内面：ハククラク		23	21
19	S02 RP2	深鉢	胴	大木9～10	LR様/内面：ナデ		23	21
20	S02 埋土一括	深鉢	底				23	21
21	S02 埋土一括	小型鉢	底		底部網代痕		23	21
22	S02 埋土一括	小型鉢	底		磨減著しい、底部網代痕		23	21
23	S03 埋土 花壇上東側 土層 T2西側 土層	深鉢	口縁～胴	大木9～10	LR様/内面：ナデ		24	21
24	S03 埋土	深鉢	口縁	大木8b	流状口縁、褐色文隆沈陶、RLR様?/内面：ナデ		24	21
25	S03 埋土	深鉢	口縁	大木8b	褐色文隆沈陶、LR様/内面：ナデ		24	21
26	S03 埋土	深鉢	口縁	大木8b	曲線文沈陶→LR様?/内面：ナデ		24	21
27	S03 埋土	小型鉢	口縁	大木9	ノ字文沈陶→LR様/内面：ナデ		24	21
28	S03 埋土	小型鉢	口縁		LR様/内面：ナデ		24	21
29	S03 埋土	小型鉢	口縁		LR様/内面：ナデ(内)		24	21
30	S03 埋土	小型鉢	口縁		RLR様/内面：ナデ		24	21
31	S03 埋土	深鉢	口縁		LR様/内面：ナデ		24	21
32	S03 埋土	深鉢	胴	大木8b?	ミガキ、沈陶+刺突、LR様/内面：ナデ/内面：ナデ		24	21
33	S03 埋土	深鉢	胴	大木10	曲線文沈陶、LR様		24	21
34	S04 埋土	深鉢	口縁	大木8b	褐色文隆沈陶、RLR様/内面：ミガキ(褐色)		24	22
35	S04 埋土	深鉢	口縁	大木8b	褐色文隆沈陶、施文不明/内面：ナデ		24	22
36	S04 埋土	深鉢	口縁	大木9	小流状口縁、ノ字文沈陶+刺突		24	22
37	S04 埋土	深鉢	口縁	大木9	ノ字文沈陶+RLR様+刺突/内面：ナデ	輪郭のみ	24	22
38	S04 埋土	小型鉢	口縁	大木9	刺突、ノ字文沈陶+LR様		24	22
39	S04 埋土	深鉢	口縁	大木8b?	流状口縁、ミガキ、刺突/内面：ナデ		25	22
40	S04 埋土 花壇上 土層	深鉢	口縁	大木8b～9	散流状口縁、ミガキ/内面：ミガキ	輪郭のみ	25	22
41	S04 埋土	深鉢	口縁	大木8b～9	隆線		25	22
42	S04 埋土	深鉢	口縁	大木9?	流状口縁、曲線文隆沈陶、RLR様		25	22
43	S04 埋土	深鉢	胴	大木9	曲線文隆沈陶、RLR様?/内面：ナデ		25	22
44	S04 埋土	深鉢	胴	大木8b	褐色文隆沈陶の一部、RLR様		25	22
45	S04 埋土	深鉢	胴	大木9	ノ字文沈陶+ナデ、LR様/内面：ナデ		25	22
46	S04 埋土	深鉢	胴	大木9	沈陶+ミガキ、LR様		25	22
47	S04 埋土	小型鉢	底	大木9	柵ノ字文沈陶+RLR様/内面：ナデ		25	22
48	S04 埋土	深鉢	胴	大木10?	曲線文隆沈陶+ナデ、LR様/内面：ナデ		25	22
49	S04 埋土	深鉢	胴		沈陶、LR様/内面：ナデ		25	22
50	S04 埋土	深鉢	口縁		LR様、磨減/内面：剥落	輪郭のみ	25	22
51	S04 埋土	深鉢	口縁～胴		RLR様	輪郭のみ顕著	25	22
52	S04 埋土	深鉢	口縁		沈陶?中途、LR様		25	22
53	S04 埋土	深鉢	胴		単輪跡条1型LR様	輪郭のみ	25	22
54	S04 埋土	深鉢	胴		LR様/内面：ナデ		25	22
55	S04 埋土 花壇上東側 土層	深鉢	底		施文不明、底部網代痕		26	22
56	S04 埋土	深鉢	底		LR様、底部網代痕		26	22
57	S04 埋土	深鉢	底		RLR様/内面：ナデ		26	22
58	S04 埋土	深鉢	底		RLR様?/内面：ナデ		26	22
59	S04 埋土	小型鉢	底				26	22
60	S04 埋土	小型鉢	底	大木8b～9	LR様、底部網代痕		26	22
61	S06 RP1 前面 S06 埋土	小型鉢	ほぼ完形	大木9	小流状口縁(帯穿孔)、褐色文隆沈陶、RLR様 /内面：ミガキ		26	23
62	S06 埋土	深鉢	口縁	大木8b	褐色文隆沈陶、RLR様/ナデ		26	23
63	S06 埋土	深鉢	胴	大木8b	褐色文隆沈陶、RLR様		26	23

No.	出土地点・部位	形 形	残存部	時期・形式	文様・特徴	備考	図版	写真 掲載
64	SD6 埋土	深鉢	口縁	大木9	横溝文(沈濁)+L.R.縦、ミガキ/内面：ナデ		36	23
65	SD6 埋土中央	深鉢	口縁-胴	大木9	口唇ナデ、L.R.縦/内面：ナデ	輪郭み直	36	23
66	SD6 埋土	深鉢	底		内面：ナデ		36	23
67	SK01 埋土 尾根上(東側) 1～11層	深鉢	口縁	大木8b	流状口縁、染香文(沈濁)、L.R.縦/内面：ミガキ		36	23
68	SK01 埋土	深鉢	胴	大木9	八字(沈濁)+ナデ、L.R.縦/内面：ナデ		36	23
69	SK01 埋土	深鉢	底	大木9	横溝文(沈濁)、墨減着しい、地文不明		36	23
70	SK01 埋土	深鉢	口縁		車輪絵巻1期L.R.縦	71と同一単位	37	23
71	SK01 埋土	深鉢	胴		車輪絵巻1期L.R.縦	70と同一単位、 輪郭み直	37	23
72	SK01 埋土	深鉢	胴		織襷文様?		37	23
73	SK01 埋土	小型鉢	底		底部本葉底/内面：ナデ		37	23
74	SK03 埋土	深鉢	口縁	大木8b-9	流状口縁、染香文(沈濁)/内面：ナデ		37	23
75	SK03 埋土	深鉢	口縁	大木9	八字(沈濁)+ナデ、L.R.縦/内面：ナデ		37	23
76	SK05 埋土	深鉢	口縁	大木8b	染香文(沈濁)、L.R.縦/内面：ミガキ		37	23
77	SK05 埋土	深鉢	口縁	大木9-10?	L.R.縦、L.R.縦、口唇内輪縁縁付/内面：ナデ		37	23
78	SK05 埋土	深鉢	胴	大木10	曲線文(沈濁)+ナデ、L.R.縦/内面：ナデ	79と同一ホ?	37	23
79	SK05 埋土	深鉢	胴	大木10	曲線文(沈濁)+ナデ、L.R.縦	78と同一ホ?	37	23
80	SK05 埋土	深鉢	口縁		流状口縁、L.R.縦/内面：ナデ	輪郭み直	37	23
81	SK05 埋土	深鉢	口縁		L.R.縦/内面：ナデ		37	23
82	SK05 埋土	小型鉢	底		地文不明/内面：ミガキ(黒色)		37	23
83	SK06 埋土	深鉢	胴	大木9	八字(沈濁)+ナデ、L.R.縦		37	23
84	SK07 埋土	深鉢	胴	大木8b	染香文(沈濁)、L.R.縦		37	23
85	SK07 埋土	深鉢	胴		L.R.縦		37	23
86	北斜面 東側 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木8b	流状口縁、L.R.斜		37	24
87	北斜面 東側 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木8b	流線、L.R.縦/内面：ナデ		37	24
88	尾根上 東側 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木8b	流状口縁、染香文(沈濁)、L.R.縦/内面：ナデ		37	24
89	尾根上 東側 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木8b	流状口縁、染香文(沈濁)、L.R.縦/内面：ナデ		37	24
90	尾根上 東側 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木8b	口唇に染香文、L.R.縦/内面：ナデ		37	24
91	尾根上 東側 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木8b	流状口縁、口唇折み(染香文)、刺突、沈濁/内面：ミガキ		37	24
92	尾根上 東側 Ⅱ層	深鉢	胴	大木8b	曲線文(沈濁)、L.R.縦		37	24
93	南斜面	深鉢	胴	大木8b	曲線文(沈濁)、L.R.縦/内面：焼けハジキ		37	24
94	北斜面 西側 Ⅱ層	深鉢	胴	大木8b	染香文(沈濁)/内面：洞落		38	24
95	尾根上 東側 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木8b-9	流状口縁、穿孔、黄灰文(沈濁)、地文不明/内面：ナデ		38	24
96	南斜面 中央 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木9	刺突、ナデ/内面：ナデ		38	24
97	南斜面 中央 Ⅱ層	深鉢	胴	大木8b-9	ナデ、沈濁、刺突/内面：ナデ		38	24
98	南斜面 中央 Ⅱ層	深鉢	胴	大木7b/8b?	ミガキ、沈濁+刺突(刺み込)/内面：ナデ		38	24
99	西側 表土-Ⅱ層	深鉢	胴	大木8b	刺突、曲線文(沈濁)		38	24
100	T5 表土-Ⅱ層	深鉢	口縁	大木9	八字文(沈濁)+L.R.縦、ナデ、刺突/内面：ナデ		38	24
101	南斜面 中央 Ⅱ層	深鉢	胴	大木8b-9	黄灰、流状(縁下)、L.R.縦/内面：洞落		38	24
102	尾根上	深鉢	胴	大木8b-9	流状口縁、L.R.縦/内面：ナデ		38	24
103	尾根上 東側 Ⅱ層	深鉢	胴	大木8b-9	流状口縁、L.R.縦/内面：ミガキ		38	24
104	北斜面 Ⅱ層	深鉢	口縁-底	大木9	流状口縁、横溝文(沈濁)+刺突、ミガキ(口縁-胴部)、黄灰文(沈濁)+八字文(沈濁)+L.R.縦、刺突+ミガキ/内面：ナデ(上半のみ)		38	24
105	南斜面 中央 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木9	流状口縁、八字文(沈濁)+刺突、ナデ/内面：ナデ		38	24
106	北斜面 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木9	横溝文(沈濁)、L.R.縦/内面：ナデ		38	24
107	南斜面 西側 表土-Ⅱ層	小型鉢	口縁	大木9	黄灰(口縁)、横溝文(沈濁)+L.R.縦、ミガキ/内面：ナデ	輪郭み直	38	24
108	調査区一區	深鉢	口縁	大木9	八字文(沈濁)+L.R.縦、ナデ	輪郭み直	39	24
109	調査区一區	深鉢	口縁	大木9	L.R.縦+八字(縁)、一部L.R.底		39	24
110	T5 表土-Ⅱ層	深鉢	胴	大木8b-9	黄灰文(沈濁)、L.R.縦		39	24
111	北斜面 西側 Ⅱ層	小型鉢	口縁	大木9	八字文(沈濁)		39	24
112	尾根上 東側 Ⅱ層	深鉢	胴	大木9	八字文(沈濁)+L.R.縦、ナデ/内面：ナデ		39	24
113	北斜面 Ⅱ層	深鉢	胴	大木9	八字文(沈濁)+L.R.縦、ナデ		39	24
114	北斜面 中央 Ⅱ層	深鉢	胴	大木9	沈濁+L.R.縦、ナデ		39	25
115	北斜面 Ⅱ層	深鉢	胴	大木9	沈濁、L.R.縦、ナデ/内面：ナデ		39	25
116	北斜面 Ⅱ層	深鉢	胴	大木9	L.R.縦、沈濁(縁下)		39	25
117	尾根上 東側 Ⅱ層	深鉢	胴	大木10	曲線文(沈濁)+ナデ、L.R.縦/内面：ナデ		39	25
118	尾根上 東側 Ⅱ層	小型鉢?	胴-底	大木10	曲線文(沈濁)、L.R.縦、L.R.縦-一部縁、ミガキ、赤彩色/内面：ナデ		39	25
119	北斜面 西側 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木10	沈濁+刺突、曲線文(沈濁)+L.R.縦、ナデ/内面：ナデ		39	25
120	北斜面 西側 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木9-10	ナデ、八字文(沈濁)、刺突		39	25
121	尾根上 中央 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木10	曲線文(沈濁)+ミガキ、L.R.縦		39	25
122	T1 表土-Ⅱ層	深鉢	口縁	大木10	曲線文(沈濁)+L.R.縦、ナデ/内面：ナデ		39	25
123	北斜面 西側 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木10	曲線文(沈濁)、L.R.縦、ミガキ/内面：ナデ、焼けハジキ	輪郭み直	39	25
124	東側 調査区段 表土-Ⅱ層	深鉢	口縁	大木10	ナデ、沈濁、車輪絵巻1期L.R.縦/内面：ナデ	輪郭み直	39	25
125	南斜面 中央 Ⅱ層	深鉢	口縁	大木9-10?	ナデ、L.R.底、L.R.縦		39	25
126	北斜面 中央 Ⅱ層	餅?鉢?	胴	大木10	L.R.縦、平行沈濁+刺突、曲線文(沈濁)+刺突、ミガキ/内面：焼けハジキ		39	25
127	尾根上 東側 Ⅱ層	深鉢	胴		曲線文(沈濁)+L.R.縦、ナデ/内面：ナデ、ヌス付着		39	25

4 出土遺物

No.	出土地点・層位	器形	残存部	時期・形式	文様・特徴	備考	図取	写真 図取
128	東側 調査区段 表土～Ⅱ層	深鉢	胴	大木10	曲線文(沈線)。ナデ。牟輪跡(表)1個L取	編積み直	30	25
129	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	胴	大木10	曲線文(沈線)+ナデ。牟輪跡(表)1個L取/内面:ナデ		30	25
130	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	胴	大木10	曲線文(沈線)+ナデ。牟輪跡(表)1個L取/内面:ナデ		30	25
131	北斜面 東側Ⅱ層	深鉢	胴	後期?	RL取柄→曲線文(沈線)		30	25
132	尾根上 東側Ⅱ層 T1表土～Ⅱ層	深鉢	口縁	前期?	口唇跡のみ。RL取柄/内面:ナデ		30	25
133	北斜面 西側Ⅱ層	深鉢	口縁		0段多色L取	編積み直	30	25
134	北斜面 中央Ⅱ層	深鉢	口縁	大木7b?	L取。上部のみL取		30	25
135	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	口縁		ナデ。L取→結部横/内面:ナデ		30	25
136	尾根上Ⅱ層	深鉢	口縁		折返しL取。L取/内面:ミガキ		30	25
137	北斜面 西側Ⅱ層	小型鉢	口縁	大木8b	折返しL取+刺突。RL取		30	25
138	南斜面 中央Ⅱ層	深鉢	口縁		渡辺口縁?。L取/内面:ナデ		30	25
139	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	口縁		ナデ。L取		30	25
140	北斜面	深鉢	口縁		L取	編積み直	30	25
141	尾根上 南東側 1～Ⅱ層	深鉢	口縁		RL取/内面:ナデ		30	25
142	尾根上 南東側 1～Ⅱ層 東側 調査区段 表土～Ⅱ層	深鉢	口縁		渡辺口縁?。RL取/内面:ナデ		30	25
143	北斜面Ⅱ層	深鉢	口縁		L取		30	25
144	北斜面 西側Ⅱ層	深鉢	口縁		ナデ。L取/内面:ナデ	編積み直	30	25
145	尾根上Ⅱ層	深鉢	口縁		L取		30	25
146	尾根上 南東側 1～Ⅱ層	深鉢	口縁		L取。ナデ/内面:ナデ		30	25
147	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	口縁		ミガキ。L取/内面:ナデ		30	25
148	西側 調査区段 表土～Ⅱ層	深鉢	口縁		L取/内面:ナデ		31	25
149	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	口縁		ミガキ。L取→一部取		31	25
150	北斜面 西側Ⅱ層	深鉢	口縁		L取。ナデ/内面:ナデ	縁付孔あり。 編積み直	31	25
151	北斜面 中央Ⅱ層	深鉢	口縁		L取	編積み直	31	25
152	北斜面Ⅱ層	深鉢	口縁		L取/内面:ナデ		31	25
153	北斜面Ⅱ層	小型鉢	口縁		無文?		31	26
154	南斜面 中央Ⅱ層	深鉢	口縁	大木7b?	ナデ。無文。磨減	編積み直	31	26
155	北斜面 西側Ⅱ層	深鉢	口縁				31	26
156	北斜面 西側Ⅱ層	深鉢	胴		隆線。ナデ		31	26
157	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	胴		RL取/内面:ナデ		31	26
158	北斜面Ⅱ層	深鉢	胴		RL取		31	26
159	尾根上 東側Ⅱ層 尾根上 南東側 1～Ⅱ層	深鉢	胴		RL取/内面:ナデ。潤落		31	26
160	北斜面 西側Ⅱ層	深鉢	胴		L取		31	26
161	尾根上	深鉢	胴		L取		31	26
162	北斜面Ⅱ層	深鉢	胴		L取/内面:潤落		31	26
163	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	胴		牟輪跡(表)1個L取		31	26
164	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	胴		牟輪跡(表)1個L取		31	26
165	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	胴		0段多色L取。スス付着		31	26
166	尾根上 東側Ⅱ層	小型鉢	胴		まぼろしL取		32	26
167	南斜面 中央Ⅱ層 T1表土～Ⅱ層	深鉢	胴	前期前後	縦線	横線含む	32	26
168	南斜面 中央Ⅱ層	深鉢	胴	前期?	不明		32	26
169	北斜面 西側Ⅱ層	深鉢	底部		RL取。底部木葉痕		32	26
170	T1表土～Ⅱ層	深鉢	底		内面:粘土粒。砂粒多い		32	26
171	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	底		磨風面著。RL取。斜。底部網代取/内面:ナデ		32	26
172	北斜面Ⅱ層	深鉢	底		スス付着。底部木葉痕?		32	26
173	尾根上 西側Ⅱ層	深鉢	底		L取?。底部網代取/内面:ナデ		32	26
174	北斜面Ⅱ層	深鉢	底				32	26
175	西側 調査区段 表土～Ⅱ層	深鉢	底		ナデ		32	26
176	西側 調査区段 表土～Ⅱ層	深鉢	底		ナデ		32	26
177	北斜面 西側Ⅱ層	深鉢	底		L取		32	26
178	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	底				32	26
179	T1表土～Ⅱ層	深鉢	底		L取。ナデ		32	26
180	南斜面下	深鉢	底		RL取		32	26
181	南斜面 中央Ⅱ層	深鉢	底		底部木葉痕/内面:ナデ		32	26
182	尾根上 東側Ⅱ層	深鉢	底		ナデ。底部木葉痕/内面:ナデ。スス付着		32	26
183	尾根上 西側Ⅱ層	小型鉢	底		L取		32	26
184	尾根上 東側Ⅱ層	小型鉢	底		RL取?。底部網代取/内面:ナデ(黒色)		32	26
185	北斜面 西側Ⅱ層	小型鉢	底		L取		32	26
186	北斜面Ⅱ層	小型鉢	底				32	26
187	南斜面 東側Ⅱ層			大木8b	曲線文(沈線)。RL取	円盤状土製品	33	26
188	尾根上 東側Ⅱ層				RL取	円盤状土製品	33	26
189	北斜面 東側Ⅱ層				RL取	円盤状土製品	33	26
190	北斜面Ⅱ層				RL取	円盤状土製品	33	26
191	尾根上 南東側Ⅱ層				RL取	円盤状土製品	33	26

第4表 石器、石製品観察表

No.	出土地点・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	石質・産地・時代	備考	図版 写真 掲載
192	S01 埋土	石斧	6.3	3.0	1.2	11.2 珩岩 北上山地 中生代前期		33 27
193	S01 埋土	湖片石部	4.9	2.7	1.1	12.0 珩岩 北上山地 中生代前期		33 27
194	S01 S2 表面	特殊磨石	14.9	7.2	6.5	989.9 砂岩 北上山地 中生代前期		33 27
195	S02 埋土	石鏝	2.1	1.5	0.3	0.7 珩岩 北上山地 中生代前期		33 27
196	S02 埋土	石斧?	(3.5)	(1.8)	0.6	4.2 珩岩 北上山地 中生代前期	下層一部欠け?	33 27
197	S02 埋土	湖片石部	2.0	1.5	0.4	1.1 黒曜石 北上川流域		33 27
198	S02 埋土	有孔石製品	3.7	1.8	0.85	6.0 珩岩 奥羽山脈 北田大石市 新生代第三紀		33 27
199	S02 埋土	磨製石斧	(9.0)	5.1	2.7	188.8 珩岩 北上山地 中生代白亜紀	基部欠損	33 27
200	S02 表面	特殊磨石	12.0	7.3	6.0	734.7 砂岩 北上山地 中生代前期		33 27
201	S02 S4 表面	石鏝類	(13.5)	(14.0)	6.7	182.6 砂岩 北上山地 中生代前期		33 27
202	S02 S3 表面	石鏝類	(20.3)	(20.9)	4.5	225.0 石黒曜岩 北上山地 中生代白亜紀		33 27
203	S02 埋土	スタレイバー	7.3	7.0	1.3	33.0 珩岩 北上山地 中生代前期		34 28
204	S03 表面	湖石	8.7	6.9	2.7	203.2 砂岩 北上山地 中生代前期		34 28
205	S03 S10 表面	磨製石斧	13.5	5.1	2.7	312.1 凝灰岩 北上山地 中生代		34 28
206	S03 6 ⁺ 前庭部	磨製石斧	14.0	4.4	2.3	188.7 珩岩 北上山地 中生代白亜紀		34 28
207	S03 埋土	磨製石斧	6.2	3.2	1.15	34.2 珩岩 北上山地 中生代前期		34 28
208	S03 埋土	湖石(特)	5.7	4.4	2.1	83.9 砂岩 北上山地 中生代前期	上下層つぶれ	34 28
209	S03 埋土	湖磨石	13.1	4.8	4.1	423.6 砂岩 北上山地 中生代前期		34 28
210	S03 S1 表面	湖石	29.6	6.5	4.8	1251.9 凝灰岩 北上山地 中生代		34 28
211	S03 3 ⁺ 前庭部	磨石	10.5	8.5	7.5	886.8 砂岩 北上山地 中生代前期		34 28
212	S03 3 ⁺ 前庭部	湖石	7.8	6.6	4.0	48.7 砂岩 北上山地 中生代前期		34 28
213	S03 埋土	特殊磨石	12.1	6.1	4.1	484.5 砂岩 北上山地 中生代前期		34 28
214	S03 S2 表面	特殊磨石	13.1	6.5	6.1	740.9 砂岩 北上山地 中生代前期		35 29
215	S03 埋土	特殊磨石	11.7	5.2	4.8	450.2 砂岩 北上山地 中生代前期		35 28
216	S03 埋土	石鏝類	(15.0)	14.7	4.5	509.5 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀		35 28
217	S03 9 ⁺ S13 S03 9 ⁺ IV	石鏝類	12.7	11.1	4.9	821.4 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀		35 28
218	S03 9 ⁺ G	石鏝類	(25.0)	19.0	6.8	3540.0 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀		35 29
219	S03 5 ⁺ 表面	石鏝類	(21.0)	15.0	6.2	2116.9 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀		35 29
220	S04 表面	石鏝	2.8	1.4	0.3	1.0 珩岩 北上山地 中生代前期		35 29
221	S04 埋土	石鏝	2.9	1.0	0.4	1.2 珩岩 北上山地 中生代前期		35 29
222	S04 床土	石鏝	3.0	1.2	0.6	2.0 珩岩 北上山地 中生代前期	石鏝の可能性あり	35 29
223	S04 埋土	石鏝	3.3	2.1	0.9	3.8 珩岩 北上山地 中生代前期		35 29
224	S04 埋土	湖片	4.6	4.6	0.7	13.1 珩岩 北上山地 中生代前期		35 29
225	S04 埋土	石鏝類	(9.2)	(10.3)	2.7	267.2 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀		35 29
226	S04 埋土	石鏝類	(11.9)	(7.3)	4.6	378.9 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀		35 29
227	S05 埋土	石鏝	1.7	1.5	0.5	0.7 珩岩 北上山地 中生代前期		36 29
228	S05 埋土	磨石(石部)	8.4	4.3	2.6	153.3 凝灰岩 北上山地 中生代	上部部破損あり	36 29
229	S05 埋土	湖石	22.4	8.1	7.2	1794.6 砂岩 北上山地 中生代前期		36 29
230	S05 埋土	湖石	10.2	9.6	3.5	396.2 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀	台石後の組込み	36 29
231	S05 埋土	石鏝類	11.5	6.8	4.3	325.4 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀		36 29
232	S05 埋土	石鏝類	18.0	11.0	4.5	583.2 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀		36 29
233	S06 埋土	石鏝	4.9	2.0	0.6	4.5 珩岩 北上山地 中生代前期		36 29
234	S06	石鏝	3.2	1.7	0.4	1.6 珩岩 北上山地 中生代前期		36 29
235	S06 埋土	有孔石製品	4.4	3.1	1.4	12.2 湖石 北上山地 早池山山塊? 古生代オムドビス紀		36 29
236	S06 埋土	石鏝	(1.7)	1.1	0.3	0.5 珩岩 北上山地 中生代前期	上部欠損	36 29
237	北斜面 Ⅰ層	石鏝	3.4	1.3	0.4	1.3 珩岩 北上山地 中生代前期		36 30
238	北斜面 Ⅰ層 東部寄り	石鏝	3.5	1.9	0.5	2.5 珩岩 北上山地 中生代前期		36 30
239	北斜面 Ⅰ層	石鏝	2.7	1.4	0.4	1.1 珩岩 北上山地 中生代前期		36 30
240	北斜面 Ⅰ層	石鏝	3.0	1.5	0.4	1.7 珩岩 北上山地 中生代前期		36 30
241	南斜面 中央 Ⅰ層	石鏝	2.8	1.8	0.5	1.9 珩岩 北上山地 中生代前期		36 30
242	北斜面 東側	石鏝	2.2	1.9	0.3	0.9 珩岩 北上山地 中生代前期		36 30
243	北斜面 Ⅰ層	石鏝	3.4	1.7	0.3	1.8 珩岩 北上山地 中生代前期		36 30
244	T4 表土→Ⅰ層	石鏝	2.3	1.4	0.3	1.0 珩岩 北上山地 中生代前期		37 30
245	北斜面 西側 表土	石鏝	3.5	1.7	0.6	3.2 珩岩 北上山地 中生代前期		37 30
246	北斜面 南東側 Ⅰ→Ⅱ層	石鏝	4.3	1.7	1.0	3.4 珩岩 北上山地 中生代前期		37 30
247	北斜面 東側 表土→Ⅱ層	石斧	6.2	1.5	0.6	4.9 珩岩 北上山地 中生代前期		37 30
248	北斜面 Ⅰ層	磨製石斧	5.9	3.3	1.3	21.4 珩岩 北上山地 中生代前期		37 30
249	北斜面 Ⅰ層	石鏝	(5.0)	2.6	0.8	9.6 珩岩 北上山地 中生代前期	つゝみ部欠損	37 30
250	北斜面 西側 Ⅰ層	石鏝	(3.5)	(5.3)	1.3	16.5 珩岩 北上山地 中生代前期	磨製欠損	37 30
251	西側 調査区 表土→Ⅱ層	磨製石部	3.6	4.8	1.2	18.7 珩岩 北上山地 中生代前期	上下層間に腐敗	37 30
252	北斜面 南東側 Ⅰ→Ⅱ層	スタレイバー	5.7	2.1	0.8	7.6 珩岩 北上山地 中生代前期		37 30
253	南斜面 西側 表土→Ⅱ層	スタレイバー	(4.1)	4.1	1.4	30.0 珩岩 北上山地 中生代前期	下部欠損	37 30
254	南斜面 東側 Ⅰ層	湖石	7.9	8.6	2.3	207.6 砂岩 北上山地 中生代前期		37 31
255	北斜面	湖石	9.4	5.6	2.5	219.0 砂岩 北上山地 中生代前期	上下層腐蝕あり	37 31
256	北斜面 東側 Ⅰ層	磨製石斧	13.6	5.0	2.5	274.0 珩岩 北上山地 中生代白亜紀		37 31
257	南斜面 東側 Ⅰ層	磨製石斧	(8.8)	4.8	2.7	161.8 石黒曜岩 北上山地 中生代白亜紀	下部欠損	37 31
258	北斜面 Ⅰ層	磨製石斧	(5.6)	(4.6)	2.7	99.9 凝灰岩 北上山地 中生代	下部欠損	37 31
259	南斜面 西側 表土→Ⅰ層	磨製石斧	(5.5)	(4.2)	2.5	89.1 凝灰岩 北上山地 中生代	下部欠損	38 31
260	北斜面 東側 Ⅰ層	磨製石斧	(3.0)	(2.9)	1.3	183.3 珩岩 北上山地 中生代前期	下部欠損	38 31
261	北斜面 Ⅰ層	湖石(特)	9.2	4.6	2.7	171.8 砂岩 北上山地 中生代前期	片側面破損	38 31
262	北斜面 東側 Ⅰ層	湖石(特)	6.4	4.3	2.2	92.2 砂岩 北上山地 中生代前期	片側面破損	38 31
263	北斜面 東側 Ⅰ層	湖石	9.3	6.7	7.1	666.2 砂岩 北上山地 中生代前期		38 31
264	北斜面 東側 Ⅰ層	特殊磨石	12.2	6.9	6.2	781.2 砂岩 北上山地 中生代前期		38 31
265	南斜面	石鏝類	(7.4)	(7.5)	3.1	138.0 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀		38 31
266	北斜面 西側 Ⅰ層	石鏝類	13.5	7.2	3.6	338.9 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀		38 31
267	北斜面 中央 Ⅰ層	湖石	(12.4)	11.7	6.2	969.3 砂岩 百舌磨群 中生代白亜紀	筋状の使用痕多数	38 31
268	北斜面 Ⅰ層	有孔石製品	5.3	3.2	0.9	6.1 貝貝岩 北上山地 中生代前期		38 31
269	南斜面 中央 Ⅰ層	有孔石製品	5.6	2.4	1.2	20.0 湖石 北上山地 早池山山塊? 古生代オムドビス紀		38 31

5 自然科学分析

鳥越遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1. 測定対象試料

鳥越遺跡は、岩手県下閉伊郡田野畑村鳥越302-2に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡、土坑から出土した炭化物の合計3点である(表1)。

2. 測定の意義

遺跡内における竪穴住居跡、土坑の時期を特定する。

3. 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入

る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6. 測定結果

測定結果を表1・2に示す。

試料の ^{14}C 年代は、No.1が $4800 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.2が $3860 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.3が $4200 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は、古い方から順にNo.3が縄文時代中期中葉頃、No.1が中期中葉から後葉頃、No.2が後期初頭から前葉頃に相当する。(小林編2008)。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器。総覧縄文土器刊行委員会。アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves. 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

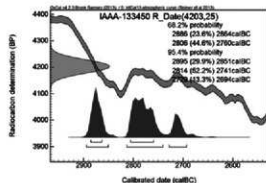
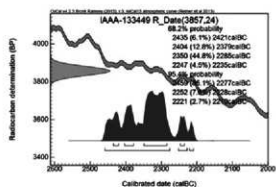
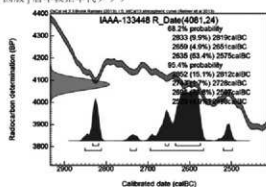
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-133448	No.1	SI03 炉A 埋土下位	炭化物	AAA	-23.70 \pm 0.37	4080 \pm 20	60.16 \pm 0.18
IAAA-133449	No.2	SI05 炭化物層	炭化物	AAA	-25.58 \pm 0.39	3,860 \pm 20	61.87 \pm 0.19
IAAA-133450	No.3	SK07	炭化物	AAA	-26.92 \pm 0.36	4,200 \pm 30	59.26 \pm 0.19

表2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-133448	4,060 \pm 20	60.32 \pm 0.18	4,081 \pm 24	2833calBC - 2819calBC (9.9%) 2659calBC - 2651calBC (4.9%) 2635calBC - 2575calBC (63.4%)	2852calBC - 2812calBC (15.1%) 2743calBC - 2728calBC (1.7%) 2695calBC - 2567calBC (73.8%) 2520calBC - 2498calBC (4.9%)
IAAA-133449	3,870 \pm 20	61.80 \pm 0.18	3,857 \pm 24	2435calBC - 2421calBC (6.1%) 2404calBC - 2379calBC (12.8%) 2350calBC - 2285calBC (44.8%) 2247calBC - 2235calBC (4.5%)	2459calBC - 2277calBC (85.1%) 2252calBC - 2228calBC (7.6%) 2221calBC - 2210calBC (2.7%)
IAAA-133450	4,240 \pm 30	59.02 \pm 0.18	4,203 \pm 25	2886calBC - 2864calBC (23.6%) 2806calBC - 2760calBC (44.6%)	2895calBC - 2851calBC (29.9%) 2814calBC - 2741calBC (52.2%) 2729calBC - 2694calBC (13.3%)

[参考値]

[図版] 暦年較正年代グラフ



6 総 括

今回の調査は、三陸沿岸道路建設に伴い1,400㎡の調査を実施した。検出した遺構は、竪穴住居跡6棟、土坑7基、焼土遺構2基である。出土した遺物は、土器中コンテナ8箱、石器・石製品6箱、土製品5点である。ここでは、総括として本遺跡の特徴とある程度の遺構の時期変遷について触れた。

調査範囲が1,400㎡と狭小なこともあり、本遺跡の全容把握とまではいかないが、遺構の構築場所にはある程度の傾向が見られる。今回の調査区は尾根頂部とこれを中心に両側を下る斜面地が対象であるが、遺構は尾根頂部の平坦面と南側斜面へと繋がる肩口部分でのみ検出されている。斜度としても、南斜面の方が北斜面よりも緩く、北斜面では遺構は確認されていないことから、高位置の南向きの緩斜面部を好んだことが推察される。

遺構の帰属時期は、遺構内外ともに大木8b～10式に比定される遺物が大半を占めることから、縄文時代中期中葉～後葉と推測される。各竪穴住居跡については、床面出土の遺物や炉の形態から推察すると、S I 01は中期中葉～後葉(大木8b～9式期)、S I 02は中期後葉(大木10式期)、S I 03は中期後葉(大木9～10式期)、S I 04は中期後葉(大木10式期)、S I 05は後期前葉(※出土遺物からは不明。¹⁴C年代測定結果から推定)、S I 06は中期後葉(大木9式期)となる。これに直接的な遺構の切り合いを含めると、S I 01・06→S I 03・04→S I 02→S I 05という変遷の可能性が考えられる。土坑については、S K 02・04からは出土遺物がなく不明だが、これらの他の土坑からは、概ね住居と同時期に比定される土器が出土している。S K 05は埋土中から大木8b～10式の土器が出土しているが、大木10式に比定される土器は他の土坑からは確認されていない。形態的にはS K 05を除いた6基は同形状をしており、底部の一部または大半が中位より広がるフラスコ状を呈する。以上の点から、S K 05は他の土坑と時期や性質が異なる可能性が高い。また、配置的にもS K 01・02・03・06はほぼ同一等高線上に並ぶことから、同時期に計画的に構築された可能性が窺える。S I 03との重複関係から、S I 02期を想定したい。

竪穴住居跡は6棟検出されているが、6棟中5棟において石囲炉が確認されている(唯一炉が確認できなかったS I 06については、中央部がS K 06との重複により損壊しているため、炉の有無自体が言及できない)。炉の位置は、S I 04のみ住居のほぼ中央に、これ以外は中央からやや外れた位置に構築されており、S I 01・05は南寄り、S I 02・03は南東寄りにある。方位的に規則性はあまり感じられないが、いずれも斜面の下方側にある傾向が観取できる。石囲炉の形態は、S I 01・02・05が単式、S I 03・04が複式炉である。S I 01・02は石囲部はひとつであるが、周囲に地床炉を有している。S I 02は距離が離れているため付属施設とは言い難いが、S I 01は近接していることから、複式炉となる可能性も示唆される。S I 03・04は主体となる方形の石囲部の一辺に、さらに小方形の石囲部が取り付く形態を成す。S I 03は主体の石囲部内に石列を敷くことで間仕切りをし、2室に分離している。形態的には両者の大きな概観は共通するが、焼成痕跡には違いが認められる。S I 03は主体の石囲部内2室とも焼土が形成されているが、小石囲部に焼成痕跡は見られない。一方、S I 04は大小石囲部内に焼成痕が認められる。S I 03の小石囲部は燃焼施設以外の機能であった可能性が考えられる。また、炉に前庭部が認められたのはS I 03のみで、壁に接する位置にある。底面の中央は非常に硬化しており、位置的状況からも住居の出入口であった可能性が推察される。S I 03については、規模が径8mを越す大径をとることや、複雑な構造の複式炉をもつことから、遺跡内でも特殊な位置に

ある住居であったのかもしれない。

本遺跡は縄文時代中期中葉～後葉に営まれた集落跡である。地形的にも東方へ尾根が延びることからも、遺構は今回調査地点から東に広がる可能性が高い。また、同事業で南方の小沢を挟んだ約1kmの地点にある浜岩泉Ⅲ遺跡の調査を行った(平成27年度報告書刊行予定)。この遺跡においても、ほぼ同時期の遺構・遺物が確認されていることから、本遺跡との関連性は非常に高いものと推察される。これらの結果と合わせ、今回の調査が該期の田野畑村をはじめとする地域の歴史解明の一助となり得ることを切に願いたい。最後に、東日本大震災に際し、大きな苦難があったにも関わらず、本遺跡の調査に携わっていただいた地域の皆さまに感謝の意を表する。

参考・引用文献

- 早稲田大学文学部考古学研究室 1992『館石野Ⅰ遺跡—縄文時代列石遺構の調査—』
 早稲田大学文学部考古学研究室 1994『館石野Ⅰ遺跡第8次発掘調査概報』
 早稲田大学文学部考古学研究室・田野畑村 1997『館石野Ⅰ遺跡発掘調査報告書—縄文時代列石遺構の調査—』
 田野畑村教育委員会 1990『南大芦Ⅲ・Ⅳ遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第1集
 田野畑村教育委員会 1994『子木地の台遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第2集
 田野畑村教育委員会 1998『切牛Ⅱ遺跡・真木沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第3集
 田野畑村教育委員会 2000『大芦赤空洞遺跡』田野畑村文化財調査報告書第5集
 田野畑村教育委員会 2001『田野畑村内遺跡群詳細分布調査報告書Ⅰ』田野畑村文化財調査報告書第6集
 田野畑村教育委員会 2001『館石野Ⅰ遺跡 縄文時代後期の列石遺構の調査』田野畑村文化財調査報告書第7集
 田野畑村教育委員会 2002『田野畑村内遺跡群詳細分布調査報告書Ⅱ』田野畑村文化財調査報告書第8集
 田野畑村教育委員会 2002『館石野Ⅰ遺跡 縄文時代後期の列石遺構の調査』田野畑村文化財調査報告書第9集
 田野畑村教育委員会 2007『館石野Ⅰ遺跡第9次～14次調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第14集
 田野畑村教育委員会 2008『和野Ⅰ遺跡第3次調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第15集
 田野畑村教育委員会 2008『和野Ⅰ遺跡第4次調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第16集
 田野畑村教育委員会 2013『机遺跡発掘調査報告書』田野畑村文化財調査報告書第19集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998『浜岩泉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第276集(以下岩文振○○集と略)
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩文振第452集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書』岩文振第466集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『沼袋遺跡発掘調査報告書』岩文振第483集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2007『千足南遺跡発掘調査報告書』岩文振第496集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2012『尾肝要Ⅰ遺跡、姫松Ⅰ・Ⅱ発掘調査報告書』岩文振第592集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成13年度)』岩文振第397集
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成15年度)』岩文振第455集

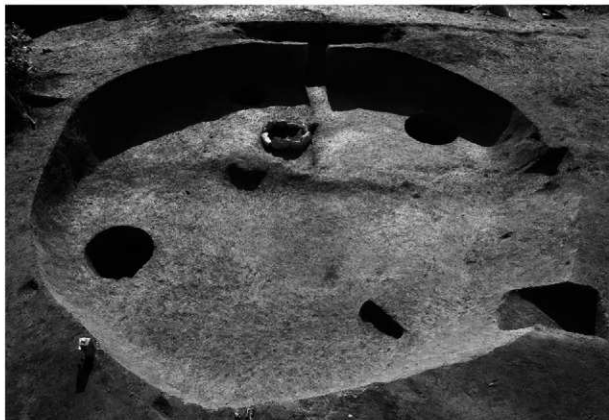
写 真 图 版
(島越XIV遺跡)



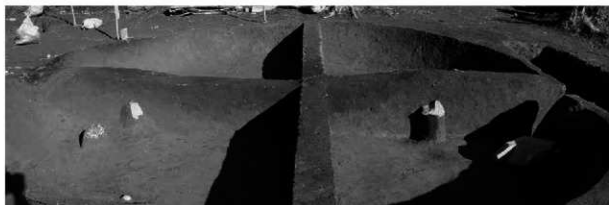
調査区 遠景 (SW→)



調査区 全景 (直上→)



S101 実掘(N→)



S101 埋土(W→)



S101 埋土(S→)

写真図版9 S101竪穴住居跡(1)



S 101 炉 完掘(N→)



S 101 P1 埋土(E→)



S 101 P2 埋土(E→)



S 101 P3 埋土(W→)



S 102 完掘(S→)



S 102 埋土(W→)



S 102 炉 完掘(S→)



S 102 K1 完掘(S→)



S 102 炉 埋土(S→)



S 102 K1 埋土(S→)



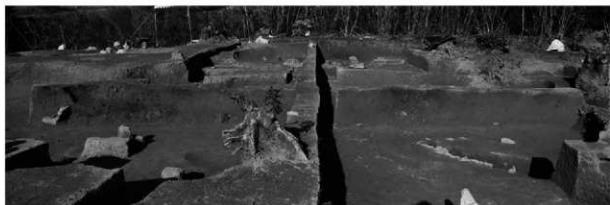
S 102 炉 断ち割り(S→)



S 102 遺物出土(S→)



S 1 03 完掘 (S E →)



S 1 03 埋土 (S W →)



S 1 03 埋土 (S E →)



S103 炉 実掘(SE→)



S103 炉 埋土(W→)



S103 炉 断ち割り(E→)



S103 旧炉 横出(SW→)



S103 P1 埋土(W→)

写真図版13 S103竪穴住居跡(2)



S104 完掘(S→)



S104 埋土(SW→)



S104 炉 完掘(S→)



S104 炉 埋土(E→)

写真図版14 S104竪穴住居跡(1)



S 104 K 1 完掘(NE→)



S 104 K 2 完掘(N→)



S 105 完掘(SW→)



S 105 埋土(SE→)

写真図版15 S 104豎穴住居跡(2)、S 105豎穴住居跡(1)



S 105 炉 完掘(N→)



S 105 炉 埋土(W→)



S 106 完掘(SW→)



S 106 埋土(E→)



S K01 完掘(N→)



S K02 完掘(E→)



S K01 埋土(N→)



S K02 埋土(E→)



S K03 完掘(N→)



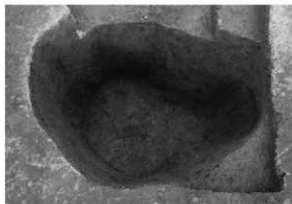
S K04 完掘(E→)



S K03 埋土(N→)



S K04 埋土(S→)



S K05 完掘(SW→)



S K06 完掘(E→)



S K05 埋土(W→)



S K06 埋土(S→)



S K07 完掘(SE→)



S N01 掘出(S→)



S K07 埋土(SE→)



S N01 断面割り(W→)



S N02 検出(S→)



S N02 断ち割り(S→)



北側斜面 遺物包含層トレンチ 断面(E→)

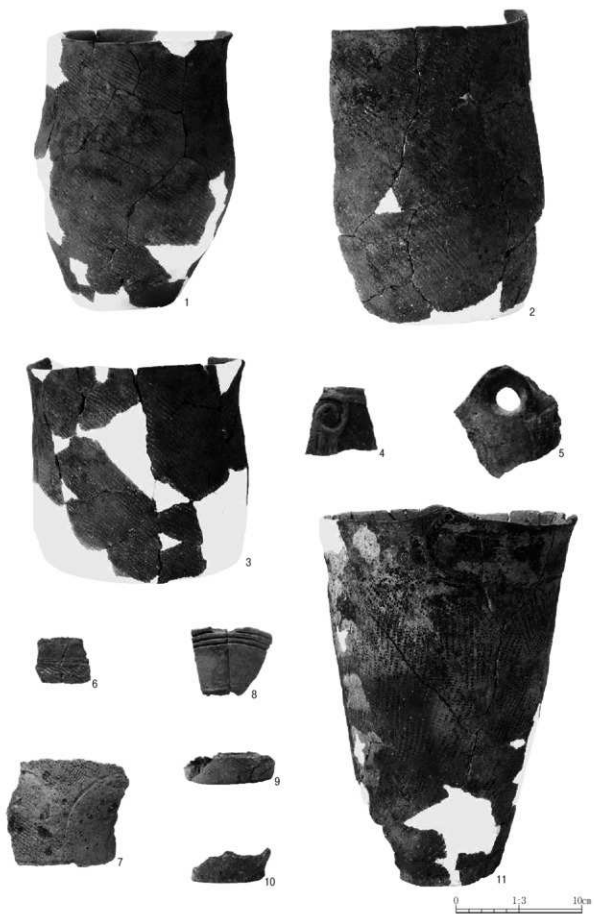


調査前風景

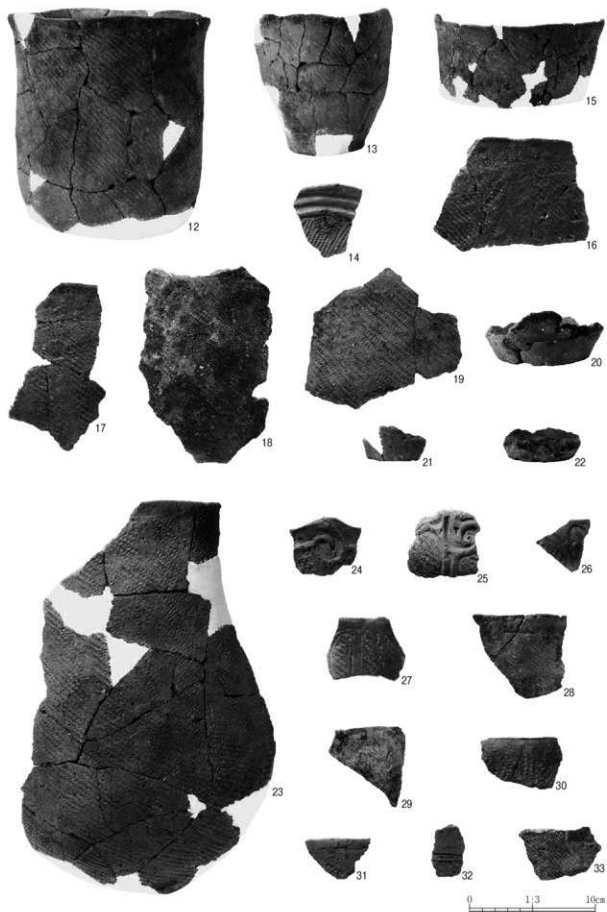


作業風景

写真図版19 S N02焼土遺構、遺物包含層、調査前・作業風景



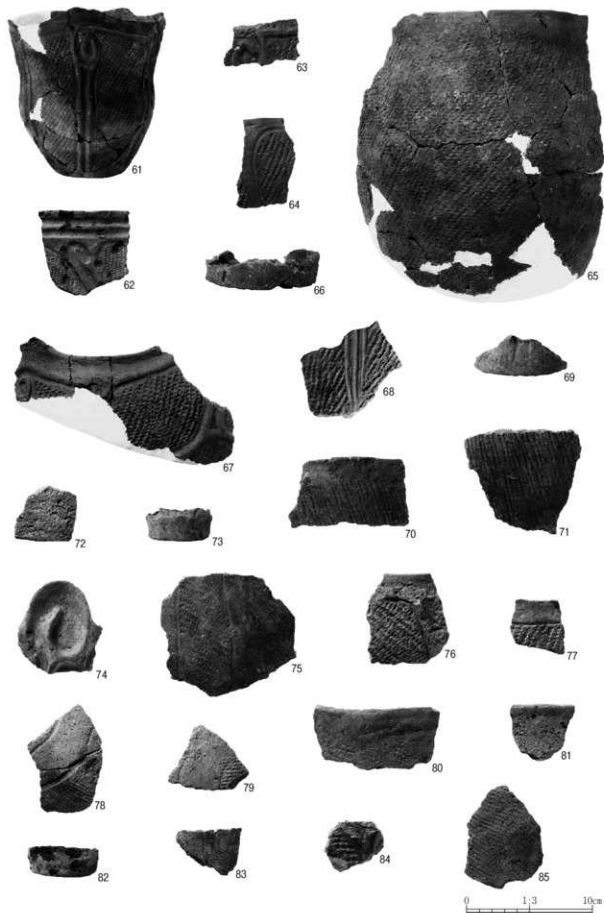
写真図版20 土器1(S101・02①)



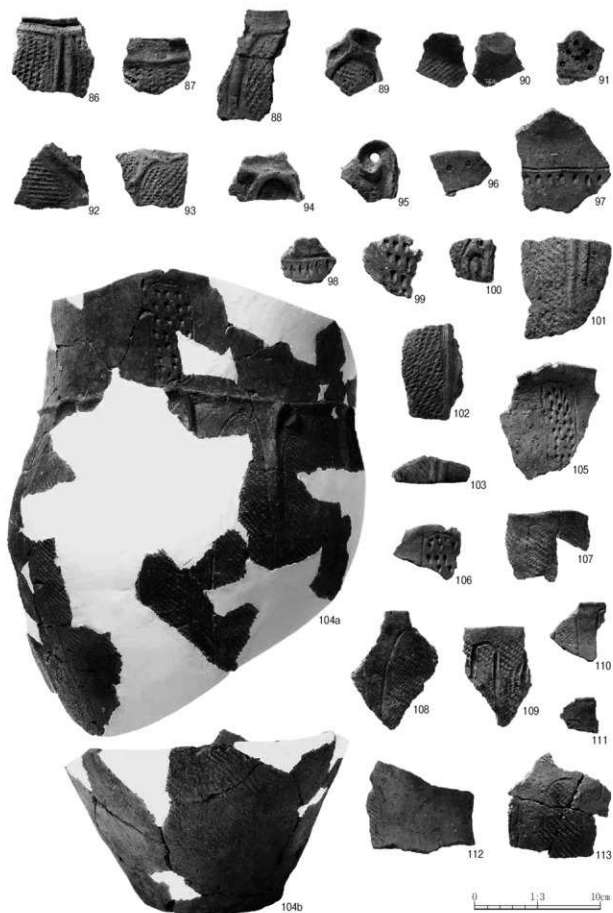
写真図版21 土器2(S102②・03)



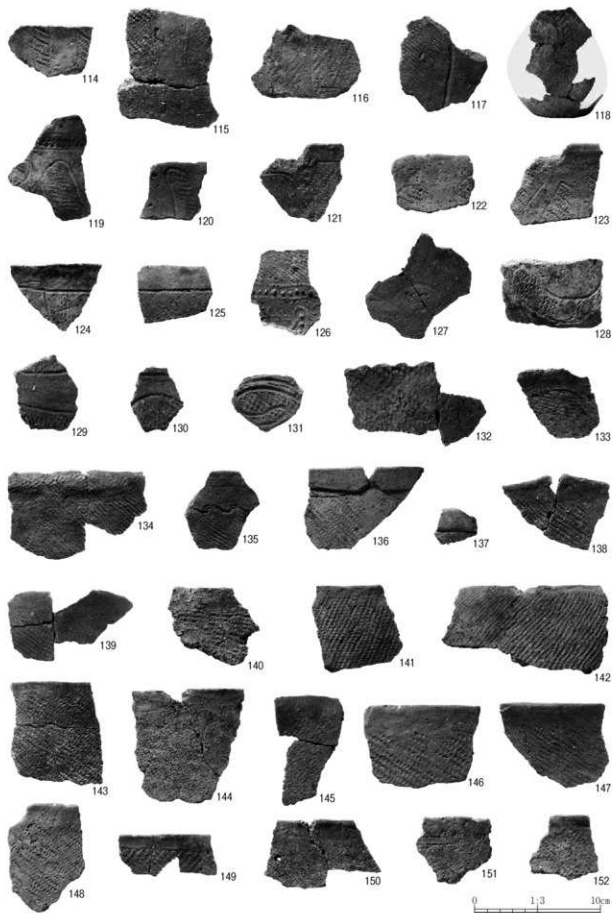
写真図版22 土器3(S104)



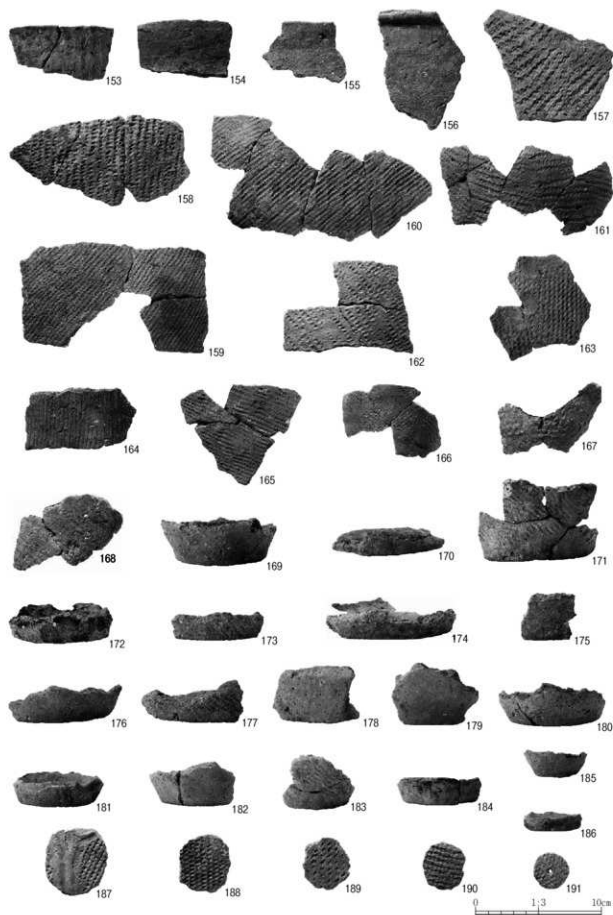
写真図版23 土器4 (S I 06、S K 01・03・05・06・07)



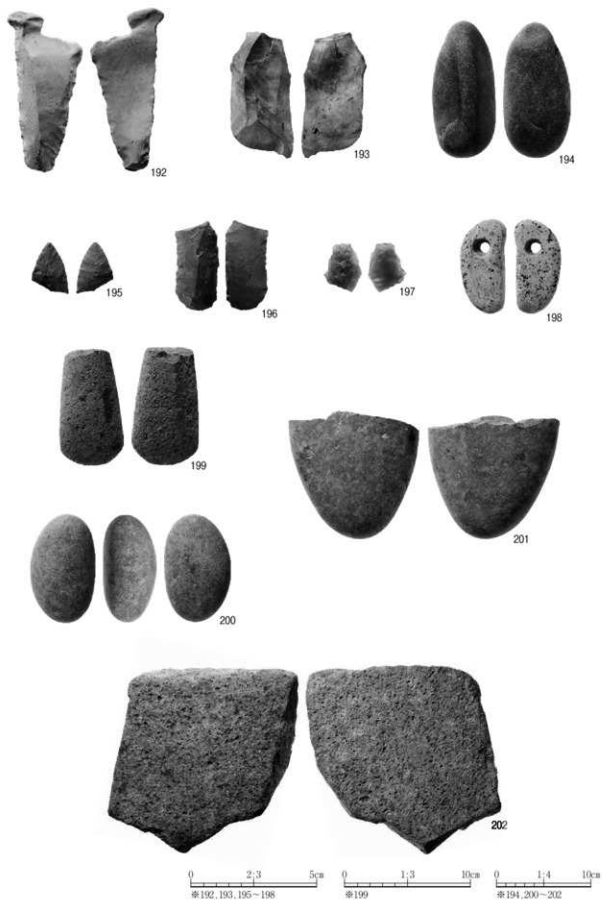
写真図版24 土器 5 (遺構外①)



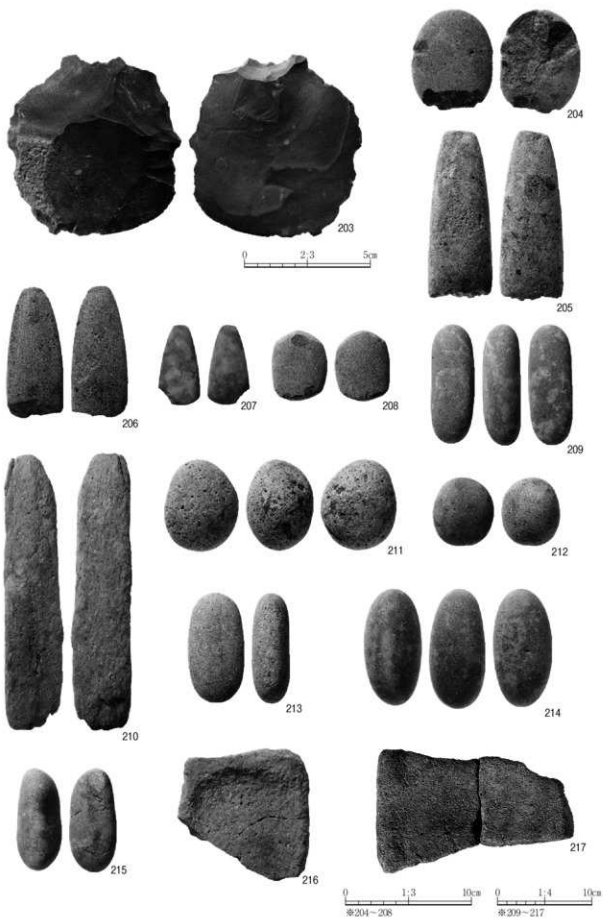
写真図版25 土器6 (遺構外②)



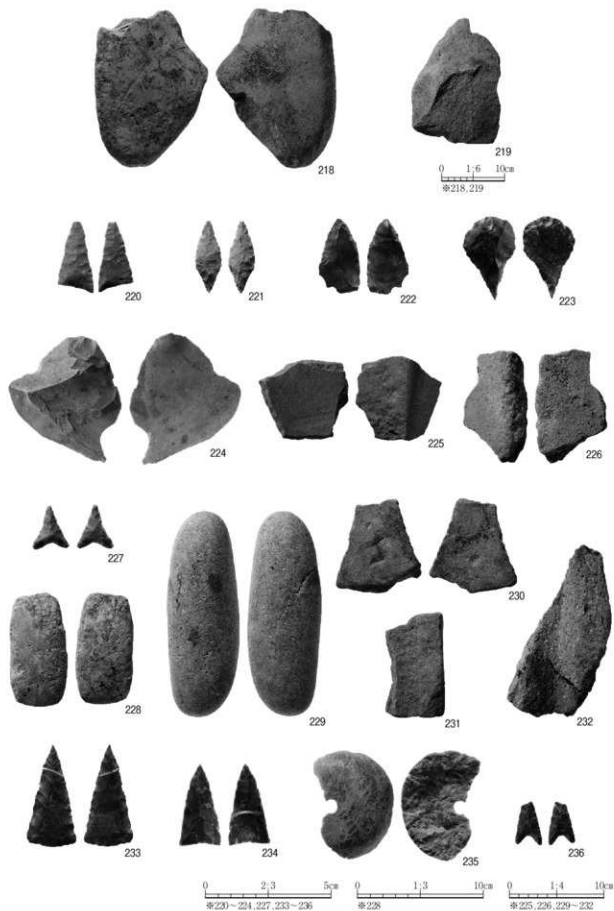
写真図版26 土器7(遺構外③)・土製品



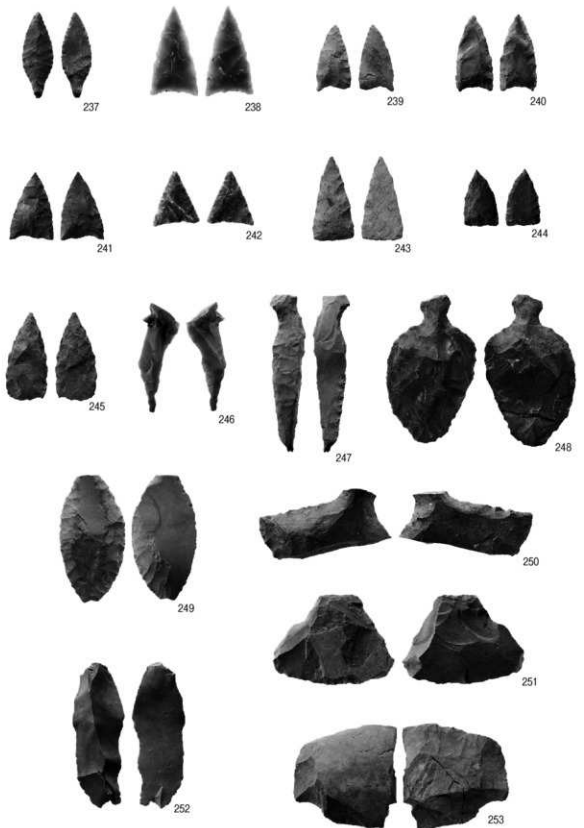
写真図版27 石器・石製品1 (S101・02)



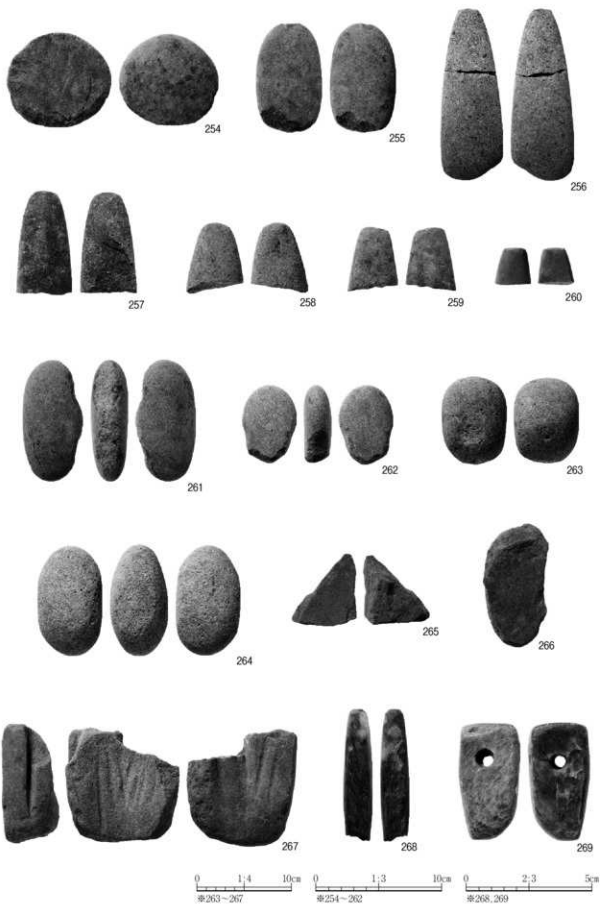
写真図版28 石器・石製品2 (S I 03①)



写真図版29 石器・石製品3 (S I 03②・04・05・06, SK 06)



写真図版30 石器・石製品4 (遺構外①)



写真図版31 石器・石製品5 (遺構外②)

VI 菅窪遺跡

1 調査概要

菅窪遺跡は、下閉伊郡田野畑村菅窪に所在し、田野畑村役場から南へ約1.0km、三陸鉄道北リアス線田野畑駅から南西へ約3.5km、北東へ約0.2kmには旧岩泉高校田野畑分校(2012年に岩泉高校に統合・閉校)が位置する。北緯39度55分7秒、東経141度53分52秒にあり、国土地理院発行の地形図1/50,000「岩泉」の図幅に含まれる。遺跡の周知範囲は東西約530m、南北250～300mに広がり、田野畑村史には縄文時代後・晩期の遺跡として紹介されている(田野畑村史編纂委員会：1985)。

調査区は台形状の形の範囲で、調査対象面積1,600㎡を実施した。地形は崖錐性扇状地に区分され、調査地の標高は249～251m、調査前の現況は果樹園である。

遺跡周辺には縄文時代後・晩期や弥生時代の遺跡が顕著に分布しており、本遺跡近隣周辺には過去に発掘調査が実施された和野ソマナイ遺跡、和野新壘神社、和野Ⅰ遺跡のほか平成24・25年度に発掘調査された野場Ⅰ遺跡がある。

2 基本層序

概ね下記のような土層の堆積順と判断された(基本層序を設定した)。

Ⅰ層…表土(現代土)など 層厚20～60cm

Ⅱ層…黒褐色シルト 層厚0～10cm 縄文晩期以降に形成された地層と捉えられる。

Ⅲ層…暗褐色砂質シルト 層厚0～30cm 縄文土器(縄文後期主体に晩期)含む。

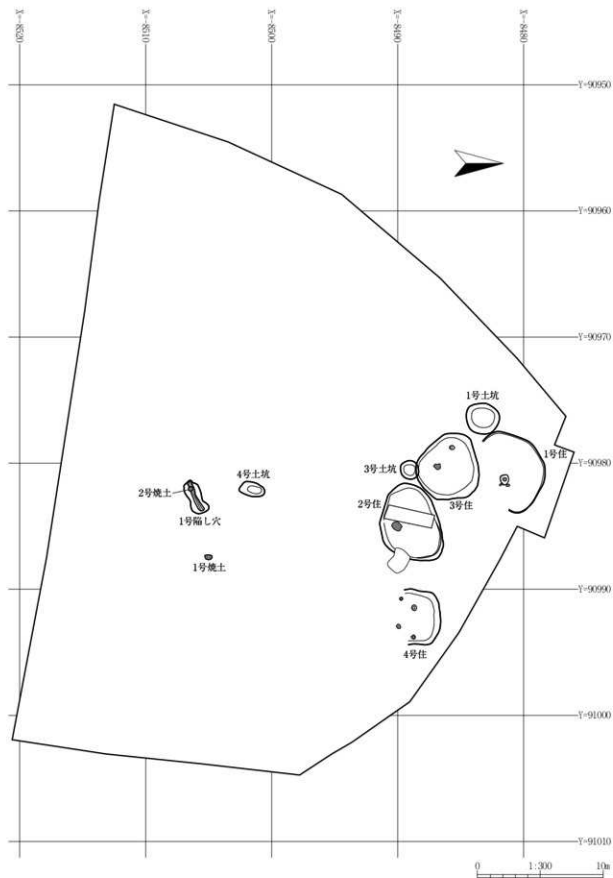
Ⅳ層…褐色砂質粘土質土 層厚0～40cm 地山土に類似する。局所的に縄文土器片(縄文前期主体)、炭化物、十和田中振テフラを含む。

Ⅴ層…黄褐色砂質粘土 地山(基盤層、無遺物層) 本層上位ほど砂質が強く、下位は亜角礫を含む。

本調査区の地形は、北西から南東に向かい傾斜する丘陵地及び丘陵裾の微平坦地にある。調査区北部～中央部にかけては斜面地、中央部はほぼ平坦地、中央部から南部にかけては緩斜面地の地形を呈する。調査区北部や南部は人工改変により削平を受けている地点が顕著で、表土を剥すと直下に地山が露出する部分もある。地層の全体的な傾向としては、Ⅱ層・Ⅲ層は薄く、広がりも局所的で、主に調査区北部と中央部の中間にある斜面地部分などに認められる。Ⅳ層は全体的に比較的厚く、そして広い範囲に堆積・分布がみられる。このⅣ層中には十和田中振テフラ(以後 To-Cuと呼ぶ)の混入が認められるが、To-Cuの分布としては調査区全体的に認められるわけではなく、調査区中央部に顕著に見られた。斜面地にある調査区北部と中央部の中間地点付近では、Ⅳ層の地層自体はほぼ全面に広がるものの、To-Cuは認められない。また、調査区南部の南東側のやや低い面ではⅣ層自体が局所的で(※既に削平されている)、To-Cuは検出されない。To-Cuの産状としては、層を成して堆積するのではなく、黄褐色粉末状の小ブロック状がⅣ層中に混入する様相で認められた。Ⅴ層は無遺物層で、今回調査における地山と捉えた。Ⅴ層上位は黄褐色の砂質粘土で、下位に向かい礫の混入が顕著にあり、地点によっては拳大～人頭大の亜角礫も認められる。



第39圖 調査範圍圖



第40图 遺構配置図

3 検出遺構

普窟遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡4棟、土坑3基、陥し穴1基、焼土遺構2基である。遺構の時期は全て縄文時代(※本節では以後「時代」を省略して表記する)である。

(1) 竪穴住居跡

1号住(第41図、写真図版34/遺物:第46・51図、写真図版40・43)

<位置・検出状況>調査区北端に位置する。検出状況は表土を除去した段階でおびたしい炭化物の散らばりが認められ、焼失した竪穴住居跡の存在が想定された。検出面は、旧地形が造成などに関係して削平を受けていることから、表土直下V層(地山)である。本遺構南側や南東側は、規模の大きな現代攪乱により破壊を受けている。

<平面形・規模>平面形は楕円形気味で北東-南西方向に長径を持つと推定される。規模は推定値で5.9×5.7mである。深さは、北壁で20cm、東壁8cm、西壁22cmである。斜面下方側に相当する南壁は攪乱及び削平により破壊され残存していない。

<壁・床面>壁は東-北-西壁を検出した。床面は、竪穴中央部より北側を中心に4.4×1.8m程の範囲に土器片が敷かれ、併せて粘土が貼られている。土器片敷き以外の部分である竪穴中央-南側床面はV層(地山)である。全体的にはほぼ平坦である。床面直上付近からはおびたしい量の炭化物や焼土ブロックが出土した。焼失家屋と推定される。

<堆積土>1層と命名した暗褐色シルトを主体とする。自然堆積と判断される。

<炉>地床炉を検出した。炉底を土坑状に掘り窪め、焼土が発達している。

<柱穴>未検出である。

<遺物>出土遺物は土器類619g、石器類は磨石3点、台石1点、Uフレ1点、チップ・フレーク4.2gが出土した。出土土器は地文のみの小破片や床面の土器片敷きに伴う土器片が多い。床面に敷かれていた土器片は、二次焼成を受けており、非常に脆く、採拓などは断念し不掲載とした(※補足として地文のみの破片が多かった)。土器はNa1・2を、石器はNo69・70を掲載した。

<時期>文様から時期の特定が可能なものを見る限り縄文後期初頭-前葉に比定される。C14年代は、床面直上の炭化材が 2510 ± 20 yrBPを示した。調査所見としては、得られた年代値は縄文晩期中頃-後半と判断されるが、本遺構からは縄文晩期の土器が出土していない。

<その他>炭化材の出土状況から焼失家屋と判断され、併せて焼土ブロックの在り方から土屋根であった可能性が窺える。また、炉より北側付近の床面には土器片が敷かれる範囲があることも特記事項である。なお、補足的内容となるが、野外調査時は本遺構南側に所在する3号住とは重複しないと捉えていた。しかし、調査終了際に撮影した空撮を見る限り、本遺構と3号住は重複する可能性が極めて高い。出土土器の観察からは、ほぼ同時期と判断される。また、野外時に撮影した両者の写真を見る限り、本遺構(1号住)が古い可能性が高い。何れ、遺漏した内容になり、明確な事実関係は不明である。

2号住(第42図、写真図版35/遺物:第46・51図、写真図版40・43)

<位置・検出状況>調査区中央部やや北側に位置する。調査当初に設定し掘削したトレンチ断面で認知した。検出面はⅢ層下位で、加えてⅣ層を掘り込んで構築されている。

<平面形・規模>平面形は楕円形で、西側がやや窄まる様相にある。規模は6.2×4.6mである。

<壁・床面>壁はⅣ～Ⅴ層中ではほぼ全周する。北壁28cm前後、東壁52cm前後、南壁24cm前後、西壁26cm前後である。床面はほぼ平坦である。

<堆積土>埋土上位は黒褐色シルトを主体とし、埋土中～下位に炭化物を一定量含むにぶい黄褐色砂質シルトが堆積する。壁際の一部に壁の崩壊土と捉えられる黄褐色砂質粘土(※地山土)がみられる。全て自然堆積である。

<炉>一端に炉石を配する地床炉を検出した。燃焼部と捉えられる炉内の焼土は、74×60cmの範囲で厚さ20cmほどの発達をみる。炉石は形が整っていない扁平気味の礫が用いられ、焼土を囲う配置にはない。なお、焼土の周囲からは、炉石の抜き取り痕などは認められなかった。元々燃焼部を囲う石囲炉ではない可能性が高い(※石添え炉的なものか)。

<柱穴>未検出である。

<遺物>出土遺物は、土器類4,030g、土製品2点(ミニチュア土器1点、円盤状土製品1点)、石器類は石鏃1点、石匙1点、削搔器1点、Uフレ1点、磨製石斧1点、磨石13点、敲石2点、石皿1点、台石1点、石棒?1点、チップ・フレーク144.9g出土した。出土土器は地文のみを施文するものが多く、文様を持つものは少ない。Na3～14の土器と、Na63・64の土製品、Na71～75の石器を掲載した。

<時期>出土土器から縄文後期初頭～前葉と推定しておく。

<その他>埋土下位を中心に一定量の炭化物を含む状況からは、焼失家屋の可能性が高い。

3号住(第43図、写真図版36/遺物:第47・51～53図、写真図版40・43・44)

<位置・検出状況>調査区北部で1号住の南側に位置する。検出状況は、Ⅳ層～Ⅴ層中で、褐色～暗褐色シルト質砂土による楕円形プランとして認知した。ただし、埋土と地山の識別が困難で、想定したプランに土層観察ベルトを設定し、サブトレンチを入れるなどして壁・床面を特定した。

<平面形・規模>平面形は楕円形基調である。規模は5.4×4.6mである。

<壁・床面>壁はⅣ～Ⅴ層中で、外傾し立ち上がる。深さは、北壁28cm、東壁20cm、南壁18cm、西壁22cmである。床面はほぼ平坦である。なお、人頭大くらいの自然礫(花崗岩)が複数個床面から出土した。

<堆積土>1層としたにぶい黄褐色シルトを主体とする自然堆積層である。4層とした大きな塊状の焼土ブロックが150×60cmの帯状で厚さ20～40cmで認められる。焼土ブロックからは、半完形気味の土器(Na16・17など)が出土している。

<炉>中央よりやや南壁際に寄った位置から地床炉を検出した。

<柱穴>1個検出した。検出状況は、床面では認められず、床面を掘り下げた段階で検出した。

<遺物>出土遺物は土器類4,439.5g、石器類は削搔器5点、Uフレ1点、コア1点、磨石37点、敲石1点、敲磨礫1点、石皿1点、礫器1点、台石4点、石刀?1点、円盤状土製品2点、10点、チップ・フレーク150.1gである。出土土器は全般に地文のみが多く、時期特定が困難なものが多い。Na15～22の土器、Na65の土製品、Na76～91の石器を掲載した。

<時期>出土土器から、縄文後期初頭～前葉と判断される。C14年代は、埋土下位の炭化物が3850±20yrBP、炉内出土の炭化材が3780±20yrBPである。

<その他>床面～埋土下位にかけて規模の大きな焼土ブロックが複数出土した。この状況からは、焼失家屋の可能性が高いものの、土器の出土状況を加味すると住居廃絶後に火を燃やす何らかの行為による可能性もあり明確ではない。調査判断としては、焼失家屋の可能性で考えておくこととする。

4号住(第44図、写真図版37/遺物:第48・54図、写真図版41・44)

<位置・検出状況>調査区北東部に位置する。検出状況はⅣ～Ⅴ層の掘削中に石囲炉を検出し、認知した。

<平面形・規模>斜面下方側になる竪穴中央～南側の壁が未検出なことから、平面形・規模ともに詳細は不明である。検出できた北壁～竪穴中央付近の様相から、平面形は隅丸方形、東西方向で4.4mを測る。竪穴の長軸は南～北方向と調査判断できる。

<壁・床面>壁は北壁を中心に東西壁の一部のみ検出した。Ⅳ～Ⅴ層中を掘り込んでいる。深さは、北壁66cm、西壁40cm、東壁10cmである。床面は、石囲炉の検出面から判断した。

<堆積土>埋土上位～中位は1層暗褐色シルトを、中位～下位は2層褐色シルトを中心とし、壁際に3層黄褐色砂質土が堆積する。全て自然堆積である。なお、北壁際の床面や上から横倒しの状態で一括土器が出土した。その後の整理作業において、少なくとも2個体以上の破片が混在していることが分かった。掘り方などを持つ埋設土器ではないことから、住居の廃絶間際に廃棄された土器と推定される。

<炉>石囲炉を検出した。規模は65×50cmである。炉石は花崗岩を若干整形したものが用いられているが、形が様々なことから、しっかりと加工を施し整えられた様子にはない。焼土は40cm弱の円形気味の範囲に厚さ10cm強で発達する。また、炉石の配置状況から推定するに、原位置からは動かされている様相にあり、あるいは破壊されている炉の可能性もある。

<柱穴>3個検出した。

<遺物>出土遺物は土器類5,101.4g、石器類は磨製石斧1点、磨石1点、台石1点、チップ・フレーク6.9gである。壁際から一括土器(Na25～27)が得られている。Na23～27の土器、No66の土製品(ミニチュア土器)、No92～94の石器を掲載した。

<時期>出土土器から縄文後期初頭～前葉と判断される。

(2) 土 坑**1号土坑**(第44図、写真図版38/遺物:第49図、写真図版41)

<位置・検出状況>調査区北部で3号住の西に位置する。検出面はⅢ～Ⅳ層である。規模からは、竪穴状遺構に類する。

<平面形・規模>平面形は円形である。規模は262×240cm、深さは40cmである。

<壁・底面>壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

<堆積土>暗褐色シルト質砂質土である。なお、1号土坑からは、To-Cuは未検出にある。

<遺物>土器3,893.2gが出土している。土坑の南側底面で横倒しの状態で一括出土したNa28は、地文に組縄縄文(いわゆるビッチリ縄文)を施文し、底部尖底を呈する。時期は前期前葉と推定される。

<時期>出土土器から縄文前期前葉に廃絶された土坑と判断される。

3号土坑(第44図、写真図版38/遺物:第49図、写真図版42)

<位置・検出状況>調査区北部で3号住の南側に位置する。検出面はⅣ層～Ⅴ層である。

<平面形・規模>確認できた平面形は楕円形である。規模は145×142cm、深さは36cmである。

<壁・底面>壁は外傾して立ち上がる。Ⅳ～Ⅴ層中である。底面はⅤ層中で平坦である。

<堆積土>埋土上位～中位に褐色シルト質砂質土が、下位に褐～黄褐色砂質粘土が堆積する。自然堆積である。

<遺物>土器185.2g、石器類は石皿1点(破片)、磨石1点(破片)が出土している。出土土器は縄文時代後期初頭～前葉である。石器は何れも破片なことから不掲載とした。

<時期>出土遺物から縄文後期初頭～前葉と判断される。

4号土坑(第44図、写真図版38/遺物：第49図、写真図版42)

<位置・検出状況>調査区中央部の平坦気味の地形部分に位置する。検出層位はV層である。人頭大の花崗岩礫が土坑埋土に載るように検出されたことから、当初は立石的な遺構と想定されたが、周囲の状況から自然に入った礫と調査判断した。

<平面形・規模>平面形は楕円形である。規模は200×110cm、深さは75cmである。

<壁・底面>壁は、西壁が直立気味に、東壁は外傾して立ち上がる。底面は中央がやや凹む丸底気味を呈する。

<堆積土>暗褐色シルトによる単層である。自然堆積である。

<遺物>土器56.3g、石器類は板状礫1点が出土している。

<時期>出土遺物から縄文後期前葉と推定される。

(3) 陥し穴

1号陥し穴(第45図、写真図版39)

<位置・検出状況>調査区南部に位置する。検出層位はV層である。本遺構上位に2号焼土が位置する。本遺構埋没後に2号焼土が形成されている。2号焼土の時期は、状況から本遺構とは異時期の遺構と推定される。

<平面形・規模>平面形は長楕円形である。上端が広く、中端～下端はスリムな形状を呈する。規模は274×115cm、深さは170cmである。

<壁・底面>壁は外傾若しくは直立して立ち上がる。底面は概ね平坦である。

<堆積土>暗褐色シルトが主体である。

<遺物>出土遺物はない。

<時期>堆積土から縄文時代に属するものと判断される。遺構の形態からは縄文中期前半頃の陥し穴と推定されるが、明確には断定できない。また、2号焼土遺構との重複関係から縄文後期や晩期より古い可能性が窺える。

(4) 焼土遺構

1号焼土(第45図、写真図版39)

<位置・検出状況>調査区南部に位置する。検出層位はIV～V層中で現地性である。

<平面形・規模>平面形は楕円形である。焼土の広がる範囲は60×35cm、層厚は10cmである。

<遺物>なし。

<時期>検出面から縄文前期前葉より新しい。詳細な時期は不明であるが、今回の調査で検出された竪穴住居跡と同時期である縄文後期前半の可能性もある。

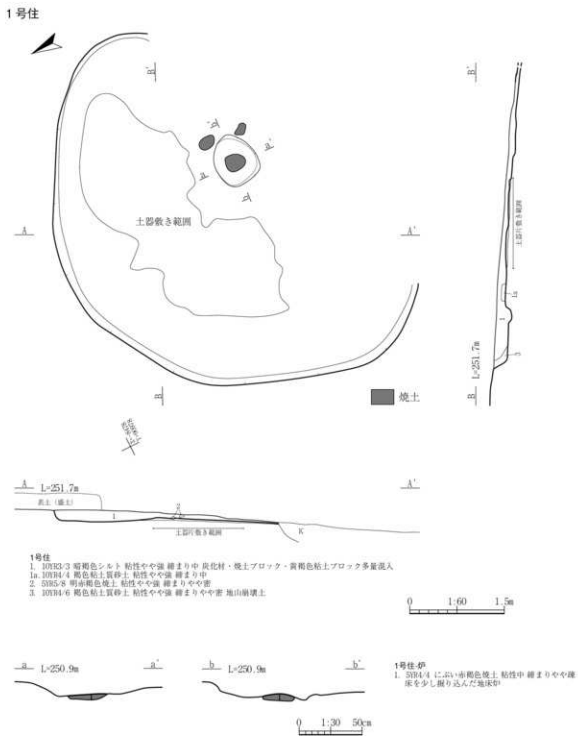
2号焼土(第45図、写真図版39)

<位置・検出状況>調査区南部に位置する。検出層位はIV層～V層上面で、現地性焼土である。本焼土下位から1号陥し穴を検出したが、異時期の重複と調査判断される。

<平面形・規模>平面形はほぼ円形である。規模は36×34cm、層厚は8cmである。

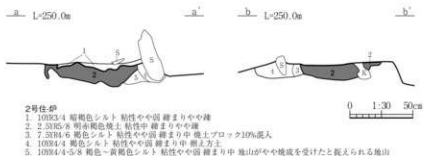
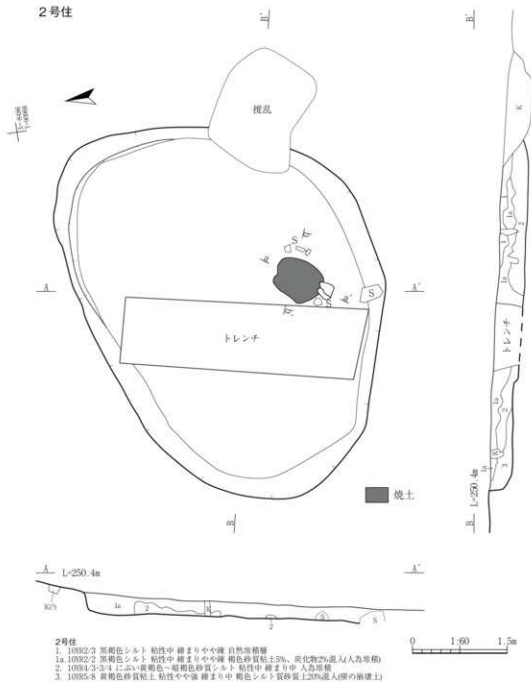
<遺物>なし。

<時期>検出面から縄文時代前期前葉より新しい。また、本遺構下部より検出された1号陥し穴より新しいことは断定できる。詳細な時期は不明であるが、今回の調査で検出された竪穴住居跡と同時期である縄文後期初頭～前葉の可能性で考えたい。

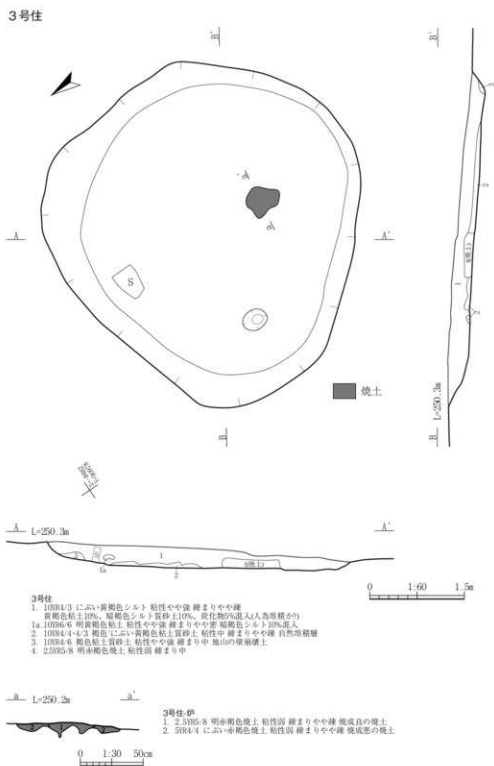


第41図 1号住

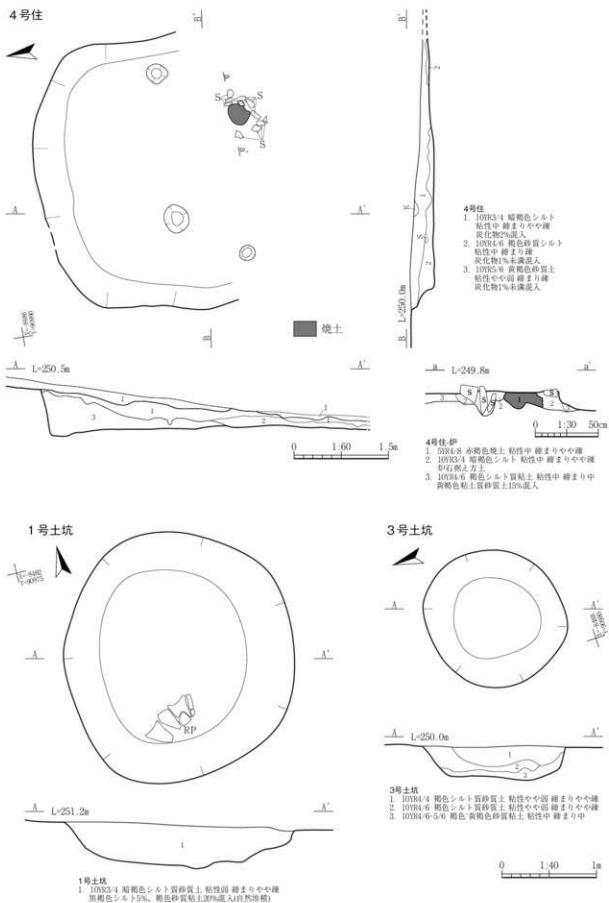
2号住



第42図 2号住

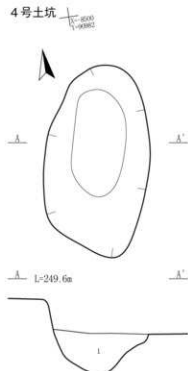


第43図 3号住



第44図 4号住、1・3号土坑

4号土坑



4号土坑

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まり中

1号陥し穴

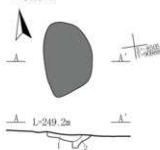


1号陥し穴

1. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まりやや硬
2. 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性中 締まり中
3. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘性中 締まり中
4. 10YR4/6 暗褐色シルト 質砂質土 粘性中 締まりやや硬
5. 10YR4/5 暗褐色シルト 粘性中 締まりやや硬

0 1:40 1m

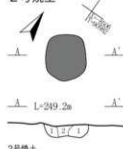
1号焼土



1号焼土

1. 5YR4/8 赤褐色焼土 粘性固 締まり硬 片層が壊滅を受けた焼土
2. 10YR4/6 褐色シルト質砂質土 粘性中 締まり硬

2号焼土



2号焼土

1. 5YR4/6 赤褐色焼土 粘性固 締まりやや硬
2. 10YR3/3 暗褐色シルト質砂質土 粘性やや硬 締まり硬

■ 焼土 0 1:30 50cm

第45図 4号土坑、1号陥し穴、1・2号焼土

4 出土遺物

遺物は大コンテナ(42×32×30cm)で約45箱分が出土した。内訳は、縄文土器大コンテナ約3箱、石器類大コンテナ約15箱分、土製品6点である。ここでは、遺構内出土と遺構外出土を合せて扱い記述する。

(1) 縄文土器

今回の調査では縄文土器が大コンテナ約3箱分(36,874.1g)出土した。時期は前期前葉、後期初頭～前葉、晩期後葉の3時期に大別される。傾向としては、竪穴住居跡出土が後期初頭～前葉、遺構外出土が前期前葉を主体とする。掲載基準は、①遺構内出土、②完形・略完形・大きめの破片、③層位の出土、④時期の特定が可能な文様や特徴を持つ資料、の順に優先して選択し62点を図化・掲載した。土器の分群は、前期前葉は楯館遺跡第Ⅱ群土器(青森県教育委員会第342集:2003)や中平遺跡第Ⅰ・Ⅱ群土器(野田村教育委員会第1集:2013)を、後期は本間宏氏の編年(本間:1987・1988)を参考とした。

I群 縄文前期前葉の土器

前期前葉に相当する土器をI群とした。全般的な特徴としては、胎土中に繊維の混入が認められることや、地文のみで特徴的な文様は看取できないことなどが挙げられる。器種は深鉢以外認知していない。出土地や層位について、遺構内出土は1号土坑のみで、主体はIV層出土で遺構外として取り上げたものである。IV層には局所的ではあるがTo-Cuが伴う。To-Cuの産状としては黄褐色粉末状で、小ブロック状に点在する。ただし、IV層より上部のⅢ層などにはTo-Cuが認められないことから、ある程度降下時期が反映されているものと捉えている。No.36・38・40・45はTo-Cuより下位から出土しており、この内容から本群土器はTo-Cu降下期より古いと判断される。施文される原体などの特徴でa～c類の3つに分類した。

I群a類:縄文原体の末端を早産状に折り曲げ、その側面を押圧した後に回転施文された、いわゆる「環状末端ループ」(※以後ループ文と呼ぶ)が特徴的に認められるものである(No.35～37)。I群土器中の占める割合は低い(今回の調査で認知したのは掲載した3点のみ)。No.35はLR・RL非結束羽状縄文で、LRのみ末端を押圧したループ文が施される。No.36・37は接合しなかったものの、施文される原体や土器胎土の様相から同一個体と捉えられる。この両者は30mほど離れた地点で出土している。ループ文が横方向と斜位方向に見られることから、縄文原体の施文時において文様を意識し意図的に横回転と斜位回転を併用していることが窺える。併せて重層して施文されている。これらの口縁端部～口唇部にかけての形状は角状を呈し、さらにNo.36・37は面取りされ平滑に仕上げられている特徴が看取される。本類土器は、ループ文や非結束羽状縄文を持つ属性から、大木1式若しくは同型式の並行期と考えられる。ただ、若干の留意点として、早稲田6類cにもループ文を重層する例があり、また表館式との類似性も示唆されることから、明確な土器型式での言及は難しい。

I群b類:組縄縄文(俗称ビッチリ縄文)を施文するもの(No.28・38～42)。1号土坑一括出土のNo.28以外は遺構外出土である。その内、No.38と40はTo-Cu下位の土層から出土している。完形に復元された28は、ほぼ全面に組縄縄文が施文される土器で、全体の形状は砲弾状を呈し、底部は尖底で先端が乳頭状に突る。口唇部の形状は平坦である。底部尖底の属性を持つこの土器を大木1式に比定させることは要検討事項と思われる。I群b類と現時点で最も類似性が高いのは、早稲田6類cと呼ばれる土器と考えられる。

I群c類：その他の地文(Na29・34・43~45)。施文される原体の種類は様々にあるものの、共通点として以下の2点を述べておきたい。一つは縄文原体の0段の段階(撚り始め)が左撚りの原体が用いられている。二つは全て横回転による斜行縄文である。本類土器は、土器型式に比定させる特徴が弱く、強く言及が難しいものの、大木1式若しくは同型式の並行期と捉えておきたい。

II群 縄文時代後期の土器

縄文後期の土器をII群とした。今回の調査では後期初頭～前葉並窪式を中心に、上村式に相当する土器が出土している。出土地点は、堅穴住居跡からの出土が圧倒的に多い。以下には施文要素の違いなどでa～e類の4つに分類した。

II群a類：隆線を伴うもの(Na5・7～9・18・19・23・46・47)。粘土紐貼付による隆線を伴うものを本類としたが、貼付られる隆線の太さや隆線の断面形、刺突文の有無など、多様である。深鉢が主体で、Na5の1点壺が認められる。Na5・8・9・19・23・46・47は、隆線上に刺突文が連続施文される属性自体には共通性が窺える。刺突文の痕跡の形自体に着目すれば、円形の刺突(隆線に対して真上気味から竹管などを刺したと考えられる)や楕円形気味の刺突(工具を斜め気味に刺すか若しくは刺してからやや持ち上げるような手法と推定される)などのバリエーションが看取される。本類は並窪式を中心とする土器に比定される。

II群b類：沈線による文様が描かれるもの(Na1～4・13・14・21・22・26・27・30・32・48～54)。横位の並行沈線が引かれるものや、弧状や幾何学文様がモチーフされるものなどがある。また、縄文施文後に沈線が引かれ、磨消縄文が施されるもの、沈線施文後にボタン状の貼付が施されるものなど、バラエティーに富む。本類は並窪式を中心とするが、一部磨消縄文による磨消帯の幅が広いNa27・54の土器などは上村式に比定されるものと推定される。

II群c類：縄文原体による側面圧痕(Na55)。Na55の1点のみの出土である。口縁部に無文を持ち、横位に原体の側面圧痕、胴部に地文が施される。

II群d類：地文のみ(Na6・10・11・16・17・24・25・31・33・56～60)。LR、RL、付加条、単軸絡条体第1類などが認められる。原体の回転方向が把握できるものは、縦回転がほとんどである。

II群e類：無文(Na15・20)。Na15は赤彩壺である。

III群 縄文晩期の土器

縄文晩期の土器をIII群とした。晩期は、後葉大洞A式に相当する土器が数点出土している(Na12・61・62)。認知できるものは全て掲載した。

(2)土製品

ミニチュア土器3点と円盤状土製品3点が出土した。遺構内出土が中心にある。時期は全て後期初頭と推定される。

(3)石器類

石器類は総数で123点出土した。内訳は、剥片石器16点、礫石器102点、石製品5点、チップ・フレック4429gである。出土状況・出土地点の傾向としては、剥片石器の割合が極端に低く(全体の約14%)、また出土地点は圧倒的に堅穴住居跡からが多い(全体の約75%を占める)。主な石器を図化・掲載した。

剥片石器

剥片石器は、石鎌1点、石匙1点、削搔器7点、コア3点、Uフレ3点が出土した。その内、5点

(No71・72・76~78)を図化・掲載した。石材は全て頁岩製で、産地は北上山地田野畑周辺、時代は中生代前期の鑑定結果得られた。

No71の石鎌は、基部が平基で全体の形状が正三角形を呈する。削搔器としたNo72・76・77は不定形な形状の剥片に二次剥離により刃部が作出されているものである。No78は刃の一端に使用痕と判断した微細剥離が認められる。

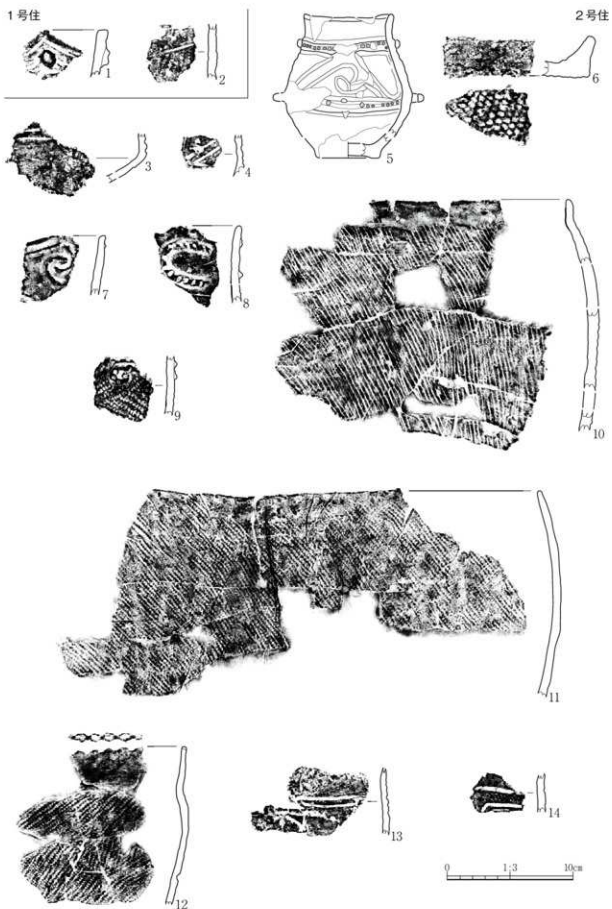
礫石器

礫石器は、磨製石斧5点、磨石75点、敲石5点、磨敲石2点、砥石2点、石皿4点、台石8点、板状礫1点、礫器1点が出土した。その内、25点(No69・70・73~75・79~89・92~100)を図化・掲載した。石材鑑定を委託した59点中、砂岩37点、花崗岩(6点)、閃緑岩(3点)、チャート(3点)、頁岩(3点)、蛇紋岩(2点)、軽石(2点)、斑岩(1点)、花崗斑岩(1点)、ホルンフェルス(1点)で、砂岩製が礫石器全体の60%以上を占める。

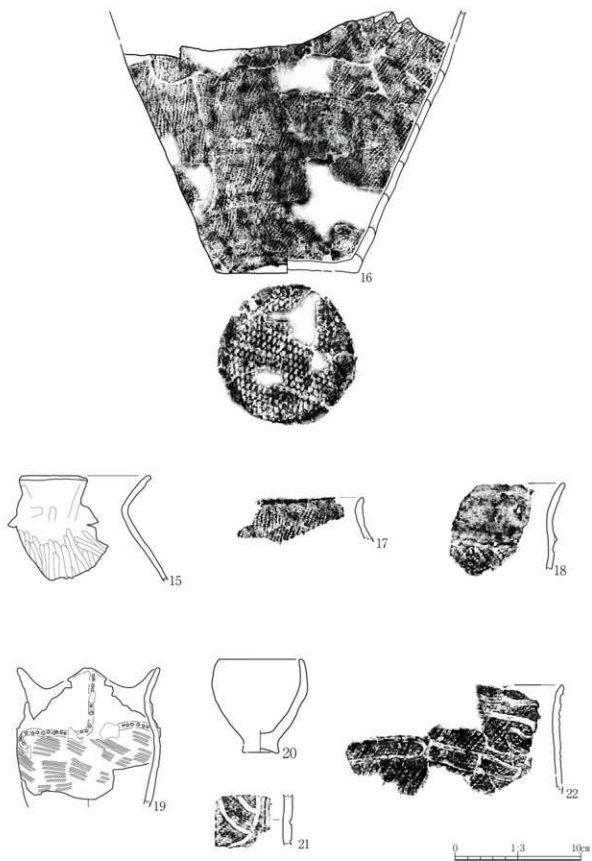
磨製石斧は3点(No92・95・96)掲載した。No92と95は、全体の形状がスリムで全面が研磨されている(※類似性が高い)。No96は仕上がりが具合からは未成品と考えられる。磨石は、礫全面に磨り痕が認められるもの(No70・79・80・93)や礫平坦面に限定的に磨り痕が認められるもの(No74・82・83・85・86)のほかにいわゆる特殊磨石と呼ばれる類(No81・84・97)も出土している。また、磨り痕と敲打痕が併用して認められるもの(No87・98)が少数出土している。No98は敲き磨ったような使用痕が多面に亘り観察できる。磨製石斧などの加工具であろうか。補足として今回磨石と判断した中には、何片かにばらばらの状態で出土し接合したNo79のような資料も散見された。石皿(No75・88)や台石(No69・89・94)は全て破損した状態(破片)で出土した。軽石製のNo88は表面(皿側)には明瞭な稜があり、裏面(底部側)には脚が作出されている。砥石(No99・100)は、砥痕は明瞭とは言えないものの、擦痕が比較的明瞭に認められる。

石製品

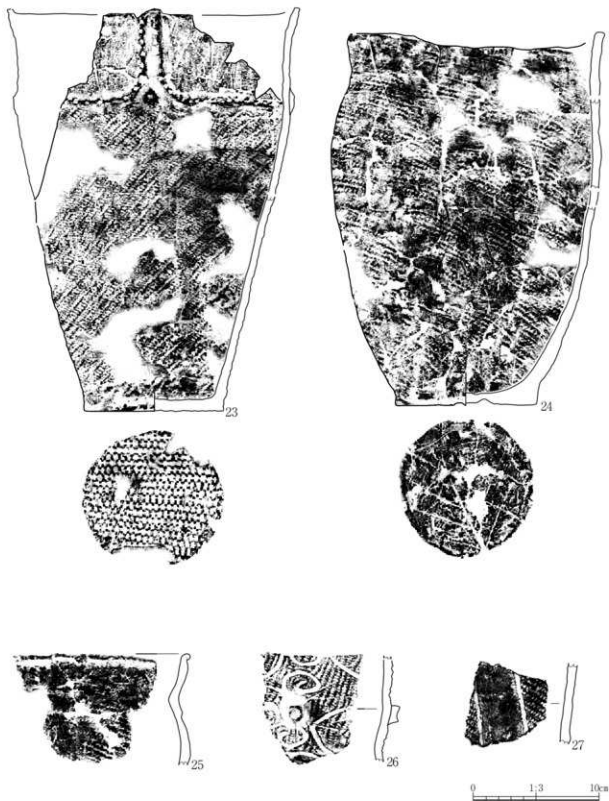
石製品は、石製円盤1点、石棒?1点、棒状礫1点、石刀?1点が出土した。何れも人為の使用・加工痕が明瞭ではなく、自然礫である可能性を有するものも含む。石材は5点中4点を実施し、砂岩2点、閃緑岩1点、頁岩1点である。2点掲載した。



第46图 1・2号住出土土器

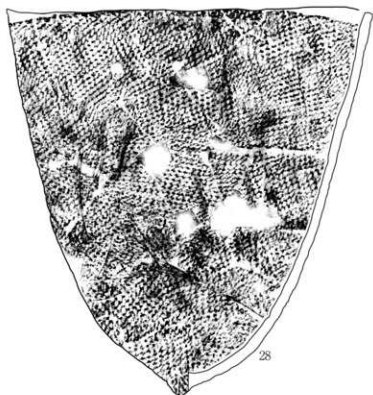


第47图 3号住出土土器

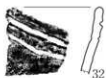
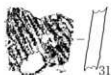


第48図 4号住出土土器

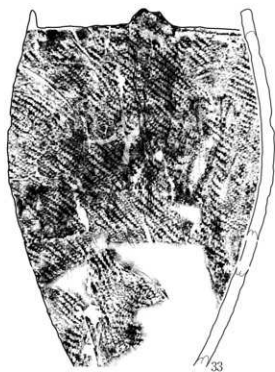
1号土坑



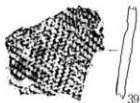
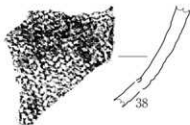
3号土坑



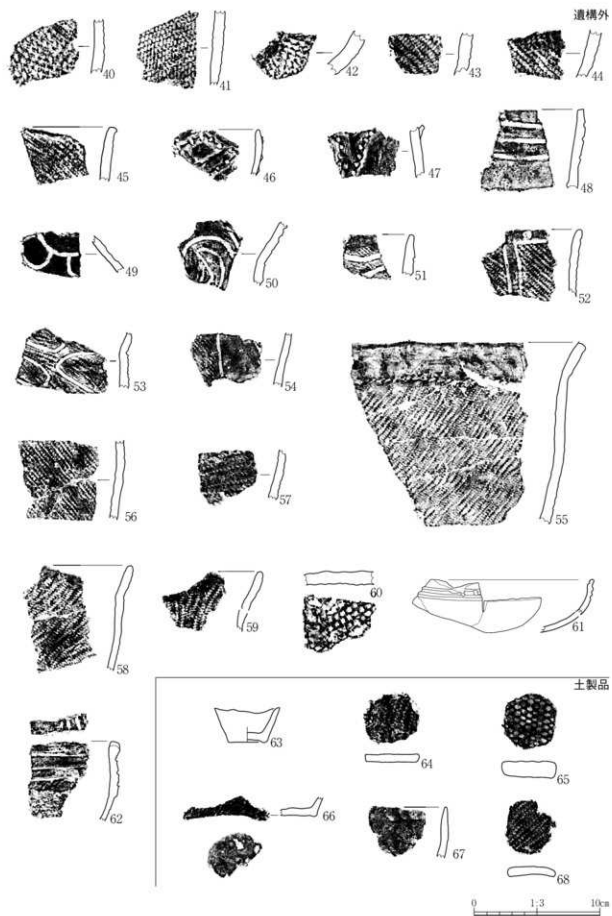
4号土坑



遺構外

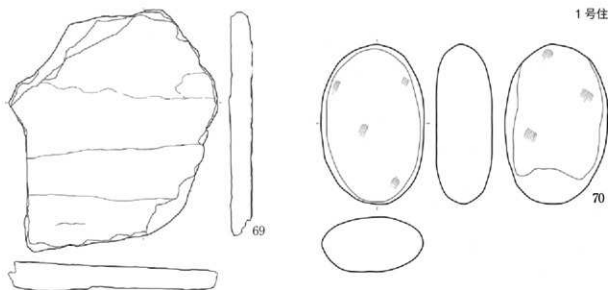


第49图 1·3·4号土坑、遺構外出土器

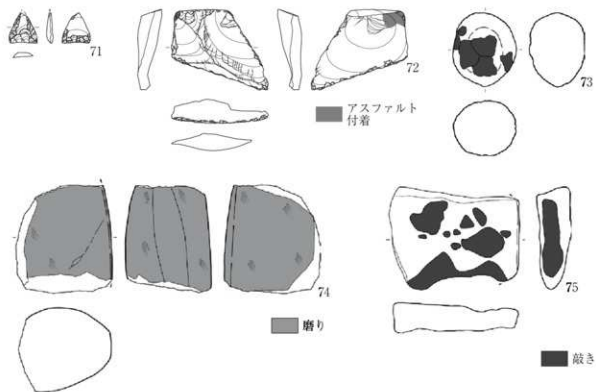


第50図 遺構外出土土器、出土土製品

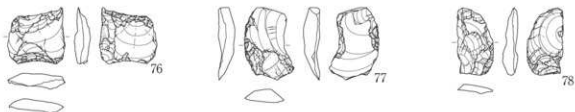
1号住



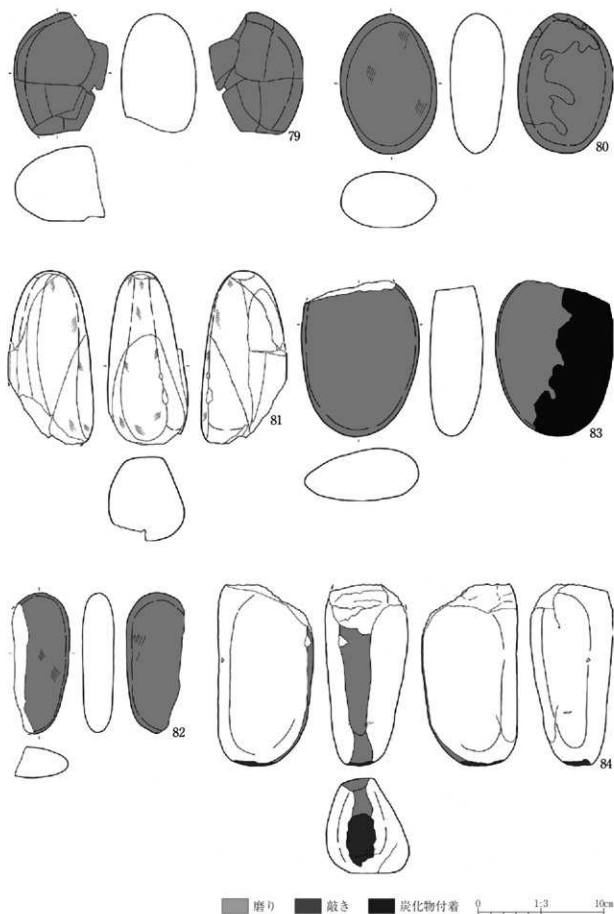
2号住



3号住



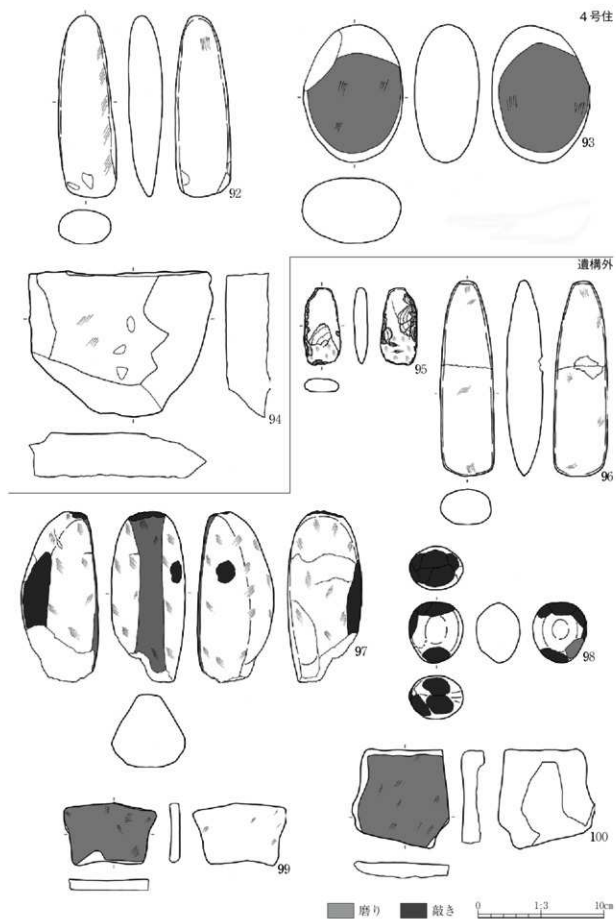
第51図 1～3号住出土石器



第52図 3号住出土石器(2)



第53図 3号住出土石器(3)



第54図 4号住、遺構外出土石器

第5表 土器観察表

No.	遺構名	層位	器種	部位	口縁形状・口唇	文様・彫体・その他	内面	分類	備考
1	1号住	埋土下位	深鉢	口縁部	山形状	沈澱→ボタン状貼付文	ナデ	Ⅱ-b	
2	1号住	床直	深鉢	胴部		RL→横位沈澱		Ⅱ-b	内面縦線痕
3	2号住Q3	床直	壺	胴部		平行沈澱, 無文(胴部に僅小L.R?)	ナデ	Ⅱ-b	
4	2号住Q3	床直	鉢?	胴部		沈澱文(下地は無文)	ナデ	Ⅱ-b	
5	2号住	床直・埋土下位	壺	口-胴部	平縁	横位隆帯(隆帯上に刺突文), 沈澱文		Ⅱ-a	
6	2号住	埋土下位	深鉢	底部		RL, 底部縦文		Ⅱ-d	
7	2号住	埋土中～下位	深鉢	口縁部	小波状	隆帯による溝帯状のモチーフ(隆帯が狭みあり)		Ⅱ-a	
8	2号住	埋土下位	深鉢	口縁部	波状, 刺突	C字状の貼付隆帯(隆帯上に刺突文)	ミガキ	Ⅱ-a	
9	2号住	埋土中位	深鉢	胴部		LR縦→横→貼付隆帯(隆帯上に刺突文)	ナデ	Ⅱ-a	
10	2号住	1層・埋土上位・中位・下位	深鉢	口-胴部	平縁	手輪跡(体系別1類)		Ⅱ-g	Ⅱ-d
11	2号住-1号住	1号住埋土中・2号住1層・埋土中	深鉢	口-胴部	平縁	付加条(L.R+L)	ナデ	Ⅱ-d	書写具不掲載
12	2号住-ベルト	1層	深鉢	口-胴部	波状		ミガキ	Ⅱ	
13	2号住	埋土中	壺?	胴部		沈澱文(下地は無文)	ナデ	Ⅱ-b	
14	2号住	埋土中	深鉢	口縁部		LR縦→沈澱→磨消縄文		Ⅱ-g	Ⅱ-b
15	3号住Q3	床直	壺	口-胴部	平縁	無文(ミガキ), 赤色顔料		Ⅱ-g	Ⅱ-e
16	3号住Q2	埋土下位・中位・床直	深鉢	胴定形		割L.R縦, 底・胴代表		Ⅱ-g	17と同一個体
17	3号住Q2	埋土下位・中位・床直	深鉢	口縁部	平縁	LR縦		Ⅱ-g	16と同一個体
18	3号住	埋土下位	深鉢	口-胴部	平縁	口縁無文, 胴部横位隆帯, 胴部LR縦		Ⅱ-g	Ⅱ-a
19	3号住	埋土下位	深鉢	口-胴部	波状	口・貼付隆帯(隆帯上に刺突文), 胴部LR斜		Ⅱ-g	Ⅱ-a
20	3号住Q4	埋土下位	古付鉢	口-底部	平縁	無文(縦の帯・ミガキ)		Ⅱ-e	
21	3号住Q3	埋土中	深鉢	胴部		RL→沈澱文		Ⅱ-b	
22	3号住Q4	埋土中	深鉢	口-胴部	波状	手輪跡(体系別1類)→沈澱		Ⅱ-g	Ⅱ-b
23	4号住	埋土上位(一括土器?) 中内段上-床直	深鉢	胴定形	平縁, 突起	口・隆帯(隆帯上に刺突文), 割L.R縦, 底・胴代表		Ⅱ-g	Ⅱ-b
24	4号住	埋土上-埋土中	深鉢	胴定形	平縁, 面取り	LR		ナデ	Ⅱ-d
25	4号住	埋土上(一括土器)	深鉢	口-胴部	平縁	LR縦		ナデ	Ⅱ-d
26	4号住	埋土上(一括土器)	深鉢	胴部		LR縦→沈澱文→ボタン状貼付文		ナデ	Ⅱ-b
27	4号住	埋土上(一括土器)	深鉢	胴部		LR縦→沈澱→磨消縄文		ナデ	Ⅱ-b
28	1号土坑	埋土下位(一括土器)	深鉢	定形	平縁	ビッチリ縄文, 種付孔2個		1-b	繊維中量
29	1号土坑	埋土下位	深鉢	口縁部	平縁	彫体不明		ナデ	1-c
30	3号土坑	埋土中	深鉢	口縁部	小波状?	LR横→沈澱→磨消縄文		ナデ	Ⅱ-d
31	3号土坑	埋土中	深鉢	胴部		LR縦		ナデ	Ⅱ-d
32	3号土坑	埋土中	深鉢	口縁部	波状	沈澱, RL		ナデ	Ⅱ-b
33	4号土坑・調査区中央部	埋土中, Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	口-胴部	平縁, 突起(5ヶ所位?)	LR縦基部		ナデ	Ⅱ-d
34	4号土坑	Ⅱ層	深鉢	胴部		LR横位		1-c	繊維中量
35	調査区北部	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁	横付条(隆帯ループ, LR・RL, 赤黒系赤灰沈澱文)		Ⅱ-g	Ⅱ-a
36	調査区中央部	Ⅱ層(To-Cuより下位)	深鉢	口縁部	平縁, 面取り	横付条(隆帯ループ, LR, L.R, 赤黒系赤灰沈澱文)		1-a	繊維中量, 2号住北側付近
37	調査区北西部	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁, 面取り	横付条(隆帯ループ, LR, L.R, 赤黒系赤灰沈澱文)		1-a	繊維中量, 2号住南側付近
38	調査区中央部	Ⅱ層(To-Cuより下位)	深鉢	胴部		ビッチリ縄文		1-b	繊維中量
39	調査区中央部	Ⅱ層	深鉢	胴部		ビッチリ縄文		1-b	繊維中量, 2号住南側付近
40	調査区中央部	Ⅱ層(To-Cuより下位)	深鉢	胴部		ビッチリ縄文		Ⅱ-g	1-b
41	調査区中央部	Ⅱ層(To-Cuより下位)	深鉢	胴部		ビッチリ縄文		1-b	繊維中量, 2号住の南西側付近
42	地点不明(遺構)	層位不明	深鉢	胴部		ビッチリ縄文		Ⅱ-g	1-b
43	調査区中央部	Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	胴部		0段多糸LR, 横位		1-c	繊維中量, 2号住南側付近
44	調査区中央部	Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	胴部		LRL横		Ⅱ-g	1-c
45	調査区中央部	Ⅱ層(To-Cuより下位)	深鉢	口縁部	平縁, 面取り	LR横付加条?)		Ⅱ-g	1-c
46	調査区中央部	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁	貼付隆帯(隆帯上に刺突文)		ナデ	Ⅱ-a
47	調査区北西部	Ⅱ層	深鉢	胴部		貼付隆帯(隆帯上に刺突文)		Ⅱ-g	Ⅱ-a
48	調査区中央部	Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁	横位平行沈澱(3糸)		Ⅱ-b?	2号住の南側付近
49	調査区西部	Ⅱ層	壺	口-胴部		無文, 沈澱		Ⅱ-g	Ⅱ-b
50	調査区北西部	Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	口縁部		LR縦→沈澱文		ナデ	Ⅱ-b
51	調査区北西部	Ⅱ層	深鉢	口縁部	平縁, 面取り	LR→沈澱		ナデ	Ⅱ-b
52	調査区北西部	Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁	LR縦→沈澱→磨消縄文		ナデ	Ⅱ-b
53	調査区北西部	Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	胴部		LR縦→沈澱		ナデ	Ⅱ-b
54	調査区北西部	Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	胴部		LR→沈澱→磨消縄文		Ⅱ-b	
55	調査区西部	Ⅱ層	深鉢	口-胴部	平縁	口縁・無文, 胴部・横位(隆帯上面に直, 胴部・斜)		Ⅱ-g	Ⅱ-c
56	調査区北部	Ⅱ層	深鉢	胴部		付加条(L.R+L)		Ⅱ-d	2号住の北側付近, 内面焼けはじき
57	調査区北西部	Ⅱ層	深鉢	胴部		手輪跡(体系別1類L)		Ⅱ-d	
58	調査区北西部	Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	口縁部	波状	LR縦		ナデ	Ⅱ-d
59	調査区北西部	Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	口縁部	波状	LR縦		ナデ	Ⅱ-d
60	調査区北西部	Ⅱ層	深鉢	底部		胴代表		Ⅱ-d	
61	調査区北部 ～中央部	Ⅱ-Ⅲ層	浅鉢?	胴部		工字文, ミガキ		Ⅱ-g	Ⅱ
62	調査区北西部	Ⅱ-Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁	平行沈澱(3糸)		Ⅱ	

第6表 土製品観察表

No.	出土地点	層位	器種	文様・特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	時期
63	2号住	埋土下位	ミニチュア	無文	器高27	5.2	0.4	27.8	後期初頭
64	2号住Q4	埋土中	円盤状土製品	縁辺打ち欠き1R	3.8	4.3	0.6	15.4	後期初頭
65	3号住Q4	埋土中	円盤状土製品	割代肌, 底面再利用	4.2	4.4	0.8	35.0	後期初頭
66	4号住	埋土中	ミニチュア	底面, 口縁位, 内面焼けほじき	器高16d	3.3	—	12.2	後期初頭
67	3号土坑	埋土中	ミニチュア	口→胴底, 平縁, 無文(手づくね)	器高4d	—	0.5	10.5	後期初頭
68	調査区北部	B-III層	円盤状土製品	縁辺やや磨く, 単輪縁全体1割	3.8	4.0	0.7	15.7	後期初頭

第7表 石器観察表

No.	出土地点	層位	器種	石質	産地	時代	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
69	1号住	床直	台石	ホルンフェルス	北上山塊	中生代白亜紀 に熱変成	135.0	122.0	2.9	2177.2	
70	1号住	床直	磨石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	12.7	8.2	4.4	600.9	
71	2号住	床直	石鏝	頁岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	1.6	1.5	0.3	0.8	
72	2号住	埋土下位	削棒器	頁岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	4.4	5.0	1.2	16.1	
73	2号住Q3	埋土下位	磨石	輝石	美羽山脈	新生代第四期	5.8	5.0	4.4	81.0	
74	2号住ベルト	I層	磨石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	8.6	7.6	2.4	683.5	酒澤有
75	2号住	床直集石	石皿	砂岩	宮古層群 (平井頁岩)	中生代白亜紀	8.2	7.6	2.4	389.4	破片
76	3号住Q4	埋土中	削棒器	頁岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	3.0	3.0	0.9	6.6	
77	3号住	炉直上層	削棒器	頁岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	3.9	2.7	0.9	7.1	細縁に刃部, 片欠
78	3号住Q4	埋土中	Uツレ	頁岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	3.6	1.9	0.8	4.3	
79	3号住Q1	埋土中	磨石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	10.7	7.4	6.0	560.5	7片が結合
80	3号住Q1	埋土下位	磨石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	11.2	7.6	4.4	547.1	
81	3号住Q4	埋土中	磨石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	113.7	6.7	6.7	681.1	特殊磨石
82	3号住Q4	埋土下位	磨石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	11.3	14.5	2.5	197.4	半割
83	3号住Q4	埋土下位	磨石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	11.9	9.0	4.1	715.0	
84	3号住Q4	埋土下位	磨石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	14.4	6.6	7.6	1048.9	特殊磨石, 先端を打ち欠き
85	3号住	床直	磨石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	14.2	9.0	2.8	1008.7	
86	3号住Q4	埋土中	磨石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	12.1	5.9	2.8	267.7	
87	3号住Q3	埋土下位	敲撃石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	9.2	5.5	3.6	252.8	縁打ち直
88	3号住Q4	埋土下位	石皿	輝石	美羽山脈	新生代第四期	19.2	10.1	4.3	309.9	破片
89	3号住	炉直上層	台石	砂岩	宮古層群 (平井頁岩)	中生代白亜紀	113.8	10.0	2.8	483.0	
90	3号住Q4	埋土下位	石製円盤	砂岩	宮古層群 (平井頁岩)	中生代白亜紀	4.5	14.4	1.1	29.7	
91	3号住Q4	埋土中	石製円盤	砂岩	宮古層群 (平井頁岩)	中生代白亜紀	4.9	4.6	1.0	27.8	
92	4号住	埋土中	磨製石斧	花崗閃石	北上山塊	中生代白亜紀	14.5	4.5	2.7	288.7	
93	4号住	埋土中	磨石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	11.0	7.9	5.2	641.3	一端欠損
94	4号住	埋土上	台石	砂岩	宮古層群 (平井頁岩)	中生代白亜紀	111.3	14.0	3.6	810.9	傘一筋土器の輪
95	調査区北西部	B-III層	磨製石斧	頁岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	6.2	2.9	1.0	30.5	小形
96	調査区北部～中央部	II層	磨製石斧	閃緑岩	北上山塊	中生代白亜紀	15.6	4.1	2.8	310.6	
97	調査区北部～中央部	II層	磨石	閃緑岩	北上山塊	中生代白亜紀	113.3	6.1	5.7	656.2	特殊磨石
98	調査区中央部	B-IV層	敲撃石	砂岩	北上山塊 田野畑風岡	中生代前期	4.8	4.3	3.5	99.1	多面体 番号2号住の産出出土
99	調査区中央部	II層	磨石	砂岩	宮古層群 (平井頁岩)	中生代白亜紀	5.0	7.4	10.9	47.8	破片
100	調査区北西部	B-III層	敲撃石	砂岩	宮古層群 (平井頁岩)	中生代白亜紀	7.9	7.7	1.9	118.6	破片

5 自然科学分析

菅窪遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1. 測定対象試料

菅窪遺跡は、岩手県下閉伊郡田野畑村菅窪141-1に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡から出土した炭化物の合計3点である(表1)。

試料が出土した竪穴住居跡は、縄文時代後期初頭～前葉の葦窪式期と考えられている。

2. 測定の意義

葦窪式期の竪穴住居跡の年代を明らかにする。

3. 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1)δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代はδ¹³Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸

めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6. 測定結果

測定結果を表1・2に示す。

試料の ^{14}C 年代は、No.1が $92500 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.2が $3850 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.3が $3780 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は、古い方から順にNo.2が縄文時代後期初頭から前葉頃、No.3が後期前葉頃、No.1が晩期中葉から後葉頃に相当する。(小林編2008)。3号住出土試料No.2・3は、おおむね近い年代を示し、推定される時期とも整合する。1号住出土のNo.1は、推定よりかなり新しい年代値となった。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器。総覧縄文土器刊行委員会。アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves. 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4) 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

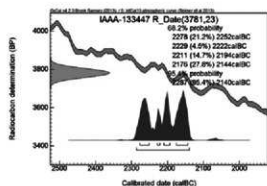
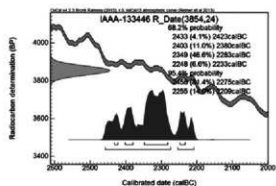
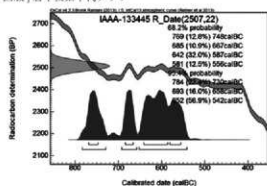
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-133445	No.1	1号住 床直	炭化物	AAA	-19.23 ± 0.33	2,510 ± 20	73.19 ± 0.21
IAAA-133446	No.2	3号住 Q4 埋土下位	炭化物	AAA	-23.16 ± 0.33	3,850 ± 20	61.89 ± 0.19
IAAA-133447	No.3	3号住 炉内	炭化物	AAA	-23.40 ± 0.32	3,780 ± 20	62.45 ± 0.19

表2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-133445	2410 \pm 20	74.04 \pm 0.20	2,507 \pm 22	769calBC - 748calBC (12.8%) 685calBC - 667calBC (10.9%) 642calBC - 587calBC (32.0%) 581calBC - 556calBC (12.5%)	784calBC - 730calBC (22.4%) 693calBC - 658calBC (16.0%) 652calBC - 542calBC (56.9%)
IAAA-133446	3,820 \pm 20	62.12 \pm 0.19	3,854 \pm 24	2433calBC - 2423calBC (4.1%) 2403calBC - 2380calBC (11.0%) 2349calBC - 2283calBC (46.6%) 2248calBC - 2233calBC (6.6%)	2458calBC - 2275calBC (81.4%) 2255calBC - 2209calBC (14.0%)
IAAA-133447	3,780 \pm 20	62.66 \pm 0.18	3,781 \pm 23	2278calBC - 2252calBC (21.2%) 2229calBC - 2222calBC (4.5%) 2211calBC - 2194calBC (14.7%) 2176calBC - 2144calBC (27.8%)	2287calBC - 2140calBC (95.4%)

[参考値]

[図版] 暦年較正年代グラフ



6 総括

今回の調査は、三陸沿岸道路建設に伴い1,600㎡の調査を実施した。出土した土器は全て縄文時代で、前期前葉(I群)、後期初頭～前葉(II群)、晩期後葉(III群)の3つの時期に限定される様相にある。ここでは、I群土器の時期を菅窪I期、II群土器の時期を菅窪II期、III群土器の時期を菅窪III期と呼称して総括する。

検出遺構は、I期が土坑1基、II期が竪穴住居跡4棟と土坑2基で、III期は遺構未検出にある。その他に中期前半の可能性がある陥し穴1基(※中期の土器は出土していない)、時期不明の焼土遺構2基(後・晩期の可能性を有するが時期を特定できない)がある。

出土遺物は、土器大コンテナ3箱分、石器類1.5大コンテナ箱分、土製品6点である。出土土器の傾向としては、遺構内は後期初頭～前葉、遺構外は前期前葉が多い。晩期後葉は数点の出土である。石器類は、礫石器が多く、剥片石器や石製品は非常に少ない。

(1) 時期毎の概要

菅窪I期とした前期前葉は、底部尖底で組縄縄文を施文する完形土器が出土した1号土坑や、大木1式を中心とする遺物包含層(IV層)を検出した。1号土坑は、平面形状は円形で、規模が直径約2.5mを測る大形の土坑である。断面形の状況や深さなどを見る限り、いわゆるフラスコ状土坑でない。この土坑の南側底面において組縄縄文を施文する底部尖底の土器(Na28)が一括出土した。前期前葉土器は大木1式を中心とする一方で、早稲田6類cとの関連も窺える内容と捉えられることから、この内容については若干の考察として後述することとする。なお、I期の石器類について、確実に本期に帰属するものは不明にある(IV層からの出土がほとんどなく、特定できない)。

菅窪II期とした後期初頭～前葉上村・葦窪式期は、竪穴住居跡4棟と土坑2基を検出し、当該期の小規模な集落跡と判断される。竪穴住居跡は、平面形が楕円形を基調とし、規模は最大長で5～6.5m、炉は地床炉と石囲炉がある。また、精査過程では、焼失家屋と推定される炭化物や焼土ブロックが顕著に認められた。それらの配置は弧状に巡る様子にある。調査区外北側は、岩手県教育委員会生涯学習文化課の試掘調査によれば遺構・遺物ともに出土していないことから、削平により消失した可能性もある。調査区外北側に竪穴住居が展開していたと仮定すれば、環状気味に配列される可能性も考えられる。出土土器は上村式と葦窪式に相当するものが出土した。ただ、県南部中心に分布する門前式に類似した属性も認められる。また、本来上村式と葦窪式は分離・区分される土器型式と捉えられるが、2・3号住の土器出土状況を見る限り、葦窪式を中心に上村式と思われる土器も僅かながら共存気味に出土していることから、両者を積極的にには区分していない。無論、筆者の観察眼に起因して、両者の区分が曖昧になった感も否めない。石器は竪穴住居跡を中心に出土した。石器組成を見る限り、剥片石器は非常に少なく、礫石器の割合が高い。加えて、石棒・石刀などの石製品類や、土製品も非常に少ないことが指摘されよう。

菅窪III期は、晩期後葉大洞A式の土器が数点出土した。この内容からは、遺物の散布が認められたに過ぎず、多くを言及できない。

(2) I群土器の若干の考察

I群土器は、胎土中に繊維の混入が認められる深鉢形土器で、文様は地文のみで構成される土器群

である(沈線や刺突など特徴的な文様は伴わない)。縄文前期初頭長地谷Ⅲ群相当の特徴を持った土器が看取されないことから、全て前期前葉と捉えた。

その中で、特殊性の高い種類の縄文・手法が認められる土器として、I群a類としたループ文や、I群b類とした組縄縄文が挙げられる。その他にI群c類として一括した土器類にはLRやRLRなどが見られ、それら縄文原体の燃り始めは、0段左燃りを基調とする。また、今回の調査では、組紐、単軸絡糸体(不整燃糸文、木目状燃糸文、網目状燃糸文など)を施文する土器は認められない。本群土器は、全体の器形が窺えるのは砲弾型で全面に組縄縄文を施文し底部尖底のNo28のみで、他は全て破片のため全体形状だけでなく底部形態についても不明にある。口縁部が遺存する資料を見る限り、全て平縁で、口唇部は平滑に仕上げられている。本群土器の出土層位としては、To-Cuより下位の土層からの出土が顕著にあることから、To-Cu降下期より古い時期に相当することも言及できよう。また、36のループ文と38・40・41の組縄縄文を施文するものは共伴気味に出土している。

上述の内容を総括すると、I群土器は大木1式及びその並行期の土器群と考えられる。加えて、今回の調査では大木2a式など、大木1式より新相の土器は認められない。組縄縄文を施文する土器は、砲弾型を呈する底部尖底の器形的特徴から、平底とされる大木1式に比定させることは現段階では躊躇が拭えない。底部尖底で組縄縄文を施文する土器は、高橋亜貴子氏の論考(高橋:1992)や八戸市植館遺跡報告書(青森県教育委員会:2003)中のまとめの項などを参照すると、前期前葉早稲田6類cに対比される可能性がある。また、今回の調査では早稲田6類a・bに比定できるものは出土していない。上述してきた内容から、仮に組縄縄文の中心時期を早稲田6類cに求めると、前期大木式と早稲田6類cの並行関係を考える上で、良好資料を提供する可能性がある。

三陸沿岸北部において、早稲田6類土器出土事例としては、洋野町(旧種市町)ゴッソー遺跡(早稲田6類a・b・c、大木1~2a)、久慈市本波Ⅷ遺跡(早稲田6類c、大木1式)、野田村中平遺跡(早稲田6類a・b、大木2a式など)、田野畑村机遺跡(早稲田6類c、大木1式)、宮古市田老区小堀内I遺跡(早稲田6類c、大木1式)などが挙げられ、事例は確実に蓄積が見られる(※記載した土器型式名は報文の記述以外に筆者の型式判断も加えたので、誤認あれば筆者の責任で記述する)。組縄縄文が出土している本波Ⅷ遺跡、机遺跡、小堀内I遺跡からは、早稲田6類a・bや大木2a式の特徴を持った土器は散見できない。対して、早稲田6類a・bが出土し尚且つ早稲田6類cが認められない(※認め難い)中平遺跡は、組縄縄文が伴わず、尚且つ本遺跡から出土が無い大木2a式や、結束羽状縄文を施文する土器が多いことが指摘できそうな事例である。

従来から早稲田6類は前期大木式より古い時期とのふしがあるものの、上記してきた早稲田6類と大木1~2a式の共伴事例から考察を試みると、両者の並行関係や早稲田6類の中での新旧の輪郭が見えてくるように思われる。層位的な裏付けが弱い事例もあり予察的な内容にあることは否めないが、早稲田6類a・bに対して早稲田6類cは、大木式を介在して捉えると時期差を持つ可能性があり、早稲田6類cが大木1式に、早稲田6類a・bは大木2a式(※大木1式とも重複する可能性もあるが保留としておきたい)を中心に並行する可能性が考えられる。併せて、大木1式や大木2a式は平底の土器であるが、東北地方北部においては、底部尖底の属性が存在するか若しくはそれらの並行期(早稲田6類など)の土器と融合する形で平底と尖底が存立している可能性なども考えられる。早稲田6類と大木式の関係については、今後も更なる検討を志向していきたいと考える。

最後に、菅窪遺跡の今回の調査成果からは、三陸沿岸北部地域における課題の一端を覗くことができたように思われる。この地域は東日本大震災の復興関連事業に伴い、今後も多くの遺跡が調査予定である。調査で明らかとなった成果と課題、及び自然災害との関係などを視野に入れ遺跡の内容を検

討することで、今後への問題提起や減災などへの一助を提供できれば幸いと考える。

参考・引用文献

- 熊谷常正 1989「岩手県内の早期後半から前期初頭の土器群について」〔東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について〕第4回縄文文化検討会シンポジウム 縄文文化検討会
- 酒井宗孝 1987「岩手県北部における縄文中期後葉から後期前葉の住居跡」
『紀要Ⅶ』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋重貴子 1992「東北地方縄文時代前期前葉組縄文について」
『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念 p593～632
- 田野畑村史編さん委員会 1985「田野畑村史」
- 本間宏 1987「縄文時代後期初頭土器群の研究（1）～東北地方北部を中心に～」〔よねしろ考古〕第3号 p31～50
- 本間宏 1988「縄文時代後期初頭土器群の研究（2）」〔よねしろ考古〕第4号 p71～84
- 宮原俊一 2009「回転施文の特質から導く縄紋の比較・同定試論－王子ノ台遺跡方形周溝墓出土の土器を例に－」
『日々の考古学』2 東海大学文学部考古学研究室編 p173～188
- 三宅徹也 1989「早稲田6類と表館式の関係」〔東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について〕第4回縄文文化検討会シンポジウム 縄文文化検討会
- 武藤康弘 2008「表館式・早稲田6類土器」〔縄文総覧〕小林達雄編 p210～217
- 【報告書関連】
- 青森県教育委員会 2003「橋館遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第342集
- 青森県教育委員会 2004「長久保（2）遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書第367集
- 野田村教育委員会 2013「中平遺跡発掘調査報告書-143地点-」野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 田野畑村教育委員会 2007「館石野Ⅰ遺跡第9次～14次調査報告書」田野畑村文化財調査報告書第14集
- 田野畑村教育委員会 2008「和野Ⅰ遺跡第4次調査報告書」田野畑村文化財調査報告書第16集
- 田野畑村教育委員会 2013「肌道跡調査報告書」田野畑村文化財調査報告書第19集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（※以下（財）岩手埋文と省略）1979「沢内B遺跡発掘調査報告書」
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第7集
- （財）岩手埋文 1983「小瓶内Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第52集
- （財）岩手埋文 1994「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第238集
- （財）岩手埋文 1994「寺久保遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第239集
- （財）岩手埋文 2001「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第357集
- （財）岩手埋文 2004「和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第452集
- （財）岩手埋文 2004「和野ソマナイ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第466集
- （財）岩手埋文 2007「千足南遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第496集
- （財）岩手埋文 2009「本波Ⅶ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第536集

写 真 图 版
(菅 窪 遺 跡)



調査区 遠景(直上→)



調査区 全景(直上→)



調査前風景



調査区北部～中央部 (E→)



調査区北部～中央部 (E→)



調査区中央部 (E→)



調査区北部 (S→)



住居群 (W→)



調査区 全景 (W→)



調査区 全景 (N→)

写真図版33 調査前風景、トレンチ、調査区全景



1号住 全景(NE→)



1号住 断面(W→)



1号住 断面(S→)



1号住 炉 断面(S→)



1号住 炉 断面(W→)



2号住 全景(N E→)



2号住 断面(W→)



2号住 炉 全景(N E→)



2号住 炉 断面(W→)



2号住 炉 横出(S W→)



3号住 全景(S→)



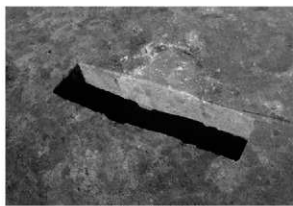
3号住 断面(W→)



3号住 土器出土状況(E→)



3号住 土器出土状況(S→)



3号住 炉 断面(S→)



4号住 全景(S E→)



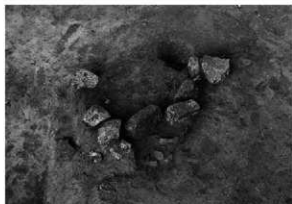
4号住 断面(S→)



4号住 断面(W→)



4号住 炉 検出(E→)



4号住 炉 全景(S E→)



4号住 炉 断面(N→)



4号住 土器出土状況(S→)



4号住 土器出土状況(E→)



1号土坑 全景(S→)



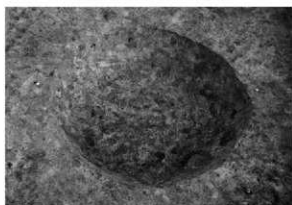
1号土坑 断面(S→)



1号土坑 土器出土状况(NW→)



1号土坑 土器出土状况(NW→)



3号土坑 全景(W→)



3号土坑 断面(S→)



4号土坑 全景(S→)



4号土坑 断面(S→)



1号陥し穴 全景(W→)



1号陥し穴 断面(S→)



1号焼土 全景(SE→)



1号焼土 断面(S→)



2号焼土 全景(SE→)



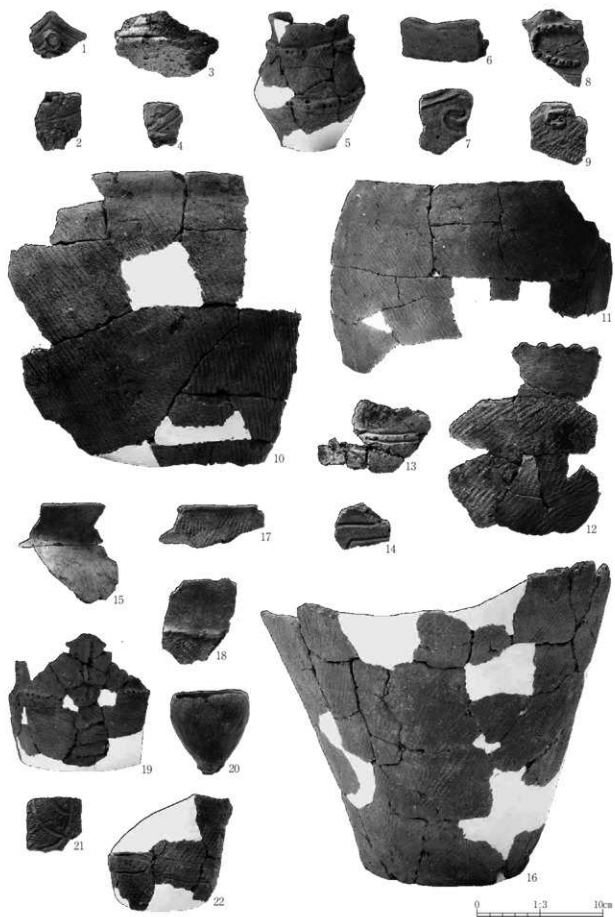
2号焼土 断面(SE→)



作業風景



作業風景



写真図版40 1～3号住出土土器



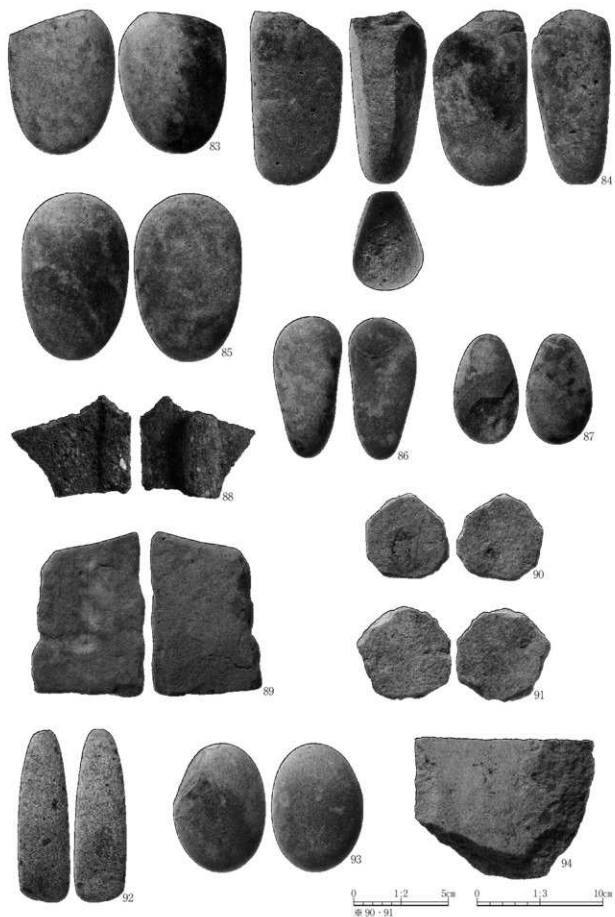
写真图版41 4号住、1号土坑出土土器



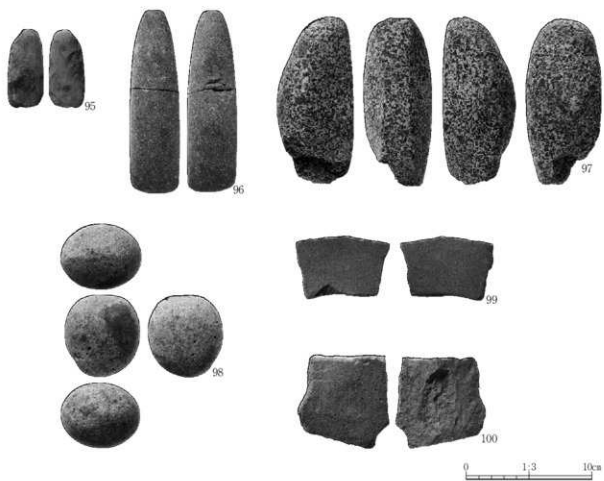
写真図版42 3・4号土坑、遺構外出土土器、土製品



写真図版43 1～3号住出土石器



写真図版44 3・4号住出土石器



写真図版45 遺構外出土石器

報告書抄録

ふりがな	しまのこし2いせき・しまのこし14いせき・すけのくぼいせきはつちょうきほうこくしょ							
書名	鳥越Ⅱ遺跡・鳥越XIV遺跡・首窪遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第645集							
編著者名	小林弘卓・星雅之・立花雄太郎							
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019)638-9001							
発行年月日	2015年3月13日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
鳥越Ⅱ遺跡	岩手県下閉伊郡 田野畑村鳥越309-214 か	03484	KG33-2047	39度 53分 53秒	141度 54分 39秒	2013.07.01 ～ 2013.08.09	3,100㎡	三陸沿岸道路 関連発掘調査
鳥越XIV遺跡	岩手県下閉伊郡 田野畑村鳥越302-214 か	03484	KG33-2058	39度 53分 45秒	141度 54分 43秒	2013.08.19 ～ 2013.11.22	1,400㎡	三陸沿岸道路 関連発掘調査
首窪遺跡	岩手県下閉伊郡田野 畑村首窪141-1	03484	KG22-2345	39度 55分 7秒	141度 53分 52秒	2013.10.15 ～ 2013.11.15	1,600㎡	三陸沿岸道路 関連発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳥越Ⅱ遺跡	狩猟場	縄文時代	竪穴住居跡 土坑 土隔し穴	1棟 2基 17基 縄文土器				
鳥越XIV遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土坑 土焼土遺構 遺物包含層	6棟 7基 2基 縄文土器、石器、石製品				
首窪遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土坑 土隔し穴 土遺構	4棟 3基 1基 2基 縄文土器、石器				
要 約								
鳥越Ⅱ遺跡	西側の山地から繋がる標高210m台の丘陵地上に立地する遺跡である。調査の結果、隔し穴が分布する狩猟場であったことが明らかとなった。また、調査区南端では石囲垣を有する竪穴住居跡も確認された。							
鳥越XIV遺跡	西側の山地から繋がる標高190m台の丘陵地上に立地する遺跡である。調査の結果、尾根上から南側の緩斜面部において、竪穴住居跡や貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑が複数確認された。竪穴住居跡は、いずれも石囲垣を伴うもので、縄文時代中期後葉のものと考えられる。今回の調査区は狭小な範囲であったため遺跡の全容は不明だが、東側に集落の主体が続く可能性が考えられる。							
首窪遺跡	今回の調査では、縄文時代後期初葉～前葉の集落跡であることが明らかとなった。また、1号土坑から前期前葉の組縄文土器を施す完形土器が得られた。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第645集
鳥越Ⅱ遺跡・鳥越XIV遺跡・菅窪遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成27年3月5日

発行 平成27年3月13日

- 編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019)638-9001
- 発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号
電話 (0193)71-1724
- (公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019)654-2235
- 印刷 株式会社モノグラム社
〒024-0034 岩手県北上市諏訪町一丁目3-21
電話 (0197)65-3315